

第71図 土坑(1)

む暗褐色土、2—スコリアと少量の炭化物を含み、若干しまりのある淡褐色土、3—ロームブロックを含む明褐色土、4—黄褐色土。

#### 4号土坑（第71図）

土坑の集中する12—C区に検出され、形態はほぼ円形を呈し、長径0.83m、短径0.80m、深さ0.12mを測る。断面形は浅い鉢形で、覆土は1—粒子は細かく、ローム粒混入のため黄色味を帯びる褐色土、2—ロームブロック、3—1に類似し、若干炭化物を含む褐色土。

#### 5号土坑（第71図）

土坑の集中する12・13—C区に検出され形態はほぼ円形で、長径0.89m、短径0.89m、深さ0.28mを測る。底部は平坦である。覆土は1—ローム粒と炭化物の混入する黒褐色土、2—ロームブロックを混入する褐色土、3—ロームブロック。

#### 6号土坑（第71図）

土坑の集中する12—C区に検出され、形態は不整橢円形を呈する。長径1.08m、短径0.81m、深さ0.24mで、浅い擂鉢状を呈する。覆土は1—褐色土を含む黒褐色土、2—黒褐色土を含む褐色土、3—ローム粒を混入する黒褐色土、4—ローム粒を混入する褐色土、5—ロームブロックを混入するソフトローム。

#### 7号土坑（第71図）

土坑の集中する12—C区に検出され、形態は不整円形で、長径0.61m、短径0.6mを測る小形の土坑である。深さは0.2mで、覆土は1—粒子は細かく、炭化物少量とローム粒を含む黒褐色土、2—細かい粒子の褐色土、3—ロームブロックを含む褐色土。

#### 8号土坑（第71図）

土坑の集中する12—C区に存在し、形態は不整円形で、長径0.63mを測る。深さは0.35mで、断面はV字形に近く、西側の壁が急になる。覆土は1—炭化物、白色スコリアを含む堅い黒褐色土、2—赤色スコリアを含む褐色土、3—ロームブロックを含む褐色土。

#### 9号土坑（第71図）

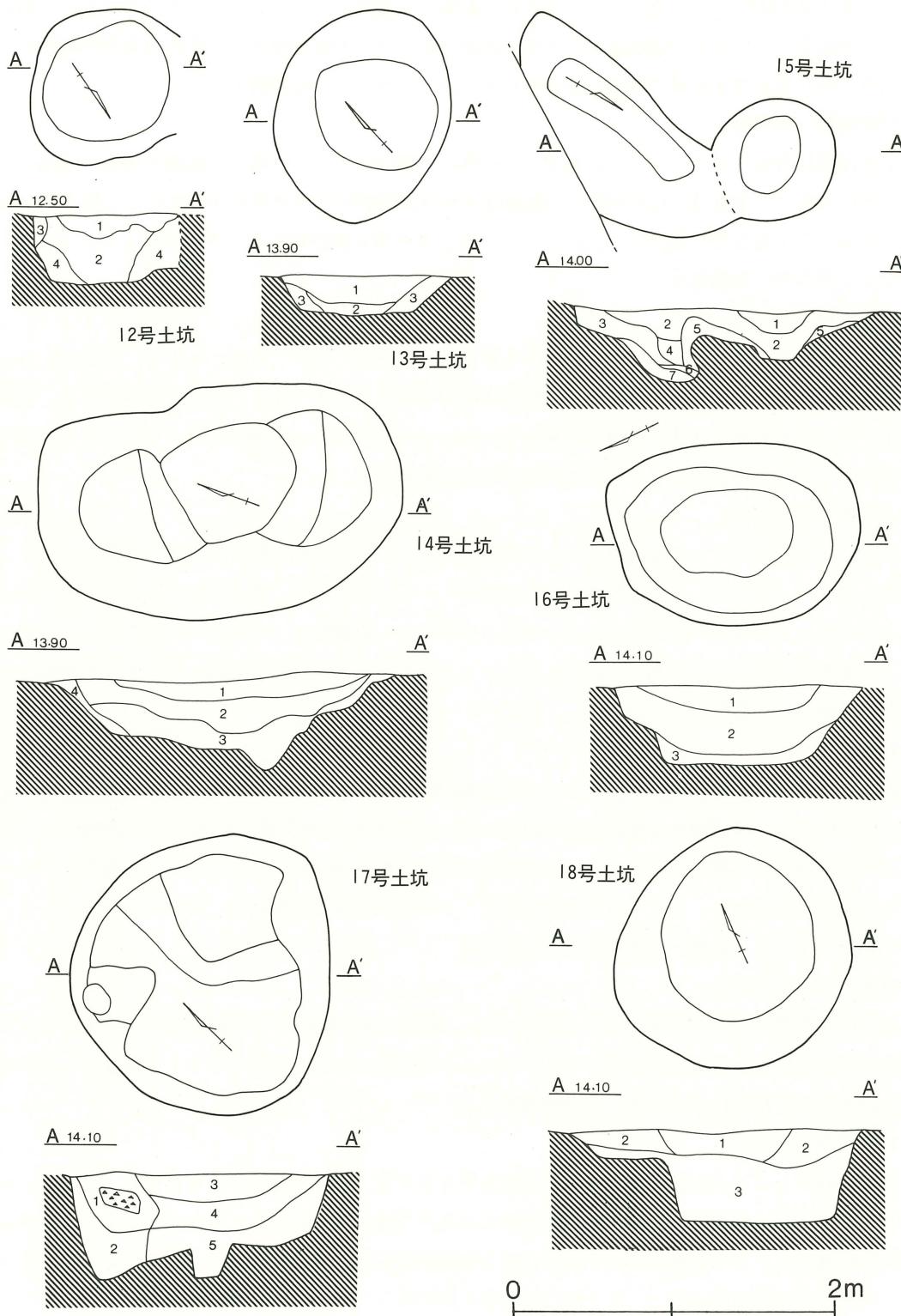
土坑の集中する12—C区に存在し、形態は不整円形で、長径0.5m、短径0.48mを測る。深さは0.26mで、断面V字形に近い。覆土は1—ローム粒子混入のため2層より明るい黒褐色土。炭化物少量混入、2—炭化物が若干混入する黒褐色土、3—粒子が細かいローム粒子を多量に含有する褐色土、4—ロームブロック層。

#### 10号土坑（第71図）

土坑集中地点の中でも僅かに西に離れる、13—C区に存在する。形態は不整円形で、長径0.92m、短径0.88m、深さは0.28mを測り、壁は垂直に立ち上がる。覆土は1—ローム粒を混入する褐色土、2—ローム粒・炭化物・焼土が混入する、堅い黒褐色土、3—ローム粒子が多い暗褐色土、4—ローム粒子が混入し、土器を含む3層より明るい暗褐色土。

#### 11号土坑（第71図）

10号と同様13—C区に存在する。形態は円形で、長径1.15m、短径1.14m、深さ1.09mを測るやや大形の土坑である。断面は壁が垂直に立ち上がり、底面は水平である。覆土は1—遺物を包含する黒



第72図 土坑(2)

色土、2—炭化物粒子と赤色スコリアを含む、粘性ある褐色土、3—ロームブロック、4—2層に比べロームブロックが多い褐色土、5—若干の炭化物とローム粒子を含み、粘性に富む暗褐色土、6—ロームブロックを多量に含み、しまりがなくパサパサしている褐色土。

#### 12号土坑（第72図）

2号埋甕に近接する26—C区に存在する。形態は不整円形で、西壁側が不明瞭である。長径・短径とも0.96mで、深さは0.4mを測る。断面は壁がほぼ垂直で、底面は水平に近い。土層は1—ロームブロックを若干含む褐色土、2—ロームブロックを多く含む褐色土、3—暗褐色土、4—ロームブロックの多い暗褐色土。

#### 13号土坑（第72図）

24—D区に検出されたが、僅かに楕円形を呈する。長径は1.33m、短径1.06mで、深さは0.24mを測る。長径方向はN—60°—Eを指す。断面は壁が直線的に大きく開き、底面は平坦である。土層は1—テフラと赤色スコリアを含む黒褐色土、2—ブラックバンド上層のロームブロックと、若干の炭化物を含む黒褐色土、3—若干の炭化物を含む暗褐色土。

#### 14号土坑（第72図）

24—C・D区にわたって検出されたやや大形の土坑で、形態は楕円形を呈する。長径は2.25m、短径1.43mで、深さは0.57mを測る。長径方向はN—27°—Wを指す。壁は凹凸をもって、緩やかに立ち上がる。土層は1—赤色スコリアを含む、やわらかい暗褐色土、2—ローム粒を含み、1層と比べやや堅く黄味を増す暗褐色土、3—赤色スコリアと若干の炭化物を含み、柔らかいが粘性に富む黒褐色土、4—褐色土。

#### 15号土坑（第72図）

24—D区、14号土坑の東に存在する。円形と楕円形の二基が重複しているが、円形は径0.75m前後、深さ0.28m、楕円形は長径1.75m、短径0.8m、深さ0.45mを測る。土層は1—黒色土とロームブロックを含む明褐色土、2—ローム粒少量、炭化物微量を含み、しまりのよい茶褐色土、3—ローム粒子を微量含む、しまりのよい暗褐色土、4—粘性のある黒褐色土、5—ロームブロック、6—黒褐色土、7—粘性、しまりのある褐色土。

#### 16号土坑（第72図）

22—C区に検出された長径1.6m、短径1.14m、深さ0.48mを測るやや楕円形の土坑である。土層は1—粘土粒子を含む褐色土層、2—小ブロック状の粘土粒子と黄色スコリアを少量含む暗黄褐色土、3—荒い粘土粒子を多量に含む黄褐色土。

#### 17号土坑（第72図）

16号に隣接して22—C区に検出され、不整円形を呈する。壁は急傾斜で立ち上がる。土層は1—貝をブロック状に含み、有機質に富む暗褐色土、2—1層に比べ粘性、締りは若干あるが、粒子は細かい暗褐色土、3—赤色スコリアと粗い粘土粒子を若干含む暗黄褐色土、4—粗い粘土粒子がブロック状に含まれる黄褐色土、5—粗い粘土を多量に含み、締りのある黄褐色土。

#### 18号土坑（第72図）

17号土坑の北西側に隣接し、22—C区に検出されたほぼ円形の土坑である。底はほぼ水平、壁は

ほぼ直線的に立ち上がる。長径は1.5m、短径は1.44m、深さは0.57mを測る。土層は1—粗い粒子の褐色土、2—小ブロック状にみられる粘土粒子と、黄色スコリアが若干混入する暗黄褐色土、3—粗い粘土粒子を若干含む暗褐色土。

#### 19号土坑（第73図）

土坑集中地域である20—D区から検出されたやや大形の不整形土坑である。長径は1.96m、短径は1.44m、深さは0.42mを測る。壁は緩やかな立ち上がりである。土層は1—粗い粘土粒と炭化物・赤色スコリア若干含む褐色土、2—粗い粘土粒を多量と炭化物を少量含む黄褐色土、3—粗い粘土粒を多量、炭化物・赤色スコリアを微量含む黄褐色土、4—粗い粘土粒と炭化物・赤色スコリアを若干含む、締りの強い暗褐色土。

#### 20号土坑（第73図）

土坑集中地域の20—C区に検出された。形態は僅かに橢円形を呈し、一端にピットがある。長径1.45m、短径1.1m、深さ0.36mである。土層は1—締り・粘性のある暗褐色土、ロームブロックを混入し、粘性のある明褐色土。

#### 21号土坑（第73図）

土坑集中地域の19—C区に検出された。形態は不整形で、底にはピットが2つある。長径は1.35m、短径は0.93m、深さは0.15mと浅い。土層は1—粘土粒子が若干含まれる、堅い褐色土、2—より粘土粒の多い褐色土。

#### 22号土坑（第73図）

土坑集中地域の19—C区に検出された。形態はやや橢円形。底にPitが1つある。長径は1.2m、短径は0.88mで、深さは0.24mである。土層は1—粘土ブロック、黄色スコリアを若干含む暗褐色土、2—粗い粘土粒を多量に含む黄褐色土、3—2層と類似するが、締りがある、4—2層に類似するが、炭化物も含む、5—粗い粘土粒子、炭化物を少量含む褐色土、6—明黄褐色土。

#### 23号土坑（第73図）

土坑集中地点の19—C区に検出された。形態は不整形。長径1.51m、短径1.34m、深さは西側が深く、0.37mを測る。土層は1—粗い粘土粒と炭化粒を若干含む暗褐色土、2—細かい粘土粒を多量に含み、締りのある明黄褐色土、3—粗い粘土粒を多く含む黄褐色土、4—粗い粘土粒を若干と炭化粒を少量含む褐色土。

#### 24号土坑（第73図）

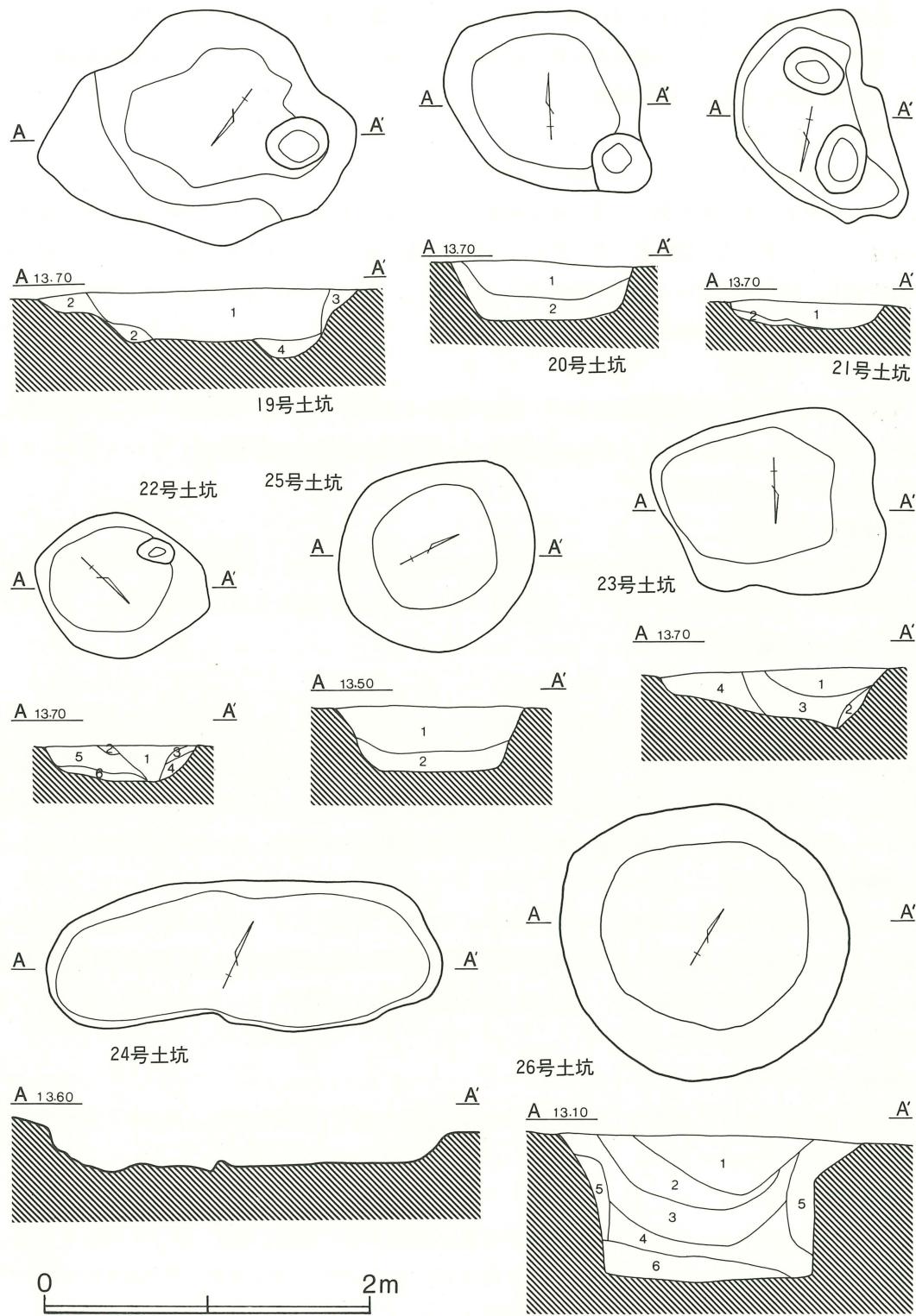
18—B区に検出され、形態は不整橢円形である。長径2.43m、短径0.92m、深さは0.25mを測る。長軸方向はN—61°—Eを指す。

#### 25号土坑（第73図）

18—C区に検出され、形態はほぼ円形を呈する。長径1.3m、短径1.16m、深さ0.39mを測る。底面は水平で、壁はやや開き気味である。土層は1—ロームブロック・スコリア・炭化物を含む黒褐色土、2—ロームブロックを多く含む暗褐色土。

#### 26号土坑（第73図）

15—B区に検出されたやや大形の土坑で、形態は円形を呈する。長径は1.84m、短径は1.69m、



第73図 土坑(3)

深さは0.90mと深い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底は水平である。土層は1—多くの炭化物を含む黒褐色土、2—スコリアを含む黒褐色土、3—ロームブロックが多い黒褐色土、4—炭化物・スコリアを若干含む、しまりのない暗褐色土、5—褐色土、6—ロームブロックを多量に含み、パサパサする暗褐色土。

#### **27号土坑（第74図）**

26号土坑の東に近接する15—D区に検出された。形態はほぼ円形で、長径0.85m、短径0.8m、深さは0.36mを測る。底は水平、壁は直線的に開く。土層は1—ローム粒を含む明褐色土、2—ローム粒・炭化物を含む、締りのある褐色土。

#### **28号土坑（第74図）**

19—B区に存在するが、北側約 $\frac{1}{3}$ を3号地下式坑に切られている。形態は不整形であり、西壁が直線的に走る。長径0.96m、短径は残存で0.67m、深さは0.51mを測る。底は水平で、壁は垂直に立ち上がる。土層は1—締りがなく、ぼろぼろした黄褐色土、2—約0.2cmのロームブロックを多量に含む黄褐色土。

#### **29号土坑（第74図）**

18—B区に存在し、28号土坑と同様西側約 $\frac{1}{3}$ を、3号地下式坑によって切られている。形態は不整円形を呈し、長径1.06m、短径0.9mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.62mを測る。土層は1—ローム粒を微量含む、締りのない褐色土、2—ローム粒・炭化物を微量含む褐色土、3—ローム粒を微量含む、締りのない明褐色土、4—0.3~0.4cmのロームブロックを含む暗褐色土。

#### **30号土坑（第74図）**

18—B区に検出された、形態はほぼ円形の土坑である。長径は1.19m、短径は1.03m、深さは0.26mを測る。底は水平で、壁は開く。底から0.08m浮いた2層中から、大形土器片が出土した。土層は1—暗褐色土、2—より黒い暗褐色土、3—ロームブロックを含む、締りのある黒褐色土、4—ロームブロックを少量含む褐色土。

#### **31号土坑（第74図）**

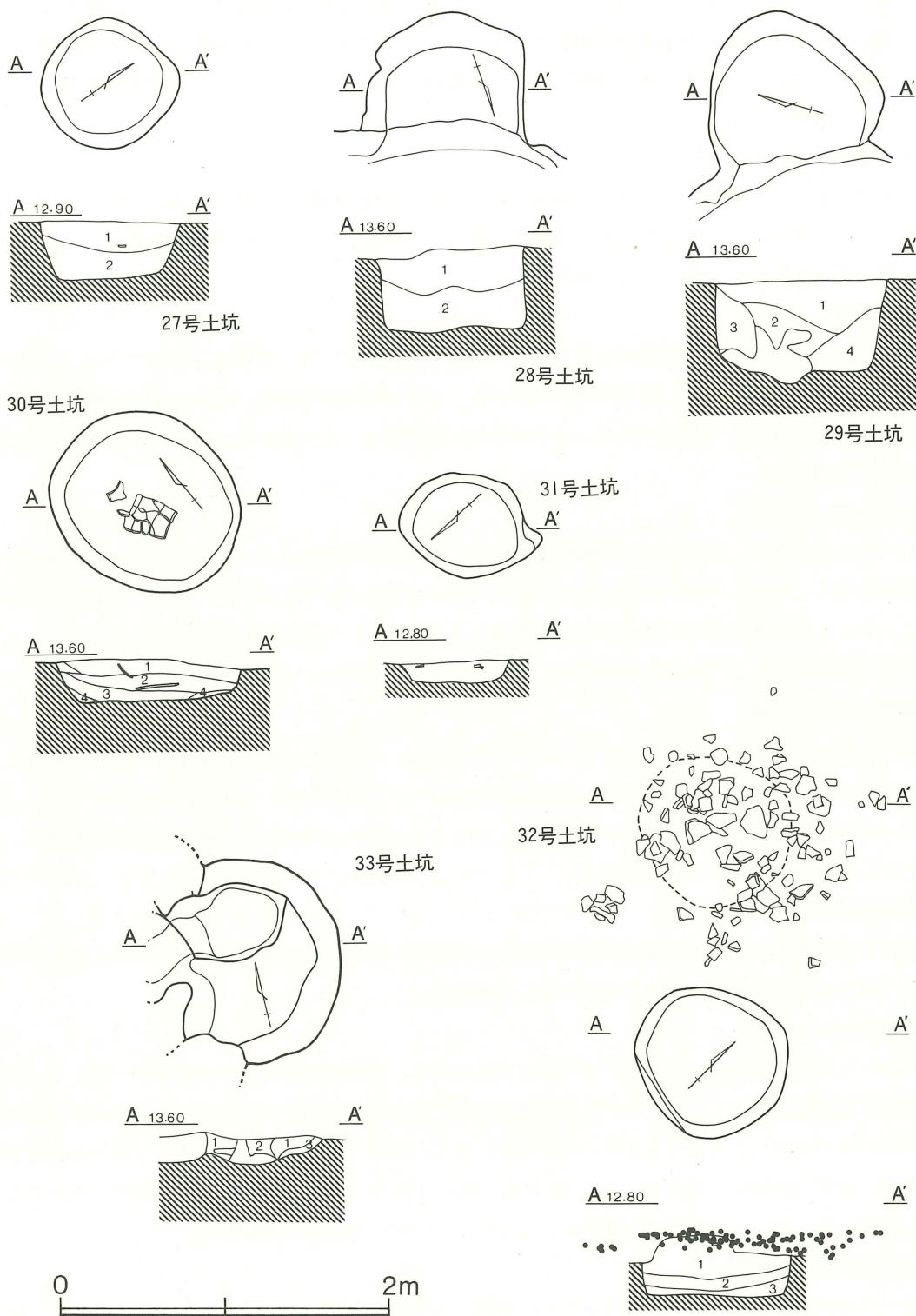
15—C区に検出され、形態はほぼ円形に近い。長径は0.88m、短径は0.63m、深さは0.14mを測る。土層は炭化物と赤色スコリアを若干含む明褐色土。

#### **32号土坑（第74図）**

14—C区に検出された、形態はほぼ円形の土坑である。発掘時土坑の上には土器片が広がり、北東側3m前後まで延びていた。そのため住居跡の可能性も考えて掘り下げたが、土器包含層の下から土坑が検出された。土器片も土坑の周辺に多いことが確認できたが、土坑に伴う土器かは不明確である。長径は0.94m、短径は0.9m、深さは0.24mを測る。土層は1—炭化物・赤色スコリアを含む暗褐色土、2—1と類似する褐色土、3—ロームブロックを含む明褐色土。

#### **33号土坑（第74図）**

唯一台地西縁部の61—C区に検出された。西側を3号炉穴と切り合うため、不明確であった。長径1.27m、深さ0.15mを測る。土層は1—焼土・炭化物を含む明褐色土、2—1層に類似するが、黒味を帯びる、3—ローム質の褐色土。



第74図 土坑(4)

## 遺物

### 第1号土坑出土土器 (第76図1・2)

1.  $L < R$  縄文を施文し、沈線による懸垂文を持ち、沈線間を磨消す。研磨は丁寧に行なわれている。2.  $L < R$  縄文を施した胴部の破片である。

### 第2号土坑出土土器 (第76図3～5)

3. 微隆起線による懸垂文を持つ胴部破片である。磨消し部はよく研磨されている。縄文は  $R < L$ 。4. 原体Lの撚糸文を縦走させ4本の沈線が横走する連弧文土器の破片であろう。5は口縁直下を無文化し、沈線を一巡させるものである。縄文  $R < L$  を施文している。

### 第4号土坑出土土器 (第76図6・7)

6. 口唇部が欠損している沈線部の破片である。口縁部を無文化し、微隆起線を一巡横走させる。胴部には  $L < R$  の縄文が施こされる。7. おそらく0段3条の  $R < L$  縄文を施文している。

### 第5号土坑出土土器 (第76図8)

沈線間に  $L < R$  縄文を充鎮する土器である。沈線は左側の部分はしっかりと太く描かれるが右側は細くなり、はみ出しの部分も若干見うけられる。

### 第8号土坑出土土器 (第76図9)

微隆起線の施こされた土器である。微隆起線の両側は良く研磨されている。

### 第10号土坑出土土器 (第76図10)

口縁部の小破片であり口縁下を無文化し、微隆起線文を施こすものであり、口縁に平行、胴部の懸垂文に分かれるのが観察できる。微隆起の両側に沿って円形の竹管状の刺突文が施こされる。

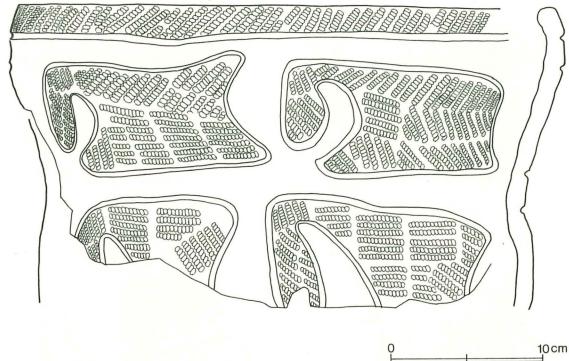
### 第11号土坑出土土器 (第75図、第76図11～14)

第75図の示した土器は口径 35.4 cm の深鉢形を呈し、1/2弱残する。胴部はゆるやかにふくらみ口縁部は若干内傾する。口唇部はゆるい丸形になる。文様は沈線によりJ字文を2段にわたり施文するがこの型式の土器の文様のつけ方と縄文の割りつけ方が反対である。沈線はかなり太く描かれており、縄文は  $L < R$  である。色調は暗褐色～黒褐色である。火による加熱をうけたためか表面が荒っている。胎土にはやや大きめの小礫を含み、焼成はあまり良好でない。

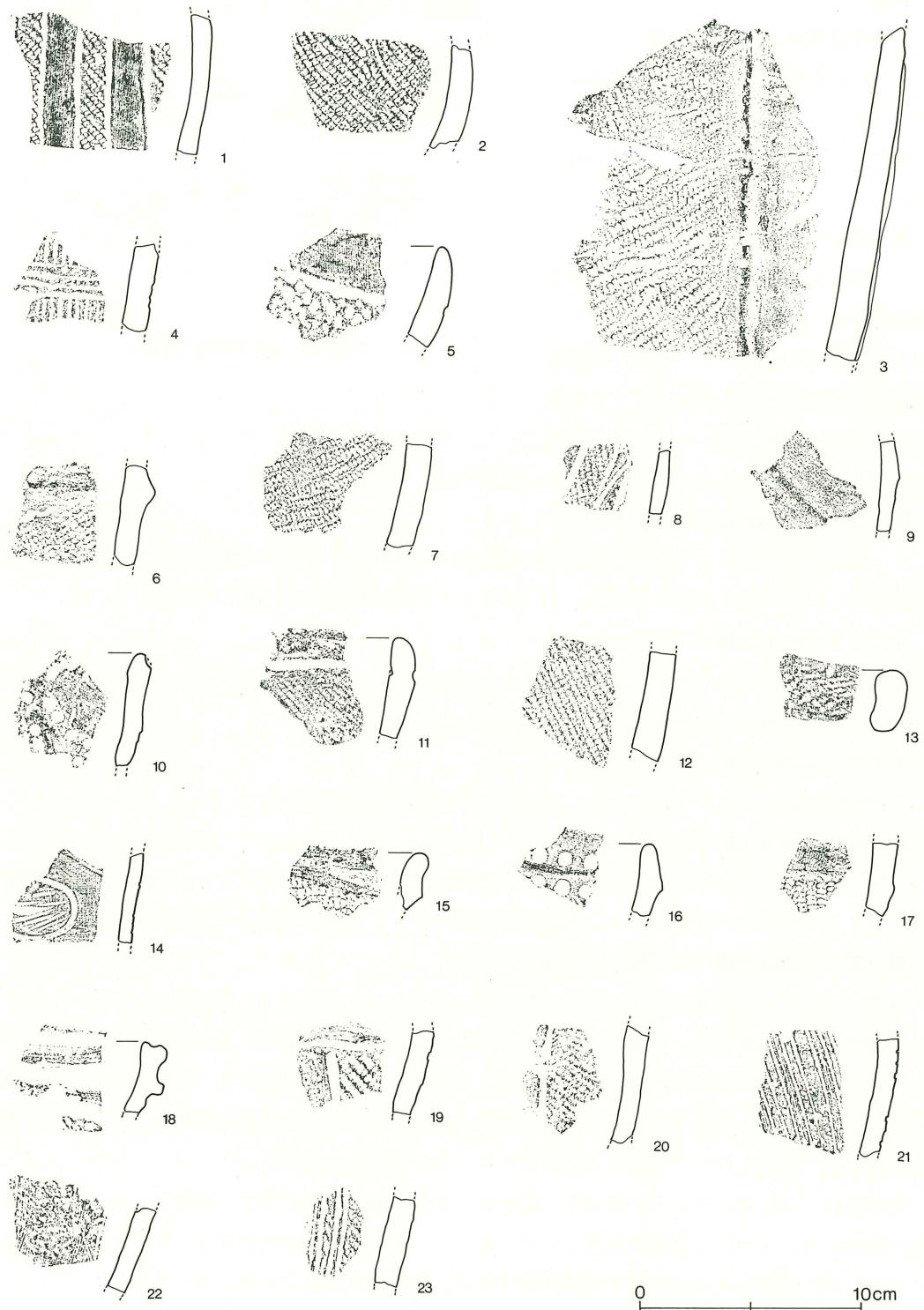
第76図11. 口縁部無文部下に沈線を一巡させ、 $R < L$  縄文を施文する。沈線はかなりしっかりと描かれている。12は  $L < R$  縄文を施こしている。13. 橋状把手の破片である。 $R < L$  縄文を施文している。14. 沈線による区画内に櫛齒状施文具により沈線を充鎮せるものである。

### 第12号土坑出土土器 (第79図75～77)

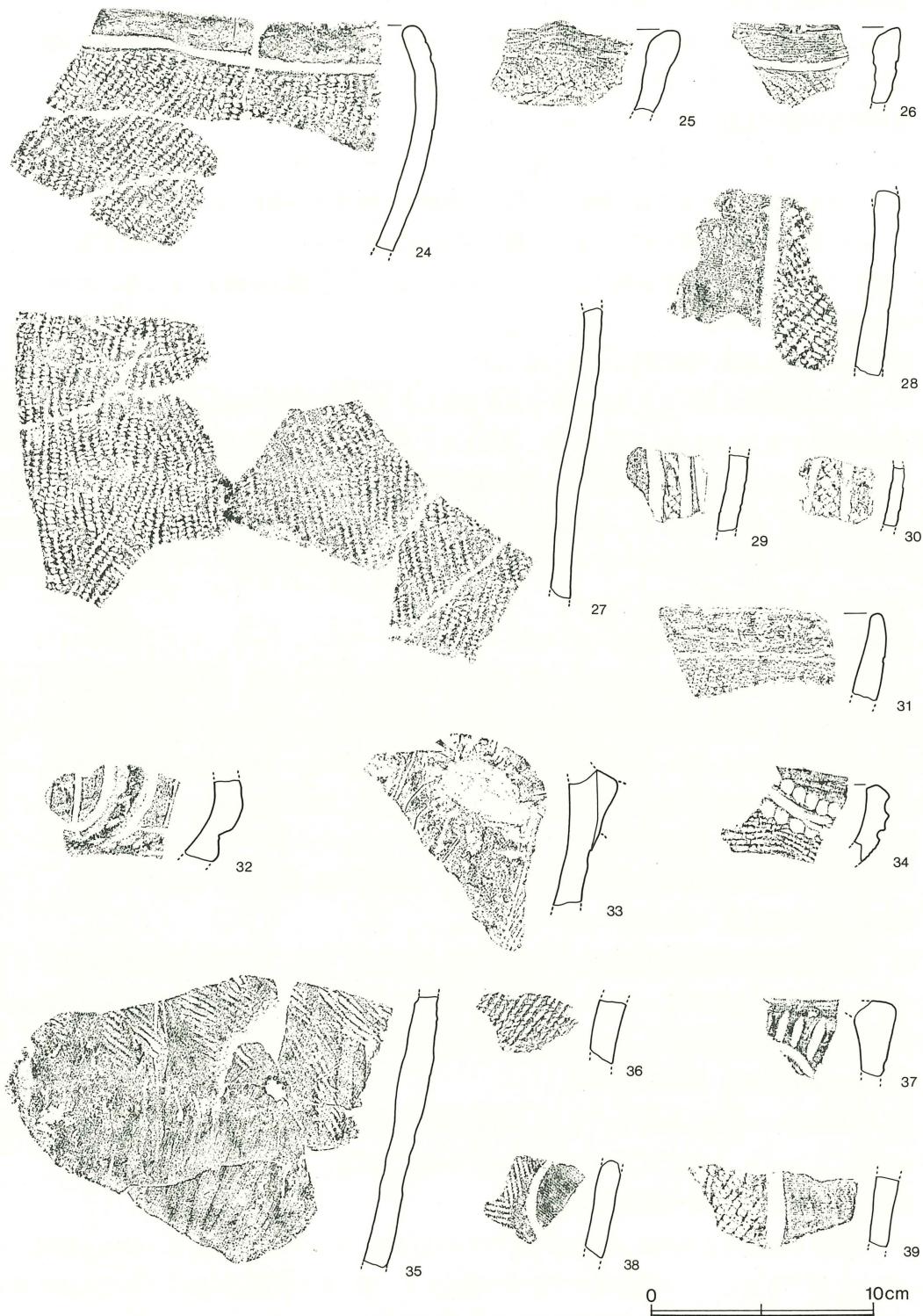
75. 口縁部下半の土器である。隆帯間に沈線を施こしている。頸部は無文化している。76は隆帯による蛇行懸垂文、77は1本隆帯による懸垂文を施こしている。縄文はともに  $R < L$  である。



第75図 11号土坑出土土器



第76図 土坑出土土器(1)



第77図 土坑出土土器(2)

#### 第14号土坑出土土器 (第76図15~17)

15~17とも口縁部無文部下に微隆起線文を施こすものであり、16のように円形刺突文を規則的に付している。15.  $L < \frac{R}{R}$ 、17.  $R < \frac{L}{L}$  縄文を施こしている。16は焼成が極めて良好である。

#### 第16号土坑出土土器 (第76図18~23)

18. 口縁部の破片であり隆帶により文様がつくりだされる。19のような胴部を持つであろう。19. 口縁部と胴部とを区画する沈線が横走し、縦位に磨消しの懸垂文が施こされる。縄文は $L < \frac{R}{R}$ 。20. 磨消しの懸垂文を持つ胴部の破片である。縄文原体は $L < \frac{R}{R}$ である。21・22. 櫛齒状条線による胴部の破片である。 $L < \frac{R}{R}$ 縄文が地文として見られる。23.  $L < \frac{R}{R}$ 縄文を地文とし2本の沈線による懸垂文が描かれている。

#### 第17号土坑出土土器 (第77図24~30・32・33)

24~26は口縁部無文部下に沈線を一巡させるものである。25・26は内側に低い稜を持つ。25は沈線が細く施こされている。24.  $L < \frac{R}{R}$ 、25・26は $R < \frac{L}{L}$ 縄文を施文している。27は縄文 $L < \frac{R}{R}$ の施こされた胴部である。28は磨消しの懸垂文を持ち、縄文は $R < \frac{L}{L}$ である。29・30は沈線間に $L < \frac{R}{R}$ 縄文を充鎮する。32. 隆帶を貼付し、上に刻みを入れる。隆帶にそって沈線を描き、隆帶内に縦位に沈線を充鎮させる。33. 橋状把手の付されたものであるが把手は完全に剝落している。剝落した部分以外には $R < \frac{L}{L}$ 縄文が施文されている。

#### 第18号土坑出土土器 (第77図31・34~39)

31. 口縁部無文部下に沈線を横走させる。沈線はあまり明瞭ではない。34は沈線下に縄文を施文するものであり、沈線の両側にそって円形の刺突文が密に施こされる。35は $L < \frac{r}{r}$ 、36は原体Lの撲糸文を施こしている。37. 沈線を逆「U」字状に配し、沈線にそって縦形の沈刻が見られる。38・39. 曲線的沈線内に縄文を充鎮するものである。38は $L < \frac{R}{R}$ 、39は $R < \frac{L}{L}$ 縄文を施文している。

#### 第19号土坑出土土器 (第78図40)

口縁部無文部下に微隆起線文を有するものであり、胴部には縄文が施こされる。

#### 第20号土坑出土土器 (第78図41~45)

41. 微隆起線文の両側に沈線を施こしているもので縄文は $L < \frac{R}{R}$ 。42. 細い沈線では縁部にそつて一巡させる。縄文は $L < \frac{R}{R}$ 。43・44. 沈線によりスペード形、J字形を描くものあり、沈線内には $L < \frac{L}{R}$ 縄文が充鎮される。45.  $L < \frac{r}{r}$ 縄文が全面施文される。

#### 第21号土坑出土土器 (第78図46・47)

46. 沈線内に $L < \frac{R}{R}$ 縄文を施こしている。沈線は太くしっかりとしている。47. 無文部下に微隆起線を施こしている。微隆起線上より $R < \frac{L}{L}$ 縄文が施文される。

#### 第23号土坑出土土器 (第78図48~51)

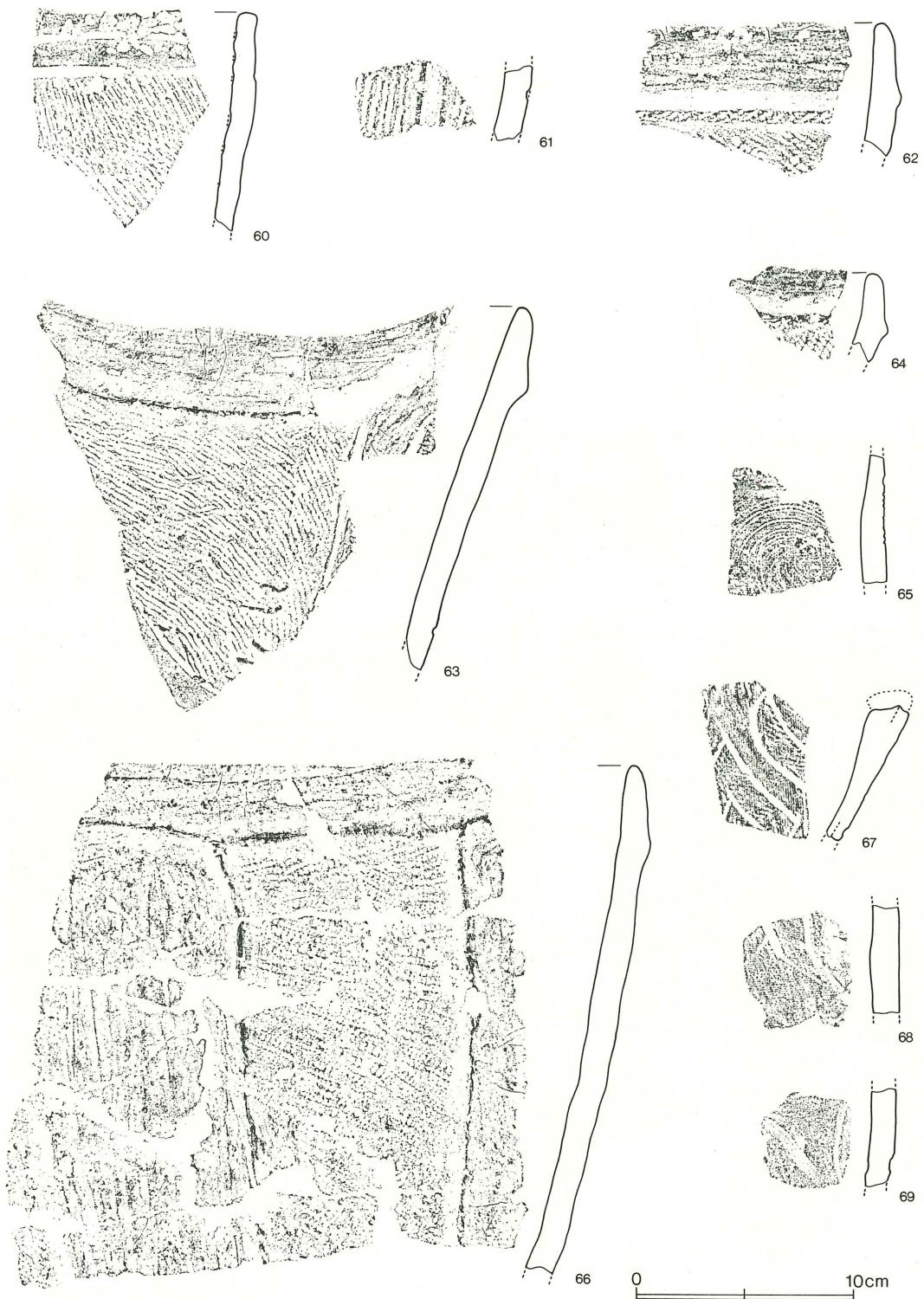
48. 隆帶間の沈線による渦巻き文を描くものである。49. ラッパ状に開く器形を有する胴部である。 $R < \frac{L}{L}$ 縄文を施し、2本の沈線で文様帯を構成する。50.  $R < \frac{L}{L}$ 縄文の施文されたものである。51. 磨消しの懸垂文を有する。沈線内には $L < \frac{R}{R}$ 縄文が施こされている。

#### 第26号土坑出土土器 (第78図52~55)

52・53. 曲線的な沈線による懸垂文である。52は $L < \frac{R}{R}$ 縄文、53は列点が沈線内に施こされる。



第78図 土坑出土土器(3)



第79図 土坑出土土器(4)

54. 縦に1本の沈線、横位に1本の沈線を施こし、横には穿穴を施こしている。55. 微隆起線文が付され隆帶上にも  $L < R$  繩文が横位に施文されている。

#### 第28号土坑出土土器 (第78図56・57・59)

56. 57は無文部下に沈線を一本巡らしている。51は沈線がうまく合わず2本の沈線が施こされている。繩文は  $L < R$  、57も同様に  $L < R$  繩文であり、59は  $R < L$  繩文である。

#### 第29号土坑出土土器 (第79図60・61)

60. 口縁部下には2本の沈線が横位に描かれ、胴部には櫛齒状施文具による条線が密に施文される。61. 2本の隆帶による懸垂文が施こされ、原体Lの撲糸文が施文される。

#### 第30号土坑出土土器 (第79図62~66)

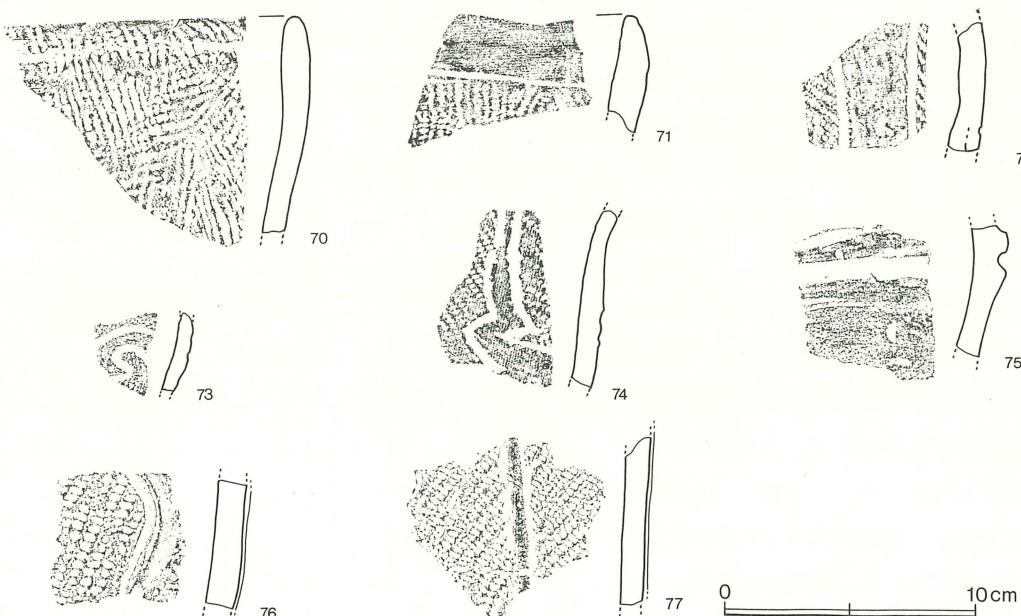
62~64・66は口縁部無文帶下に微隆起線文を施こしている。62は隆帶上を横位に、胴部は縦位に繩文  $L < R$  を施こしている。63はゆるい波状口縁をなしており、胴部には逆「U」字状の沈線を施こしている。66は胴部にも微隆起線による懸垂文を持つものである。繩文は  $L < R$  である。

#### 第31号土坑出土土器 (第79図67~69)

67. 沈線間に  $L < R$  繩文を充鎮するものである。口唇部は欠損するが内側にゆるい稜を持つ。68・69はやや太い沈線により文様を描くものである。沈線はややだらしなくなる。

#### 第32号土坑出土土器 (第78図58、第80図70・71・73・74)

58は  $L < R$  繩文が施こされている。70. 口唇部より  $R < L$  繩文が異方向に施文される。71は無文部下に沈線→ $R < L$  の順に施こしている。73・74は曲線的沈線内に  $L < R$  繩文を充鎮する。



第80図 土坑出土土器(5)

## 6. ブロック2

### (1) 土器

ブロック2出土の土器は点数は少なく、縄文早期の条痕文系土器片が主体を占めているが、小片のため明確な時期（当遺跡グリッド出土の縄文早期の土器群は野島式が主体である）は不明である。61-C区付近に3・4号炉穴が存在するため、ブロック2に伴なうとは断定できない。しかし、ブロック2には他時期の土器片がほとんどみられないことから、縄文早期に属する可能性がある。この点は、付編の黒曜石水和層年代測定結果によっても首肯できる。

### (2) 石器

発見された石器は、合計592点である。内分けは石鎌10、スクレイパー1、リタッチのある剝片(RF)6、使用痕ある剝片6、剝片48、剝片518である。碎片が圧倒的多数を占めている。石材では黒曜石290、チャート279、シルト岩16、安山岩6、水晶1が認められる(第3表)。黒曜石とチャートが主体となっている。

1)石鎌 10点の石鎌は、形態によって大きくI～III類に分かつことができる。

I類 二等辺三角形に近く、基部の抉りの浅い一群(第81図1・2)。1・2は形態的に酷似する。共に二等辺三角形を意識しているようではあるが、いずれも右側の脚が長く整った三角形とはならない。剝片周縁から、短い比較的急傾斜な調整を施しており、すんぐりした印象を与える。共に中央部に一次剝離面を残している。チャート製。

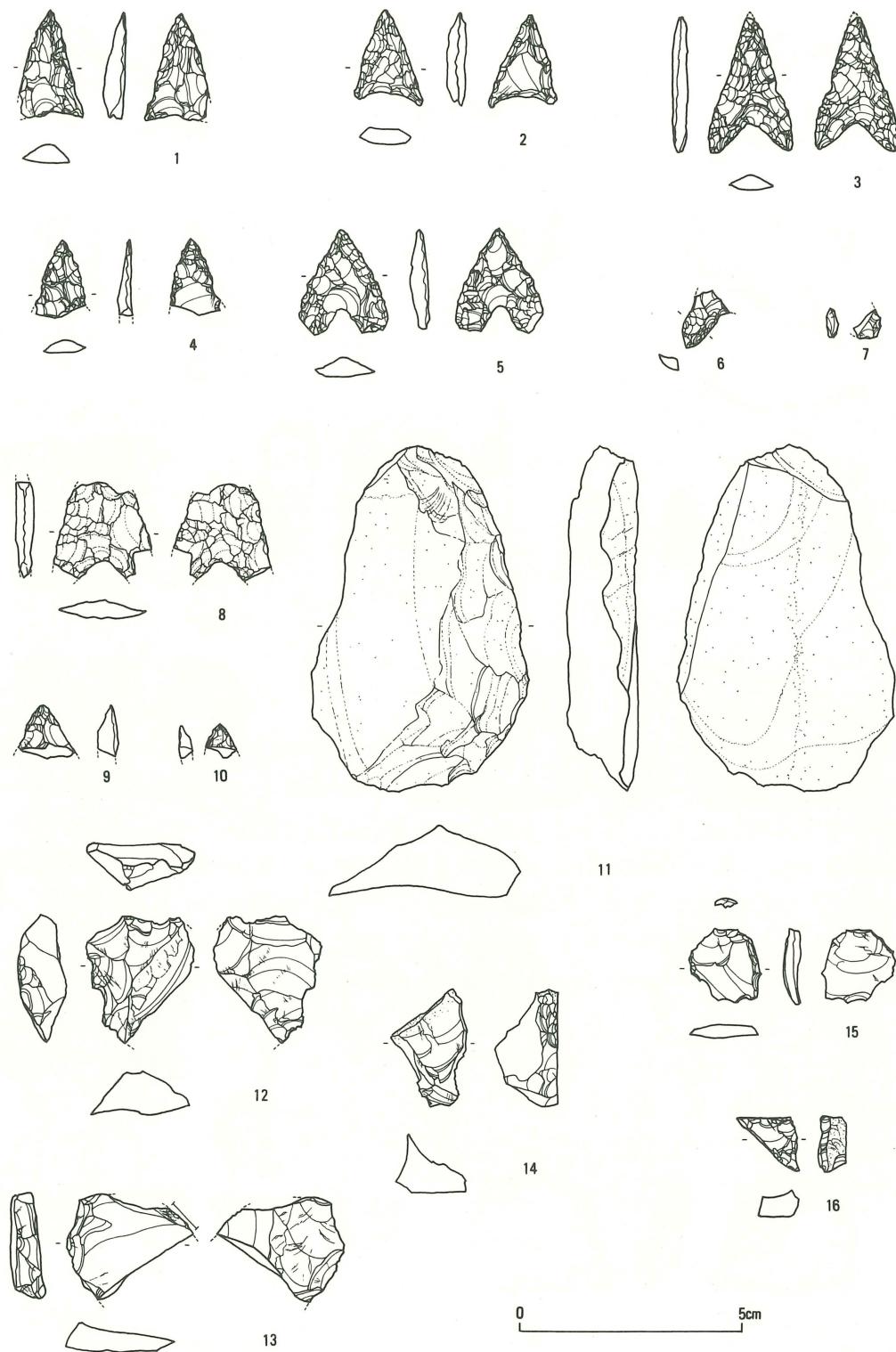
II類 鎌身の中央に弱いくびれを持ち、そこを変換点として紡錘形を半折したような長い脚が延びている。必然的に基部の抉りも深い(第81図3・4)。3を典型とする。調整加工は丁寧で、一次剝離面は全く残さず薄く仕上げられている。チャート製。4は上半部のみを残すが、その下端近くに弱いくびれを認めるために本類に入れた。調整加工はそれほど丁寧ではなく、一次剝離面を大きく残す。先端は鋭い。黒曜石製。

III類 I・II類に較べ幅広で、先端と脚の両端を結ぶと正三角に近い。側縁はやや鋸歯状を呈する。脚部は長いU字形をしており、内湾気味である(第81図5～7)。5を典型とする。調整加工は入念であるが、技術的水準は低いようで、剝離面の統一性を欠く。先端はよく尖っている。黒曜石製。6は脚部のみの破片で、やや難はあるが本類に入れた。チャート製。7も脚部の破片である。端部が尖らずU字形に近いため本類に入れた。調整加工は荒い。黒曜石製。

これらの他に、いずれとも判じ難いものが3点ある。8はかなり大きな石鎌の

	黒曜石	チャート	シルト岩	安山岩	水晶	計
石鎌	4	6				10
スクレイパー			1			1
RF	1	5				6
UF	4	2				6
剝片	13	34		1		48
碎片	266	231	15	5	1	518
石核	2	1				3
計	290	279	16	6	1	592

第3表 石材別石器組成表



第81図 ブロック2出土石器(1)  
(1~10: 石鏃、11: スクレイパー、12~16: リタッчиのある剝片)



第82図 ブロック2出土石器(2)  
(1:リタッチのある剥片、2~7:使用痕ある剥片)  
(8~11:剥片、12~14:石核)

中央部破片である。調整加工は丁寧で薄く作り上げられており、II類に入るかとも思えるが、より大型である上に、身から脚部への変換点が明瞭でない。チャート製。9は厚手の石鎌の先端と思われる。先端の開き角度がI・II類よりも大きく、III類に近い。チャート製。10も先端の破片である。調整は荒く、一次剥離面を表裏に残す。9と同様、先端の開き角度から判断するとIII類に入るが、あまりに小片であるために分類を留保した。黒曜石製。

2) スクレイパー わずか1点のみであるが、これも形態的に難がある(第81図11)。本例は大型剝片を利用するが、風化が著しく打点は定かでない。図右側縁から下縁にかけて荒い調整加工を施す。右側縁の調整は主剥離面から施されたものではないため、素材の剝片を剥離した後の加工か否か問題もあるが、下縁の加工との連続性から考えて、二次的なものと判断した。下縁の調整加工は、素材のヒンジ・フラクチャーの部分にかけて施されている。シルト岩製。

3) リタッチのある剝片(RF) 使用によるとは考えられない大きな剝離痕が、二次的に残されている剝片を本類に入れた。6例発見されている(第81図12~16、第82図1)。12は折れた側を除く数ヶ所に、荒く大きな剝離を持つ。加工は背面にのみ施されており、腹面は打溜を残さない剝離痕で構成される。ある種の石核あるいは削器である可能性も考えられる。チャート製。13は剝片の表裏から急角度の荒い打撃を加えている。素材は板状で、いずれの加工痕も他面まで抜けている。大きく欠損する。チャート製。14は破損礫様の厚い剝片を素材とする。その比較的薄い側縁に急角度の調整打を施す。調整打の剝離角は90度前後あり、階段状になったり一部ではオーヴァーハングする。チャート製。15は長さ2cmに満たないと思われる小剝片を利用している。右側縁及び下縁に調整打が施される。右側縁の加工は全て主剥離面側から施されており、上方では細かく、下方では荒くなる。下縁の加工は表裏から施されており、左方では細かく右方では荒い。右下方の先端を機能部とすれば、石錐と考えることもできる。チャート製。16は一応本類に入れたが、石核片の可能性もある。すなわち本資料を構成する五面のうち、三面は採石時の古い面と考えられ、一面は折れ面であり、資料の性格を判断する材料は一面しか残されていない。その一面には、全面に上方からの剝離痕が残されている。一方、折れ面からの剝離痕はおそらく後天的なものであろう。そうであるとすれば、この素材は剝片と考えるよりも平板な石片と考えた方が妥当性があり、その加工されたものも一種の石核と呼ばざるを得なくなる。黒曜石製。第82図1も石核と呼ぶこともできそうな資料である。主剥離面左側に数枚の大きな剝離痕を残しているが、そのうちの一枚は長さ1.5cm、幅2cmにも達する。チャート製。

4) 使用痕ある剝片(UF) 使用痕ある剝片は6点識別できた。リタッチのある剝片に較べて、いずれも剝落痕が微弱である(第82図2~7)。2は小型剝片の左側縁及び下縁に剝落痕を持つ。左側縁に較べ、下縁の剝落痕は安定している。下縁左半のものは光沢が強いようにも感じられ、新しいキズの可能性もある。黒曜石製。3では小型縦長剝片の下半部に剝落痕が集まっている。右側縁下半の剝落痕は表裏両面に表われるが、下縁のものは表面のみである。下縁の剝落痕は大きく安定しており、あるいはリタッチのある剝片に含まれるかもしれない。黒曜石製。4と5はいずれも碎片に分類されるべきものの下縁表面に剝落痕を持つものである。素材があまりに小型で使用に供されたとは考え難いため、剝落痕そのものを詳細に検討してみたが、肉眼で見る限り新しいキズとは考

えられなかった。剥落痕は0.5~1.5mm位の大きさで、下縁全縁に連なっている。共に黒曜石製。6は折れた剥片を素材とする。主剥離面がいずれか決し離い。剥落痕は折れ面から表裏にと、折れ面の反対側縁片面に残されている。折れ面からのものは、いずれも表裏にそって薄く、奥行3~4mm位まで達する。反対縁の剥落痕は、小さく階段になるものが多い。チャート製。7は剥片の破片で、右側縁と下縁に剥落痕を残す。剥落痕は小さく、右側縁のものは剥片の表面に沿うように、下縁のものは剥片先端を断ち切るように急角度で施こされている。右側縁のものは、一部主剥離面側にも表われている。チャート製。

以上、使用痕ある剥片には素材にも微小剥離痕の形態そのものにも統一性がない。また本ブロックが碎片を主体としたあたかも工房址的様相を呈するためか、剥片の数に対する使用痕ある剥片の出現率が低いようにも見える。このようなことから考えると、一応使用痕ある剥片としたものの、さらに厳密に「微小剥離痕を持つ剥片」とでも呼ぶべきで、人間の行為によって生じた可能性をより強く払拭すべき性格のものかもしれない。

5)剥片 剥片は合計48点発見されている。34点がチャート、13点が黒曜石である。黒曜石のうち3点は原産地推定及び水和層年代測定に供したので、現存するのは10点である。後に碎片の項でも触れるが、数において剥片では黒曜石<チャートの関係が、碎片では逆転する。剥片はほとんどが小型で、平面形は円形に近い。例外的な最大の剥片（第82図8）も最大径46mmしかなく、他は全て30mmに満たない（第82図9~11）。碎片との区分をおよそ15mmに置いているので、1点を除く47点が最大長15~30mmの間にひしめいていることになる。剥離角は計測可能であった18点では、97~118°の間に分布した。例数が少ないとは言え、ばらつきが少なくよくまとまっている。平均値は110°である。

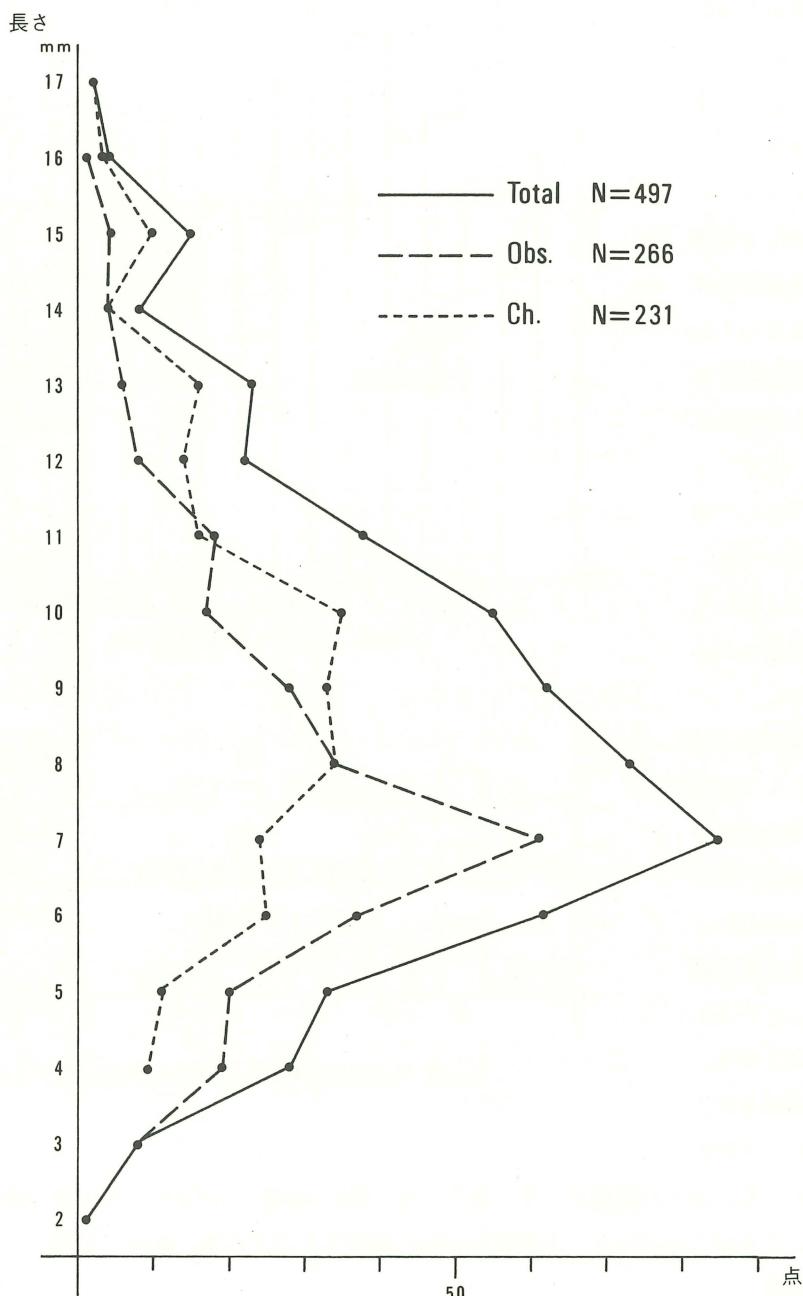
以上の属性を具える剥片は、はたして目的的なものと考えることができるのであろうか。ブロックの石器組成が碎片に片寄っており、石核が含まれていないという特殊な条件下では、こうした検討を行なうに足りる材料を揃えることは難しい。わずかに剥片の長さが材料となり得るが、一項目のみでは検討には全く不十分である。すなわち、本ブロック出土の二次加工のある石器は、スクレイパーに安定した存在意義を見い出せないとすれば、石鏃のみである。その石鏃は長さが2~3cm程で、ほぼ剥片の大きさと符合しており、この点のみからすれば剥片は目的的なものと考えることができよう。しかしながら、ブロックが工房址的でありながらも、あまりにも画一的な剥片が残されすぎており、剥片剥離工程全体の中における剥片群の評価は下し得ない。従って、ここでは石鏃と剥片の長さに共通性がある事実を指摘するに止める。

6)碎片 碎片は、合計518点に達する。石材別では、黒曜石290、チャート279、シルト岩16、安山岩6、水晶1となる。黒曜石とチャートが圧倒的である。

最初に、碎片の単純最大長を計測・集計したグラフ（第83図）を見ると、7mmを頂点にやや歪んだ釣鐘形の分布を示すことがわかる。これをさらに黒曜石とチャートに分けて、それぞれの長さの分布を見ると、黒曜石は7mmを、チャートは8~10mmを中心にしており、チャートの碎片の方が大きい傾向を窺うことができる。この傾向は第84図において、さらに明瞭に把握することができる。しかしここでは、黒曜石の脆さに対するチャートの粘りという石本来の特質とともに、チャートに

較べて黒曜石の方が発掘時に回収され易いという背景も考慮する必要があり、必ずしもグラフに見る傾向を真実として受け入れる訳には行かない。

また、このグラフを先土器時代ブロック1の碎片におけるグラフ(第16図)と比較してみると、ピークの位置が明らかに異なっている。第16図ではピークは認められず、5~12mmの間に全体的に多く分布するのに対し、第83図では強い集中を示している。これに対しては、たとえばブロック1



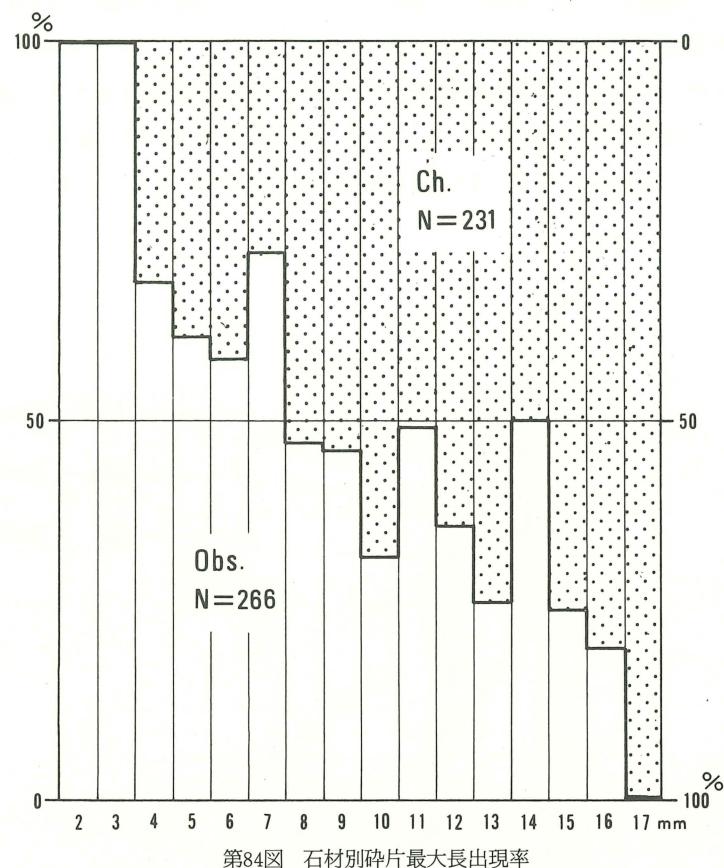
第83図 石材別碎片最大長出現度数分布グラフ

では様々な作業の集積が残されているのに、ブロック2は石鎌を中心とした工房址であるとか、本質的な技術基盤の差を示しているとか様々な解釈が与えられようが、可能性が多岐に渡り過ぎて即断することはできない。ちなみに本ブロックで、石鎌製作時の碎片と判断されたのは、524点中わずかに38点、7%でしかない。しかも、最大長を集計するとピークは6mmになり(第85図)、必ずしも全体の集計と符合してはいないのである。今後、様々なブロックにおいて同様な資料の集積されることが望まれる。

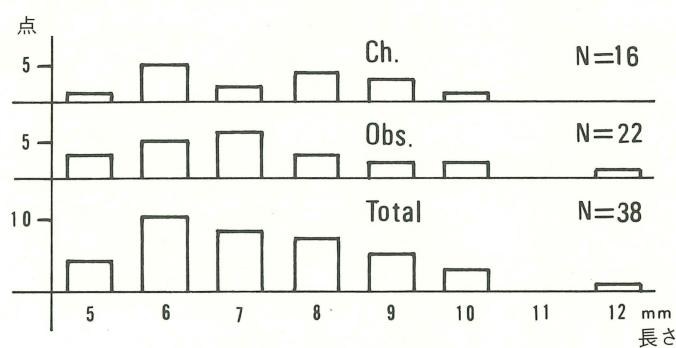
7) 石核 黒曜石の2点は、共に石核として消耗し切っている(第82図12・13)。いずれも剥離方向に齊一性は認められない。12の方は、一部に原石時の古い面を残している。14は剥片を素材とする。主剥離面の打瘤部を取り去るかのように、3枚の剥離を行なっている。最大の剥離痕でも、長さ2cm、幅1.5cm程と小さい。リタッチのある剥片に分類した第82図1と大きな差はなく、本資料も分類に窮するものである。チャート製。

### (3) 石器の分布

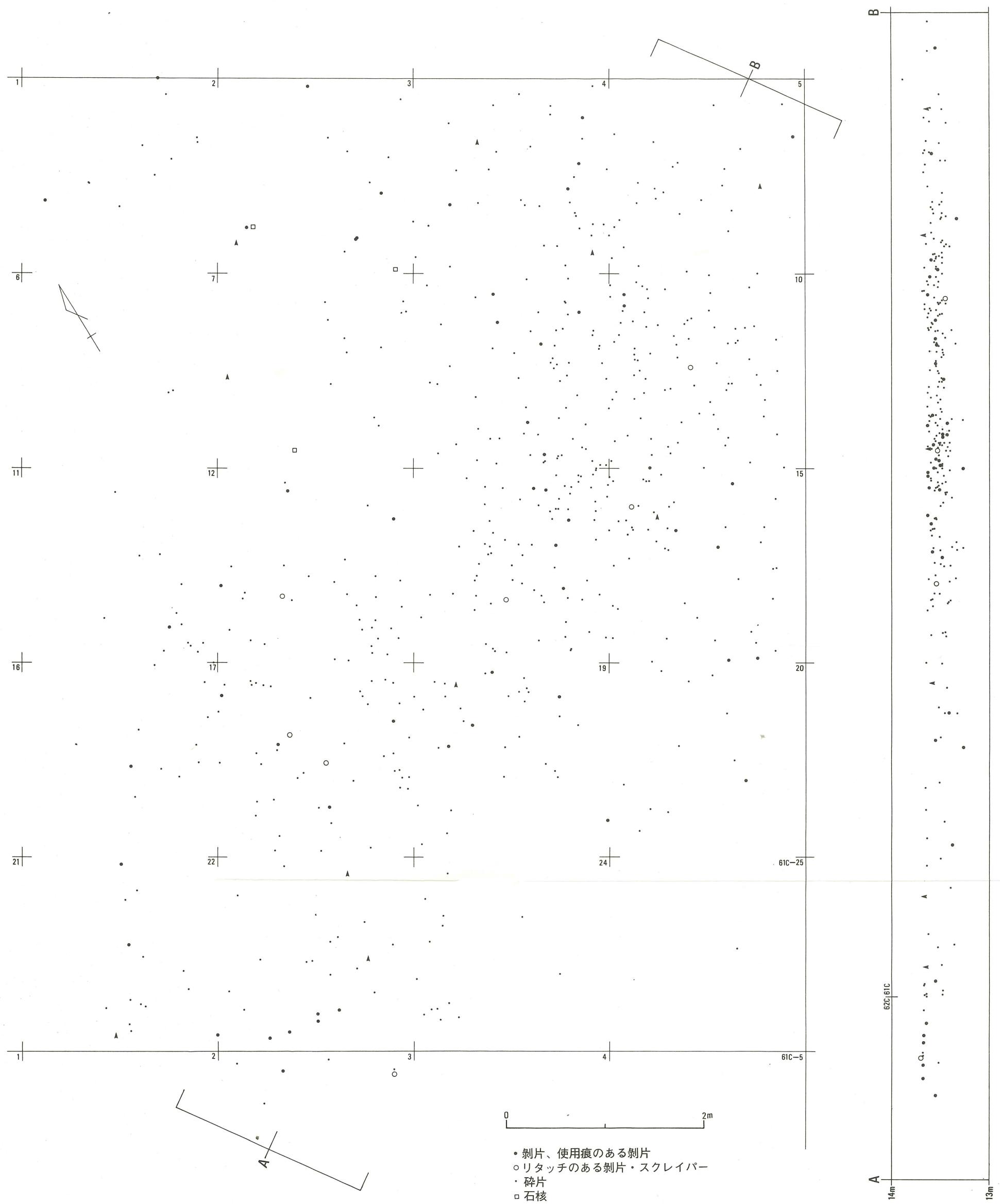
石器は61C-9・10・14・15区に大きな中心を持ち、北は61C区北西縁近く、西は62C-3区まで、東西に細長い楕円形に分布する(第86・87図)。分布図から旧状を復原すると、少くとも12×6m



第84図 石材別碎片最大長出現率



第85図 石鎌製作時の碎片最大長出現度数分布グラフ



第86図 全石器分布図

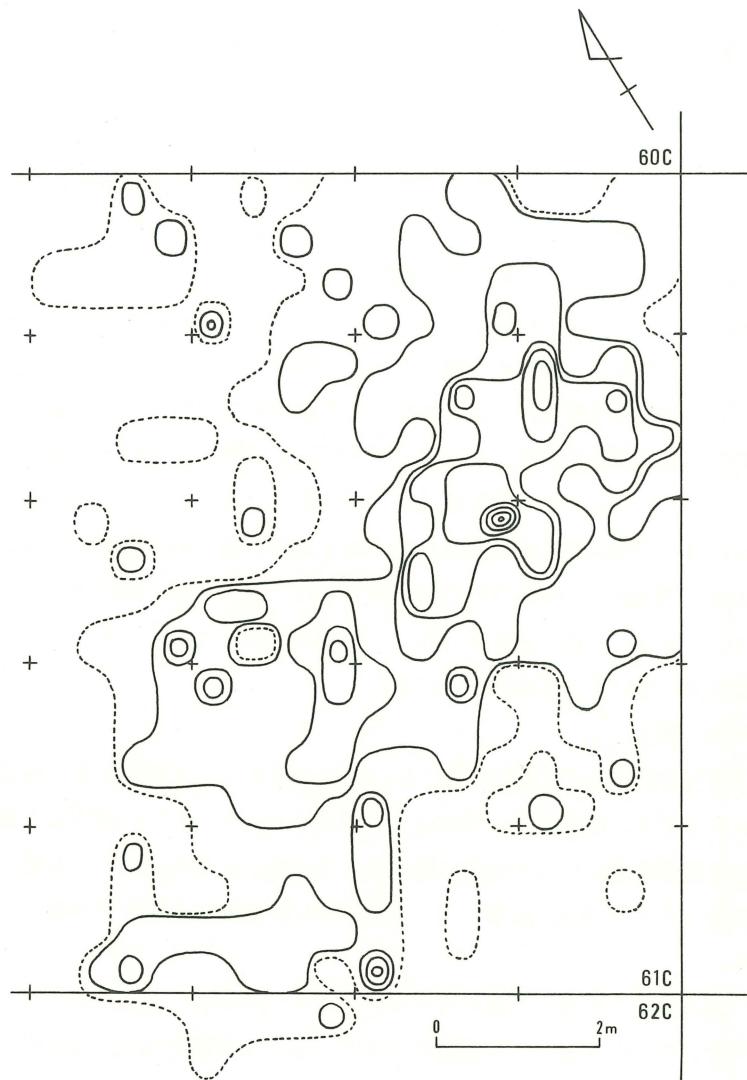
m以上の面積を占めてい  
ると考えられる。分布量  
は、中心から周辺に向っ  
て必ずしもスムーズに減  
少する訳ではない。特に  
長軸に沿って西方へは、  
61C-18区当たりにも小さ  
な石器集中部が認められ、  
増減を繰り返しながら除  
々に少なくなっている。  
北及び東方については、  
すでに日誌抄で触れたよ  
うに、残念な経違のため  
に詳細を知ることはでき  
ない。

垂直分布は、第86図に  
見る如く海拔13.4~13.7  
mの間に集中している。  
垂直分布図には、A・B  
間の幅2 m以内に分布す  
る石器に限って投影した。  
所属時期の相違も考  
えられるが、5号住居跡お  
ける石器の垂直分布に較  
べ、分布幅が広いようと思  
われる。投影幅が5号  
住居跡より狭いことを考

慮すると、本ブロックは住居跡の遺構との重複はない可能性が高い。

1)石鏃・Sc・R F・U Fの分布 二次加工のある石器は、全石器分布の中心からは若干ずれた周縁部、特に北西縁に多いようである(第88図)。最も数の多い石鏃の分布でこの傾向をよく把握することができ、全体分布の中心である9・10・14・15区にはわずかに1点分布するのみである。1点のみ発見されているスクレイパーは、全石器分布の中心近く、またリタッチのある剝片は西南方に多く分布している。

2)剝片・碎片・石核の分布 碎片は、全石器の88%を占めており、石器分布の大勢を作り上げてい  
ると考え、ここでは剝片、石核のみについて分布図を作成した(第89図)。これを見ると、剝片の分布も全石器分布と必ずしも相関が高いとは言えない。9・14区にわずかに分布量が多いようにも



第87図 石器分布等量線図

見えるが、それらは小さい島状の分布を示しており、全石器分布に認められたような大きな中心とはならない。23区南西部の分布もよくまとまっており、目を引く存在である。全体的には、分布にあまり濃淡がなく、万遍なく分布していると言える。

石核はわずかに3点しかなく、ここから多くを知ることはできない。しかしそれでもなお、ブロック北隅に3点ともまとまっている点は注目される。

以上見て来たように、他の石器が全石器分布と異なる傾向を示している以上、碎片はやはり全石器分布の大勢を作り出していると言える。また、他の石器がブロック周縁部に多いことを考えると、その地域での碎片の分布はむしろ減少することになり、より一層全石器分布の中心への碎片の凝集度が高いと考えなければならない。このような、特に剝片と碎片の関係は、ブロック1にも認められた傾向であり、興味ある現象と考えられる。

3)石材別の石器分布 ここでは、石器の大半を占めている黒曜石とチャートのみについて分布を見てみる。黒曜石では、9・10・14・15区と18区・23・24区の境の三ヶ所に分布の多いところがあり、ここからはずれると急減する(第90図)。一方、チャートは黒曜石のように明瞭ではなく、9・10・14・15区に1ヶ所の大きな集中域を持ち、そこから周縁に向かって徐々に分布が減少する(第91図)。黒曜石では集中分布域と考えられた18区・23・24区境には、チャートはそれ程多く分布しない。また、分布の集中度において黒曜石が勝っているため、チャートの方がぼんやりと広い分布域を持っているように感じられる。

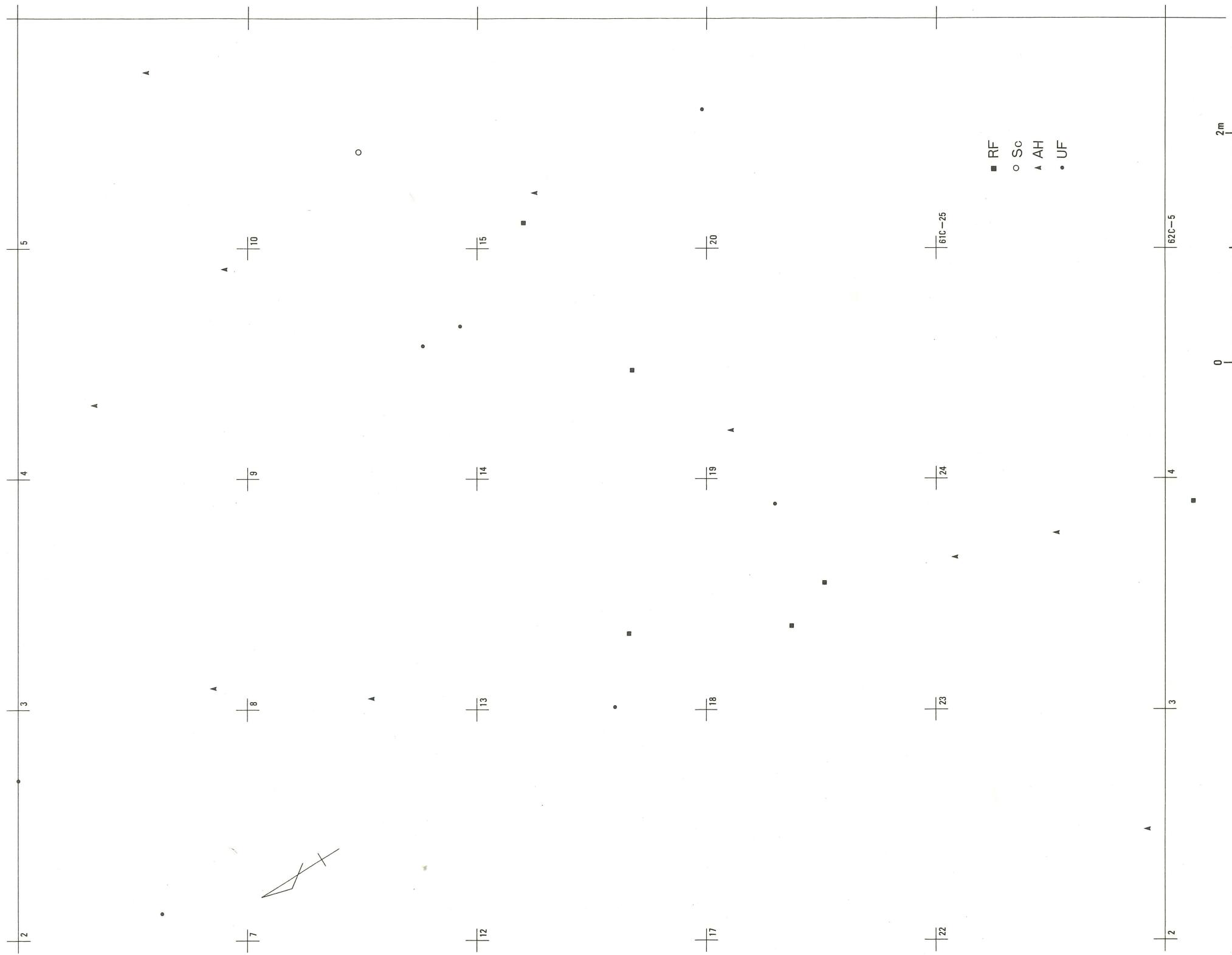
#### (4) 磯

磯は合計113点発見されている。石材ではチャートが最も多く59点で、以下砂岩36、片岩類5、シルト岩4、凝灰岩4、花崗岩2、礫岩3となる(註1)。凝灰岩と礫岩・花崗岩には、直径3~10cm位の卵形をした、形態的に整ったものが多い。これらに対し、砂岩・チャートは受熱したようで、赤化してバラバラに破損している例が多い。大きさも概して小型で、ほとんどが直径2~5cmに入る。

磯の平面分布は、石器とは大きく異なる(第92図)。分布の中心は61C-4・5・9・10区にあり、石器より丁度1グリッド北東にずれている。また集中度は非常に弱く、分布の中心と言っても名ばかりの感が強い。むしろブロック全体にはほぼ均等に散っていると言えるかもしれない。14・15・18区などの分布も非常に散漫である。一方で、石器の分布が少ない8区に、磯の場合はややまとめて分布している。垂直分布は、石器で見た場合と変化なく、海拔13.5~13.7m当たりに多く分布している。

赤化磯と非赤化磯の分布では、8区西縁に数点の非赤化磯が集中するが、他は圧倒的に多い赤化磯の中に散っており、これといった傾向を示さない(第92図)。

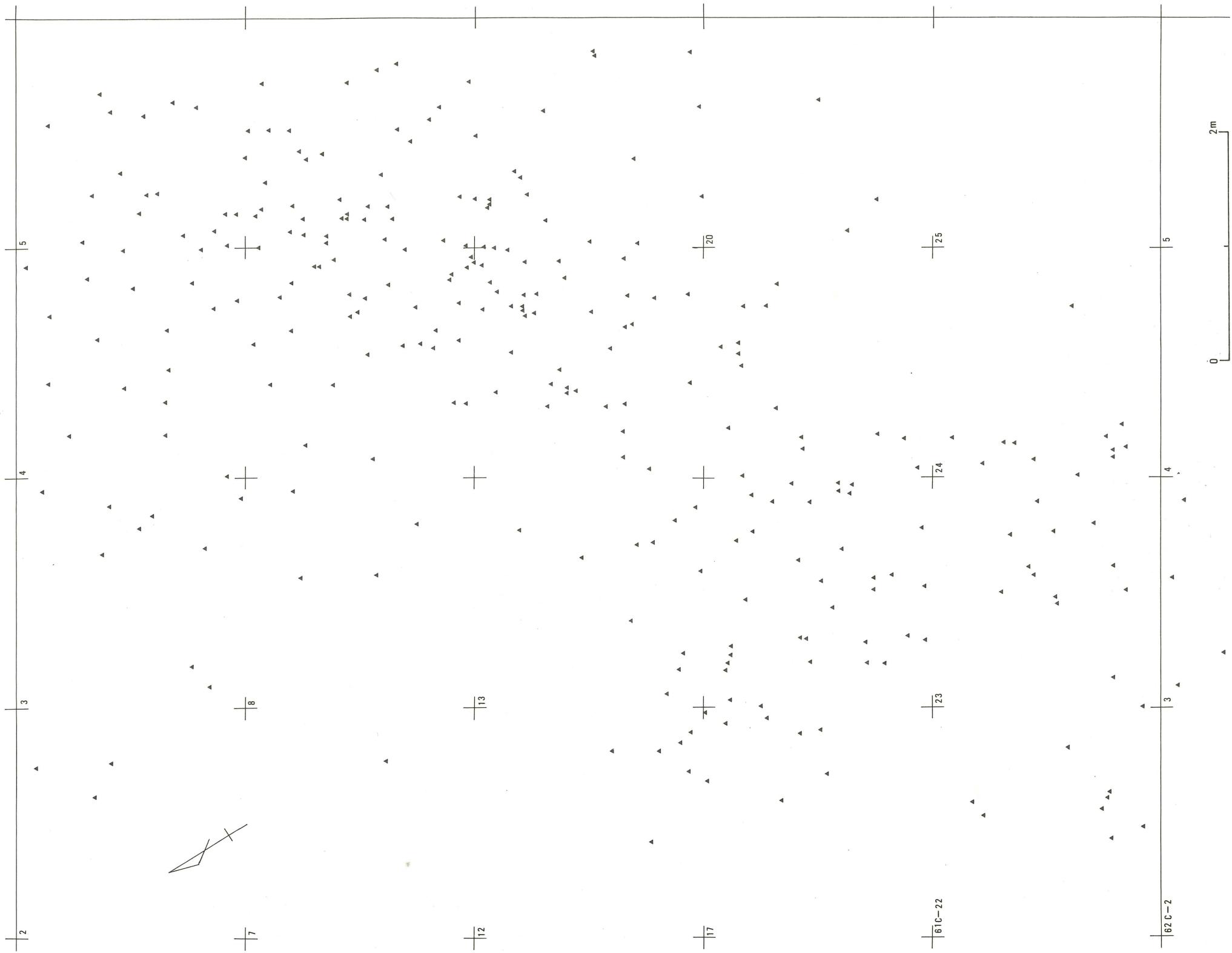
また石材別に、特に点数の多いチャートと砂岩についてその分布を見てみると、チャートは5・9・10区に多く、磯分布の中心を作り出しているようである。これに対し砂岩は18・19区以西に多く分布する(第93図)。



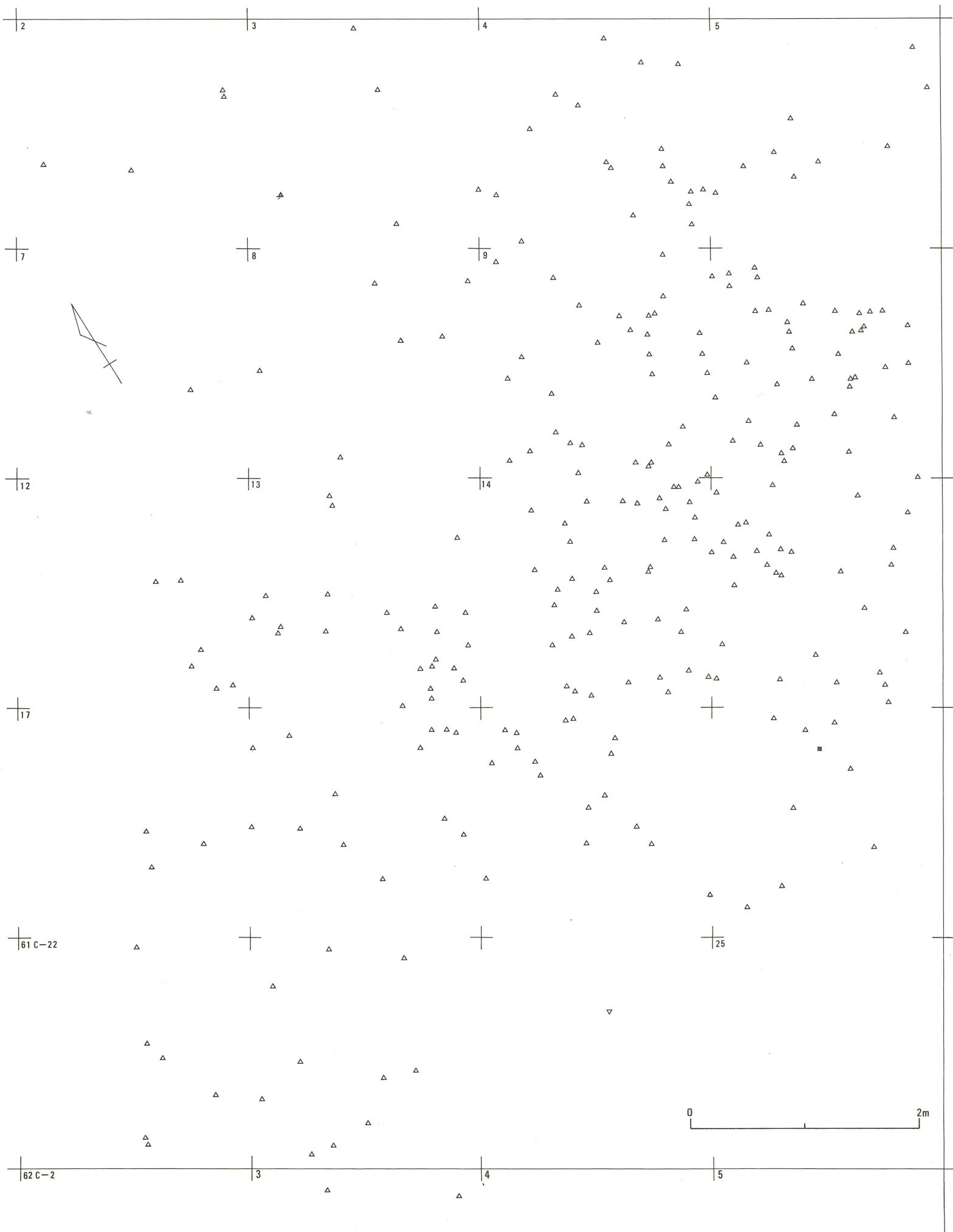
第83図 石鍊、Sc、RF、UF分布図



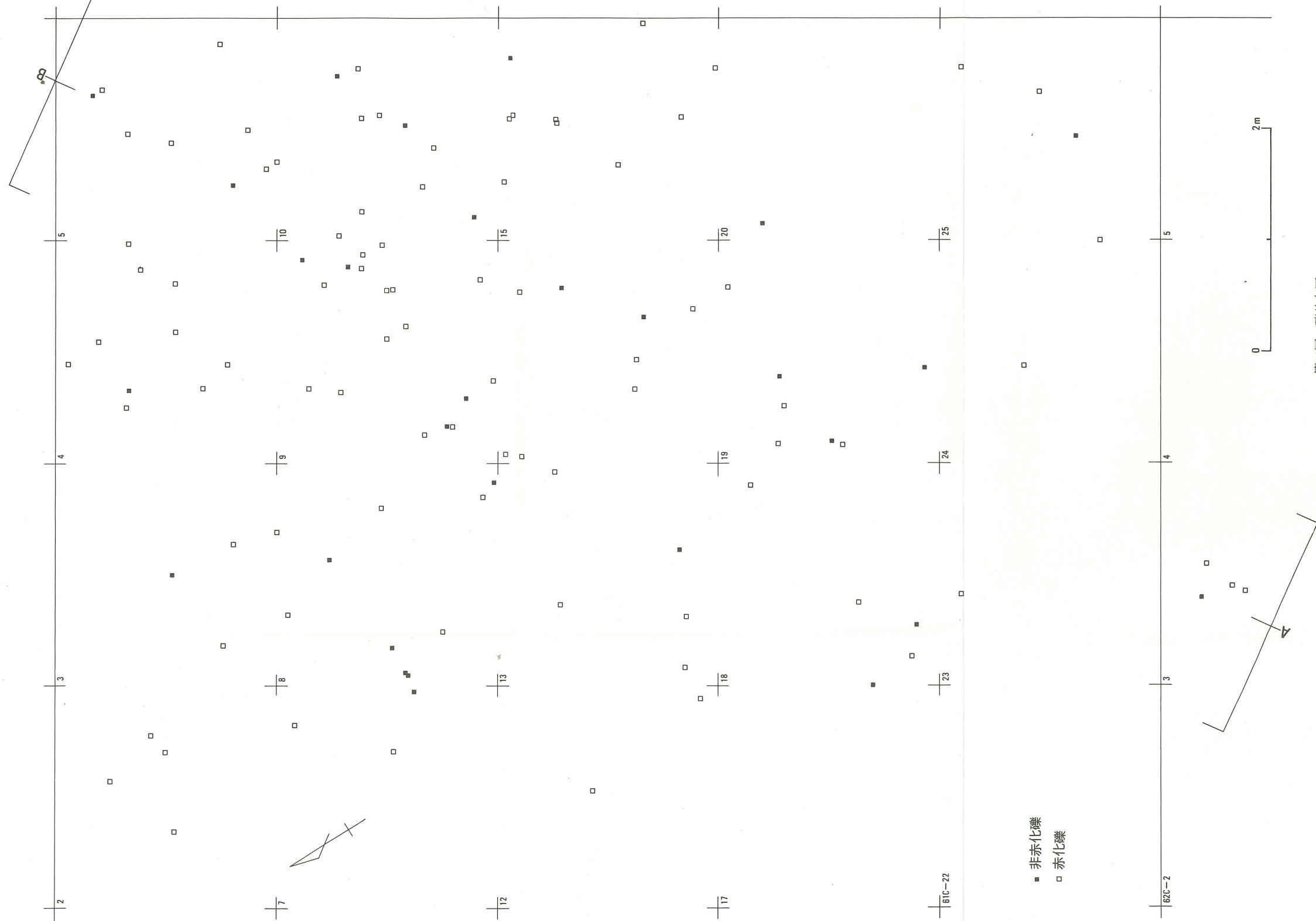
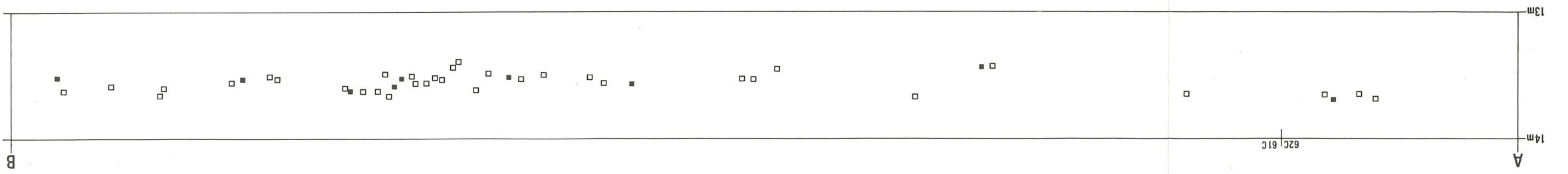
第89図 剥片・石核分布図



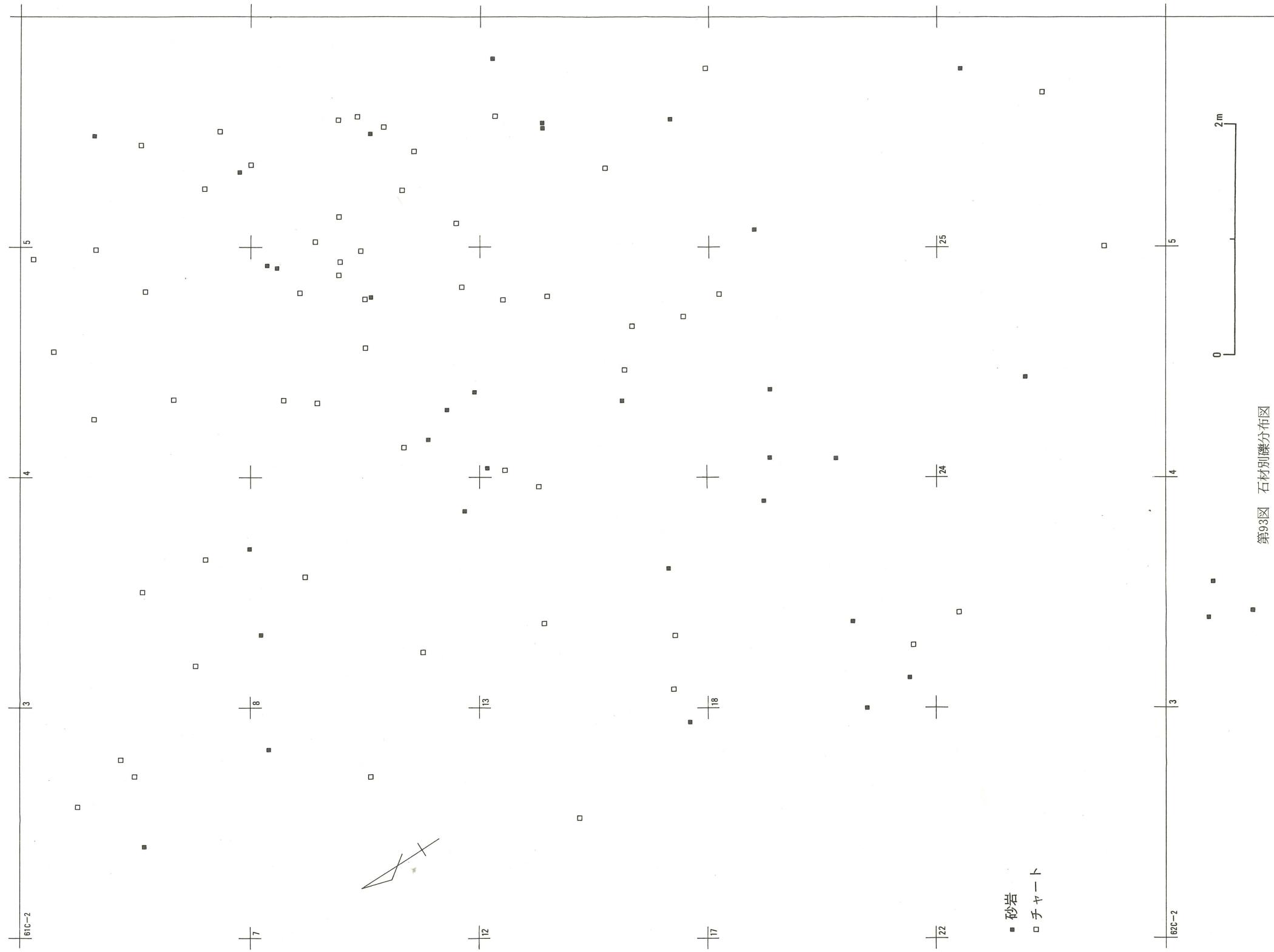
第90図 黒曜石製石器分布図



第91図 チャート製石器分布図



第92図 磯分布図



第93図 石材別縦分布図

註1 石材の同定は筆者が行なっている。従って、名称としては不正確であるかも知れないが、少くとも一貫性を持っているということで統一を計った。

## 7. グリット出土遺物

### a. 土器

久保山遺跡グリッド出土土器は薄い包含層中に多時期の土器が混在していたので層位的には明らかにされない。編年的に古い順より第1群～第8群に分類し報告することにした。

#### 第1群土器（第94図1～24）

縄文早期に編年される土器をもって本群とした。

1. 沈線文系の土器である。器面を研磨したのち、縦位に沈線を施こしているものである。色調は黄褐色、焼成は極めて良好である。2～4. 口縁部の破片であり、口唇部に刻みを入れる。口唇部は平らになる。2・3は細隆起線を斜位に2条施こし、細沈線を充鎮して文様帶を作り出している。裏面には貝殻条痕が施こされる。4・細隆起線文で文様を作り出す。隆起線以外の部分はよく研磨されている。色調は黄灰褐色を呈しており、胎土には若干の纖維を含む、焼成は良好である。5～11は口唇部を欠損した口縁部の破片である。5・6・11は細隆起線を横位に一条巡し、縦位または斜位に何本かの細隆起線を描き、文様を構成するものである。地文には条痕が描かれる。7・8・9は細隆起線文を沈線により文様が描かれる。細隆起線にそって沈線が描かれるとともに横位・斜位に沈線が描かれるものである。10. 細隆起線文が1条横走している。裏面の条痕はあまり明瞭ではなく、5のように擦痕状を呈するものもある。胎土にはいずれも若干の纖維を含む。12. 太い沈線を縦位に施しその沈線に対し45度の角度を持つ沈線を施こしており、太い沈線内には細沈線が斜めに密に描かれる。13～15は斜位に施文する沈線により文様を描いている。13は口唇部上に刻みを有し平らである。地文には条痕を持つ。裏面の文様は明らかでない。16～24は表裏ともに貝殻条痕、又は擦痕状の文様が描かれるものである。17・18のように表裏とも沈線と見誤まるほどはっきりと条痕を施こしているものもある。19・23のようにほとんどわからないものもある。20は口唇部に刻み目を有している。表裏とも多方向に条痕が施文される。横走、縦走の順に施こされている。24は割に難に施文される。胎土には若干の纖維を含む、色調は暗褐色のもの（17・18・19・23）と黄褐色のもの（20～22・24）とがある。以上の土器は全て野島式及び並行の型式として考えることが可能であろう。

#### 第2群土器（第95図1～16）

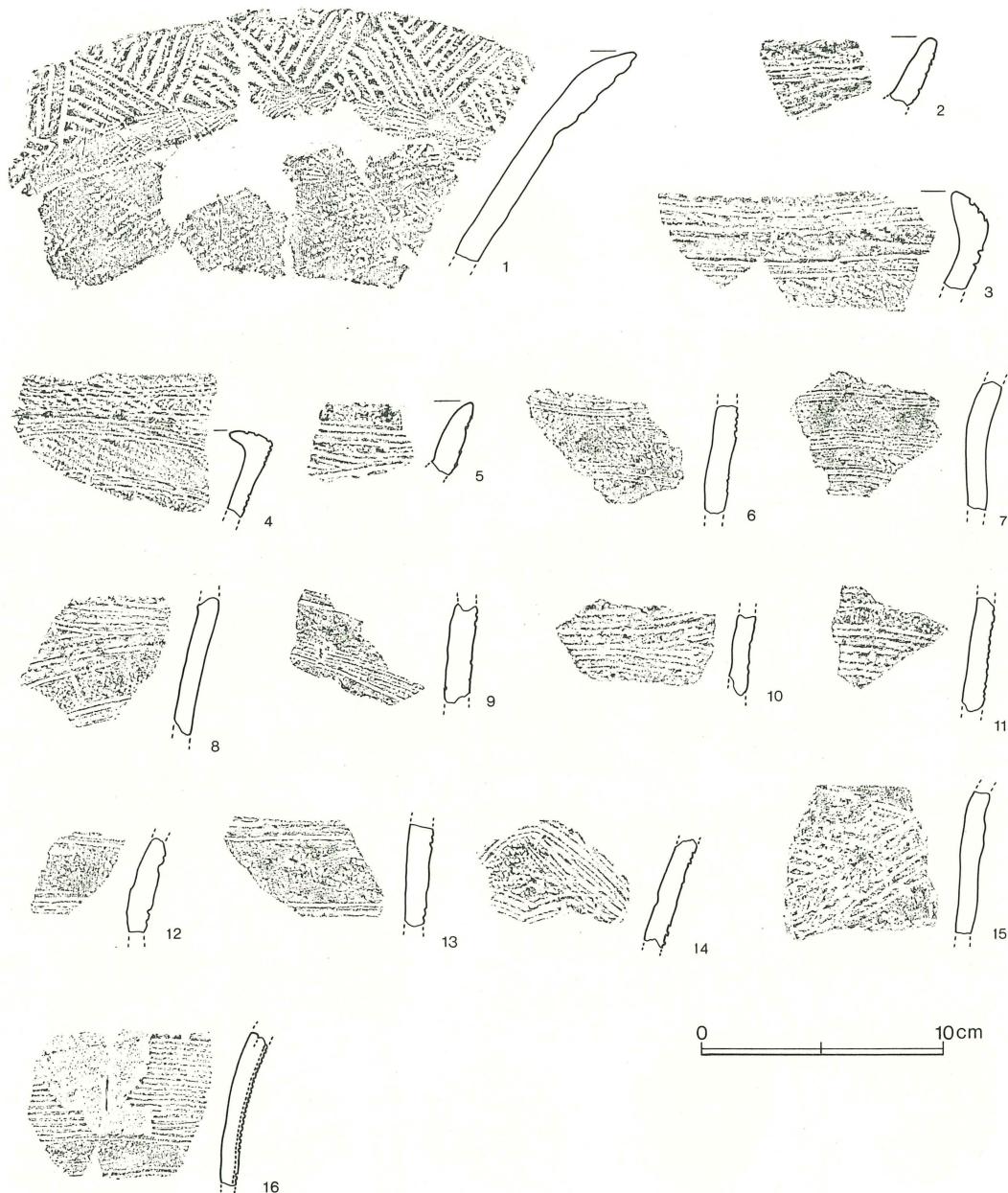
縄文前期に編年される土器を本群とした。台地の南端からの出土であり、北辺からの出土は全くなく、本時期の当遺跡での特徴として指摘することができる。

1. 口縁部はつまみ上げるように細くなり、若干外反する、折り返し口縁風に肥厚するものである。文様は地文に貝殻背圧痕を押捺し、口縁部には沈線により右から左へ三角形を交互に配するような文様構成を有し、胴部には全面に貝殻背圧痕を施こしている。色調は暗褐色を呈する。胎土には多量の纖維を含んでおり、焼成は普通である。花積下層式の中ほどに位置するものである。当遺跡では只1点出土したのみである。2～5は地文に縄文を施し、縄文の上に半載竹管状施文具による平行沈線を横位に描くものである。2・5は横位の沈線に対し斜位に施している。口縁は2・5のように直立するもの、3のような「く」の字状を呈するもの、4のように完全に内傾してしまう



第94図 第1群土器

ものもある。色調は明褐色のものが多く。胎土には小礫を含む。6～14は胴部の破片である。地文に斜行縄文を持ち、その上には半載竹管状施文具により平行沈線が施こされるものである。8～10・14のように菱形構成を示すものと思われるものもあるがほとんど平行沈線である。2～14は諸磯B式のうち古い部分に編年されるものである。15は表面が荒れているが、沈線が斜方向に描かれてい



第95図 第2群土器

る。16も平行沈線が密に施文されている。表面が剝落している。15は小礫を多量に含み焼成は不良である。16は暗褐色を呈する。15・16は諸磯C式であろう。

### 第3群土器 (第96図 1~12)

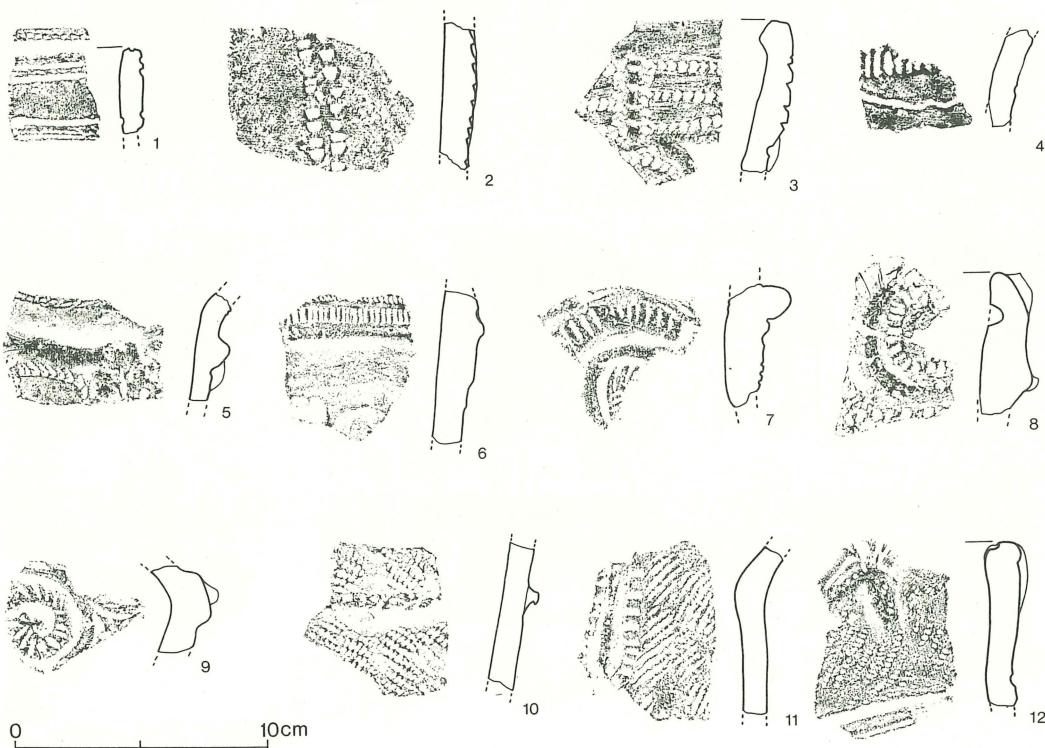
縄文中期前半に編年されるものであり、加曽利E式以前のものである。

1. 2本沈線で楕円区画を施こすものである。小礫、金雲母を含んでいる。
  2. 三角形の刺突文を2列平行に施文するものである。小礫を多量に含んでおり、焼成は悪い。
  3. 縦位に隆帯を施し両側に隆帯上に爪形文を施こす。また横位に3列の爪形文を施こしている。
  4. 横位に爪形文を施し沈線を同方向に蛇行させながらそわしている。
  5. 隆帯上に爪形文を施し、周囲を研磨している。
  - 7~9は隆帯が曲線状を呈しているものであり、7・9は隆帯上に爪形を施し、西側に沈線を配する。
  - 8は2本の隆帯のうち1本の上に爪形文を配し、隆帯にそって爪形を施こしている。
  - 10~12は縄文を地文に有するものである。
  - 10は隆帯上に縄文が施こされる。
  - 11は隆帯にそって沈線を描いたのち爪形文を施す。
  - 12は波状口縁にそって隆帯を付し、波頂部より楕円形の貼付文を有する。
- 10・11はL <sup>R<sub>R</sub>、12はR <sup>L<sub>L</sub>縄文を施こしている。

### 第4群土器 (第97図 1~12・14、第98図)

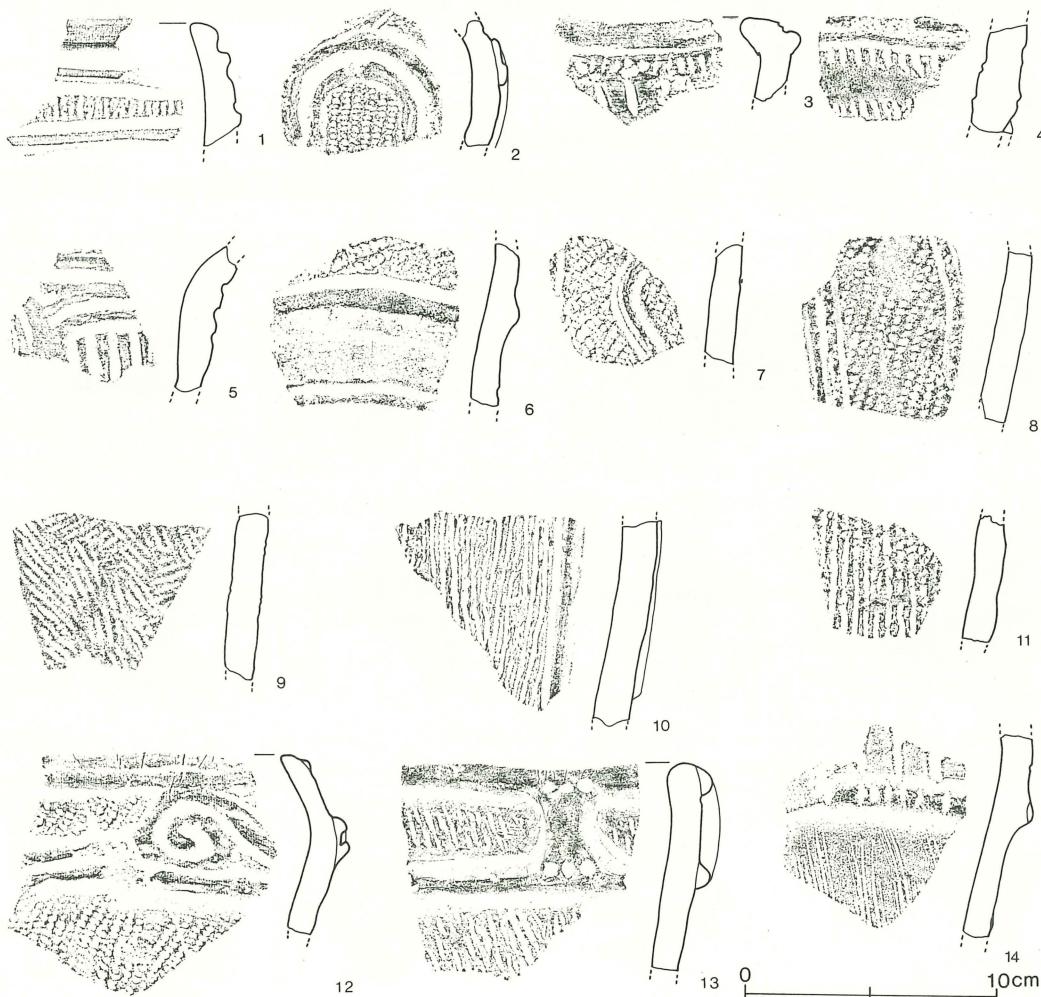
加曽利E式のうち磨消し縄文を持たない時期に属するものを本群とした。

1. 原体Lの撫糸文を施し、隆帯により楕円区画を付し、隆帯の両側に沈線を描くものである。

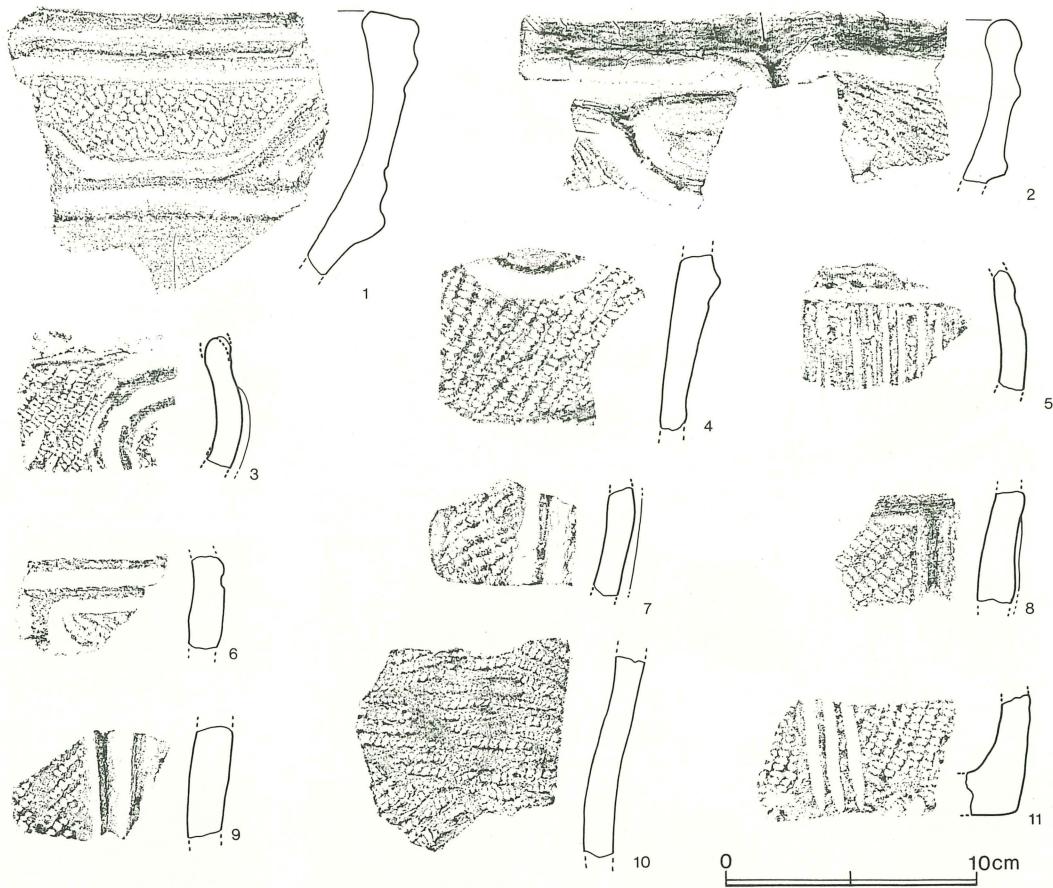


第96図 第3群土器

2. 曲線を描く隆帶両側に沈線を描いている。縄文は $L < R^R$ である。3～5は隆帶にそって沈線を施こしたのち刻みを縦に入れる。6. 隆帶の両側に沈線を描き頸部を無文化せるものである。6・7は隆帶の懸垂文を持つもので、隆帶の両側に沈線を描いている。7は蛇行、8は垂下し沈線により蛇行させている。縄文はともに $R < L^L$ である。10. 原体Lの撫糸文を施こし、両側に沈線を持つ隆帶の懸垂文を垂下させる。12. 潟巻きの隆帶に沿った沈線により文様帯が構成される。縄文は $R < L^L$ であり、胴部には全面的に施文される。14. 隆帶により上下2つの文様に分かれる。上は縦位の沈線を施し、下は3本1組の条線が施文される。第98図1は隆帶により窓枠状の文様が施こされるものである。縄文は $L < R^R$ 、頸部は無文化する。2. 隆帶により渦巻き状の文様を描くものである。縄文は $R < L^L$ である。3・4は2本隆帶により曲線を描くものであり、隆帶内には沈線が施



第97図 第4群土器(1)



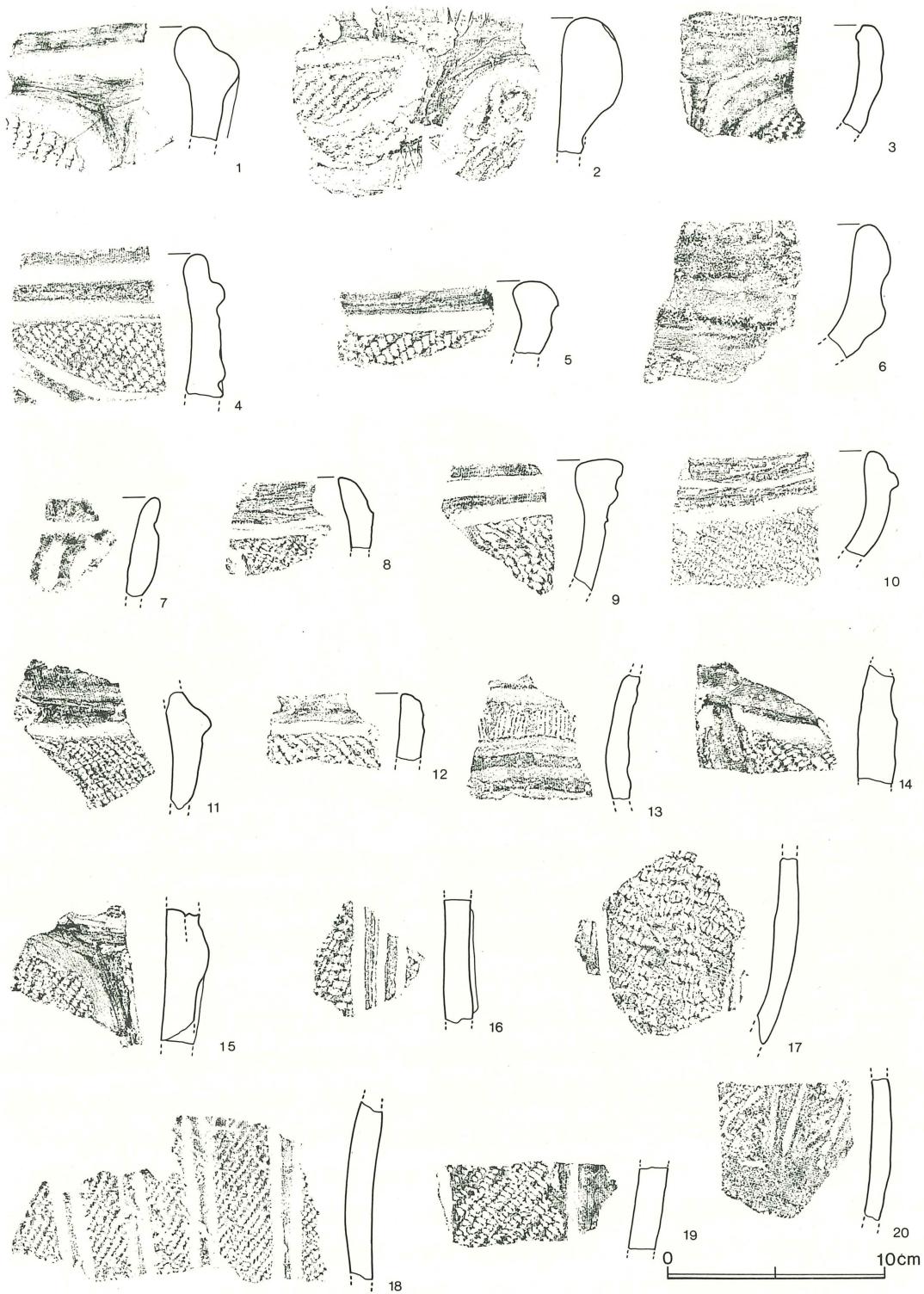
第98図 第4群土器(2)

こされる。縄文は  $L < R$  である。5は横位に沈線を1本描き縦位に密に沈線を施こしている。6～8は隆帶により文様が描かれるものであり、隆帶に沿った沈線が見うけられる。6～9は  $R < L$  縄文を施こしている。11は三本沈線による懸垂文が見られる。

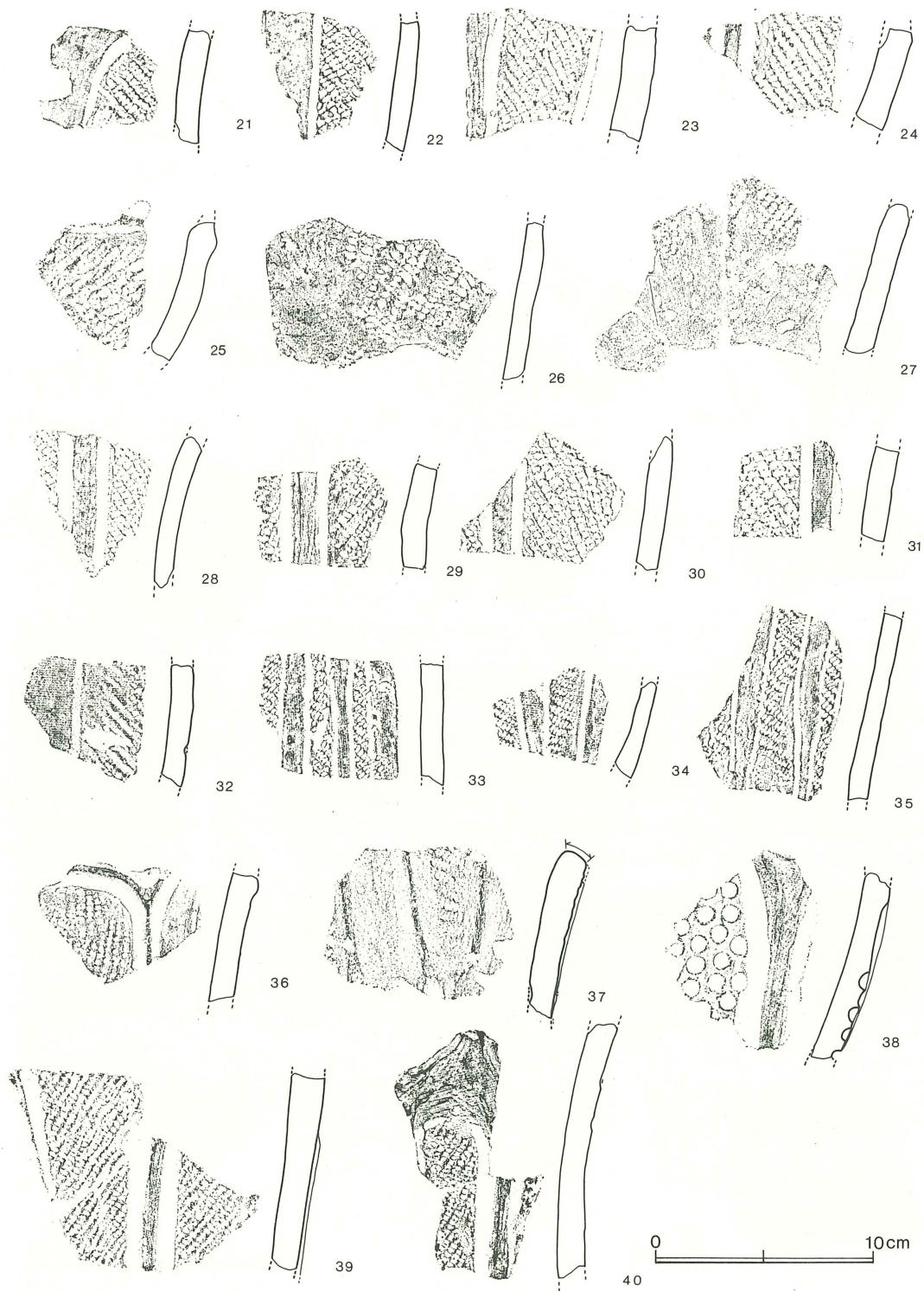
##### 第5群土器 (第97図13、第99図102図)

縄文中期加曾利E式で磨消し縄文を有し最終末期の土器を除く土器群を本群とした。

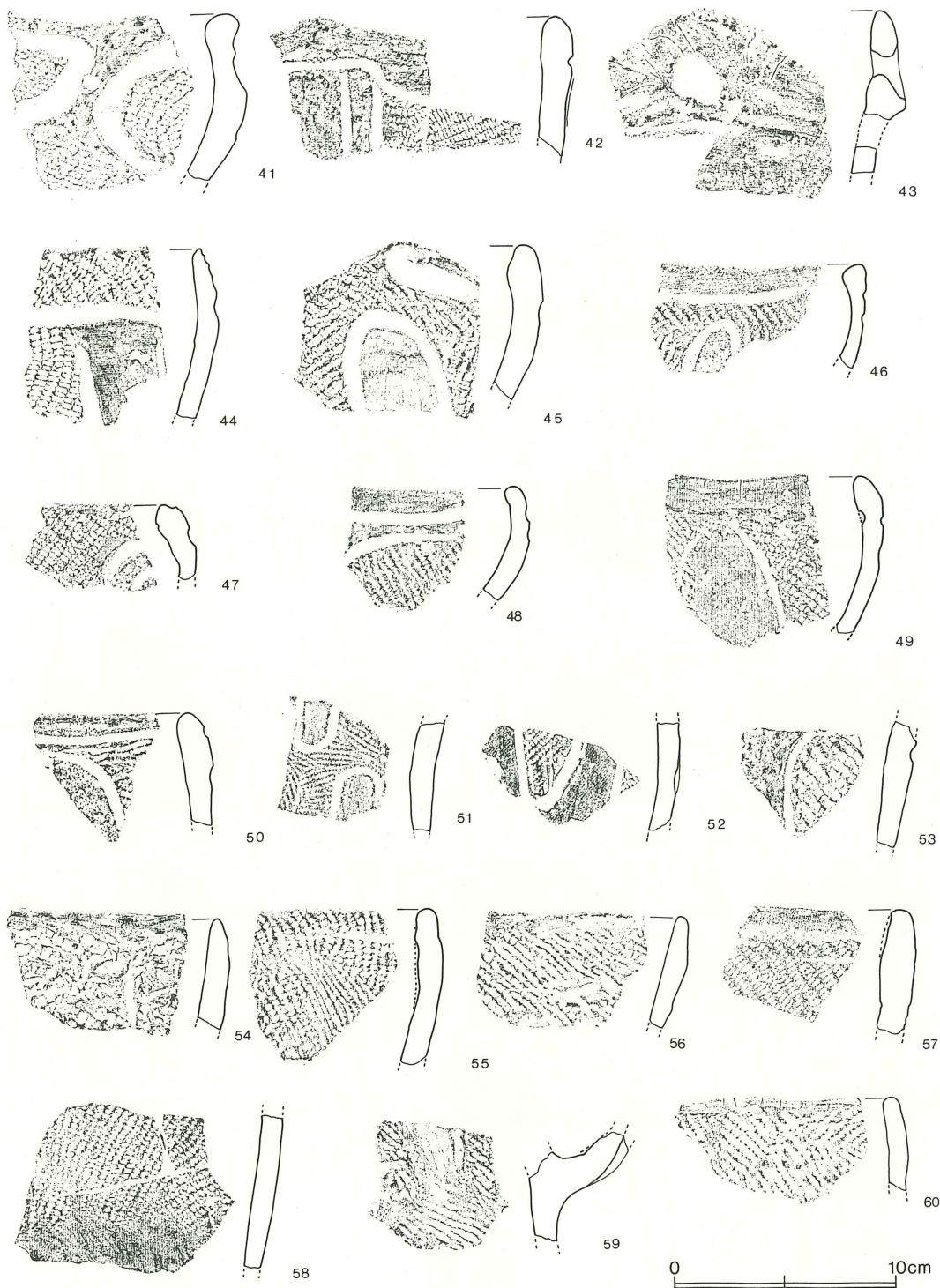
第97図13は楕円区画をつくるものであり垂下する隆帶上には円形刺突文3個ずつ対称的に描かれている。沈線で楕円区画を描いている。原体Lの撲糸を施文する。第99図1～14は隆帶により渦巻きや楕円区画を描くものであり、渦巻きもかなり単純化してきている。1～8は  $L < R$  縄文、9～12は  $R < L$  縄文を施こしている。13は原体Lの撲糸文を施こしている。15～40は懸垂文を有する土器である。この時期の懸垂文は磨消しの懸垂文が沈線により施こされるものと断面カマボコ状の隆帶による磨消し文がある。2本の沈線による懸垂文を持つもの (17・19・20・21～23・28～35)、3本沈線による懸垂文のもの (16・24・27)、隆帶の懸垂文を持つもの (15・18・36～40) に分けられる。2本沈線による懸垂文は沈線間が広いものがほとんどであるが33～35のような幅のせまいものも見られる。これらの土器は7～8本位の磨消し部を持つことが多く沈線もだらしなくな



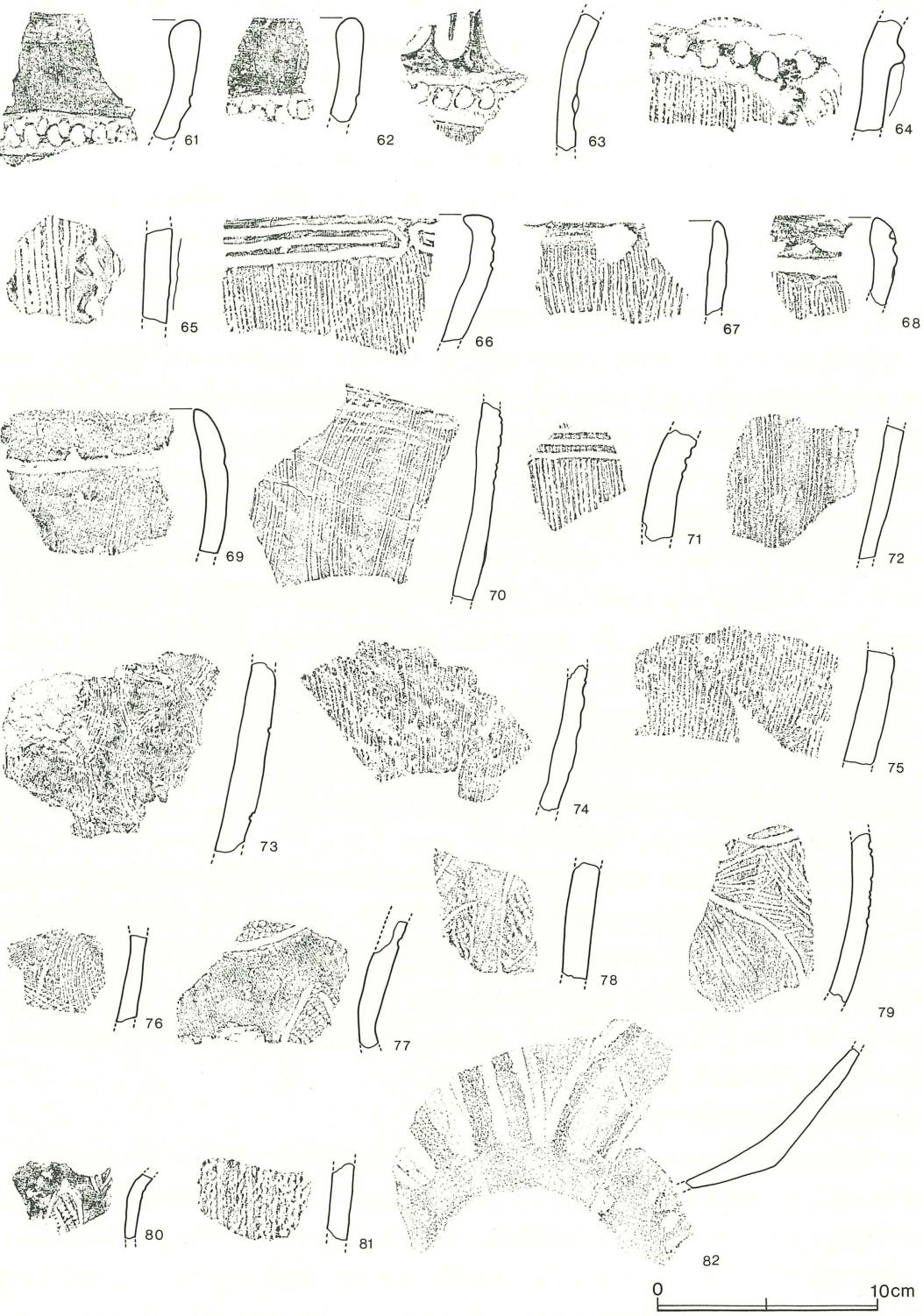
第99図 第5群土器(1)



第100図 第5群土器(2)



第101図 第5群土器(3)



第102図 第5群土器(4)

る傾向にある。これらの土器は加曽利E式の主系統にあるのではなく、曽利式の影響下にあるといえよう。断面カマボコ状の隆帯を有する土器の出自は加曽利E式の本流からは外れるといえよう。これらの土器の縄文は比較的単純な加曽利E式期にあっては特殊性を帶びてくる。単節縄文も〇段が多条化する(8・22・28等)。又複節縄文(5・16・26・30・31)等がある。38は隆帯内に円形の刺突文が充鎮される。41~48・50は口縁部の文様帯が退化し消滅の過程にあるものである。41は太い沈線で楕円区画をつくる。42・44は横に沈線を施し、縦に垂下する磨消しの懸垂文を有する。42は口縁部を無文に、44はR < <sup>L</sup> 縄文を施文している。45~48・50は「U」字状の懸垂文を有している。51~53は脚部の破片であるが「U」字と逆「U」字がずれている。54~60は縄文が施文されるもので口縁が内傾するものが多い。口唇部より縄文が施文されるものもある。R < <sup>L</sup> 縄文が多い。61~64. 隆帯状に刺突文を施し、胸部には条線を施文するものである。口縁部内には低い稜を持つ、63のように曲線の沈線の施こされるものもある。隆帯状の刺突は交互刺突文の伝統を有している。65. 条線の上に曲線の隆帯を貼付している。66. 細長い沈線による楕円形の口縁部文様帯が作られ、内部には一本の沈線が施こされる。67~69は口縁下に沈線を配し以下条線が描かれる。71は条線を施こしたのち3本沈線が横走する。70・72~76. 条線が器面全面に施文される。73のような波状を呈するものもある。77・78・80. 「V」字状、逆「V」字状の組み合わせたものである。先端同士がずれている。6群にはいるかも知れない。79. 沈線内に沈線を充鎮させるものである。81. 原体Lの撲糸文、連弧文土器であろう。82. 懸垂文の施こされた底部である。沈線間は全て無文である。

#### 第6群土器（第101図49、第103~104図）

中期最終末の土器群を本群とした。加曽利E IV、4式と呼ばれるものである。

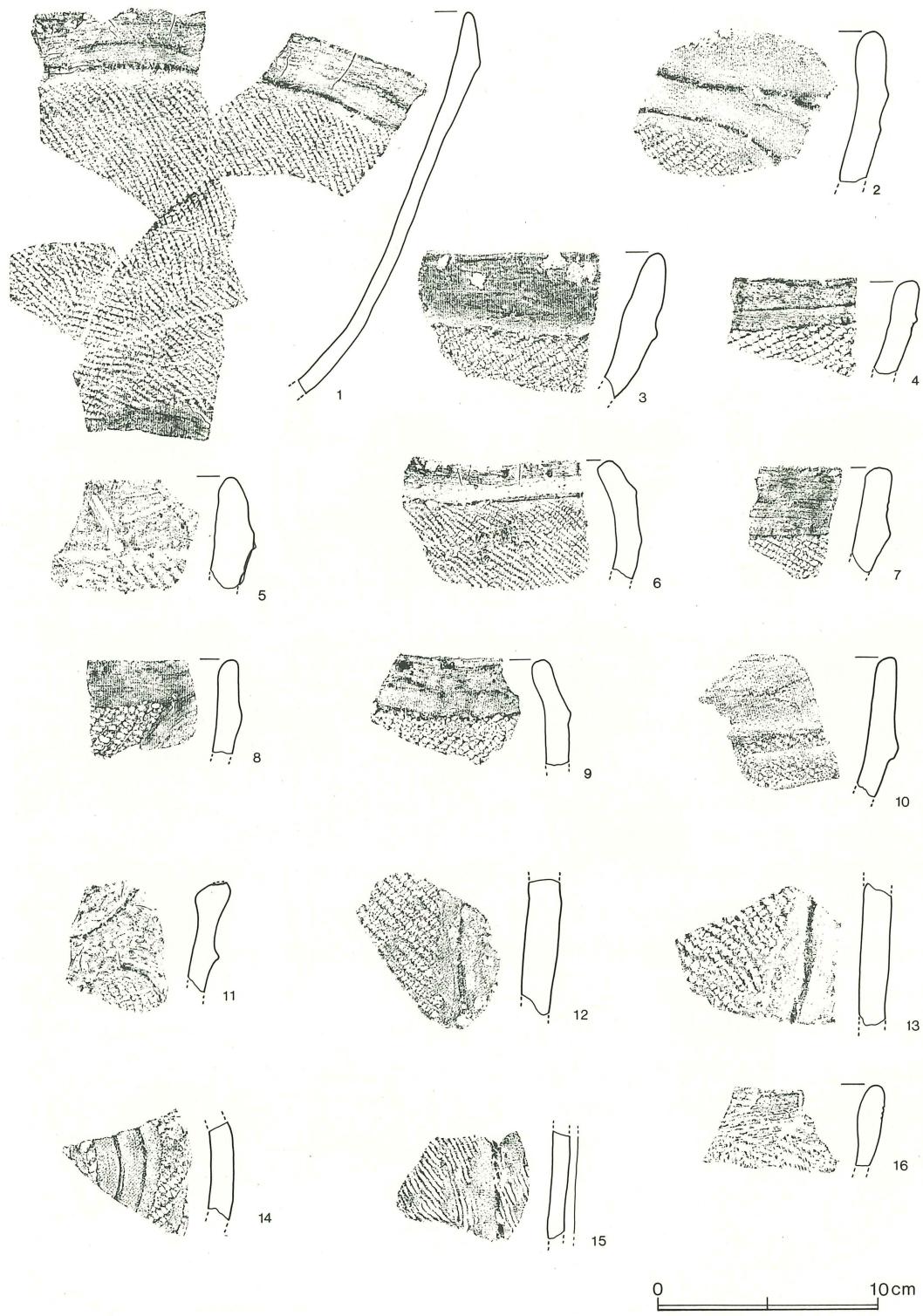
第1類（第103図）微隆起線文により文様が構成されるもの。第2類（第104図）沈線文により文様が構成されるものの大略2つに分けることができる。

#### 第1類土器（第103図1~15、第104図36）

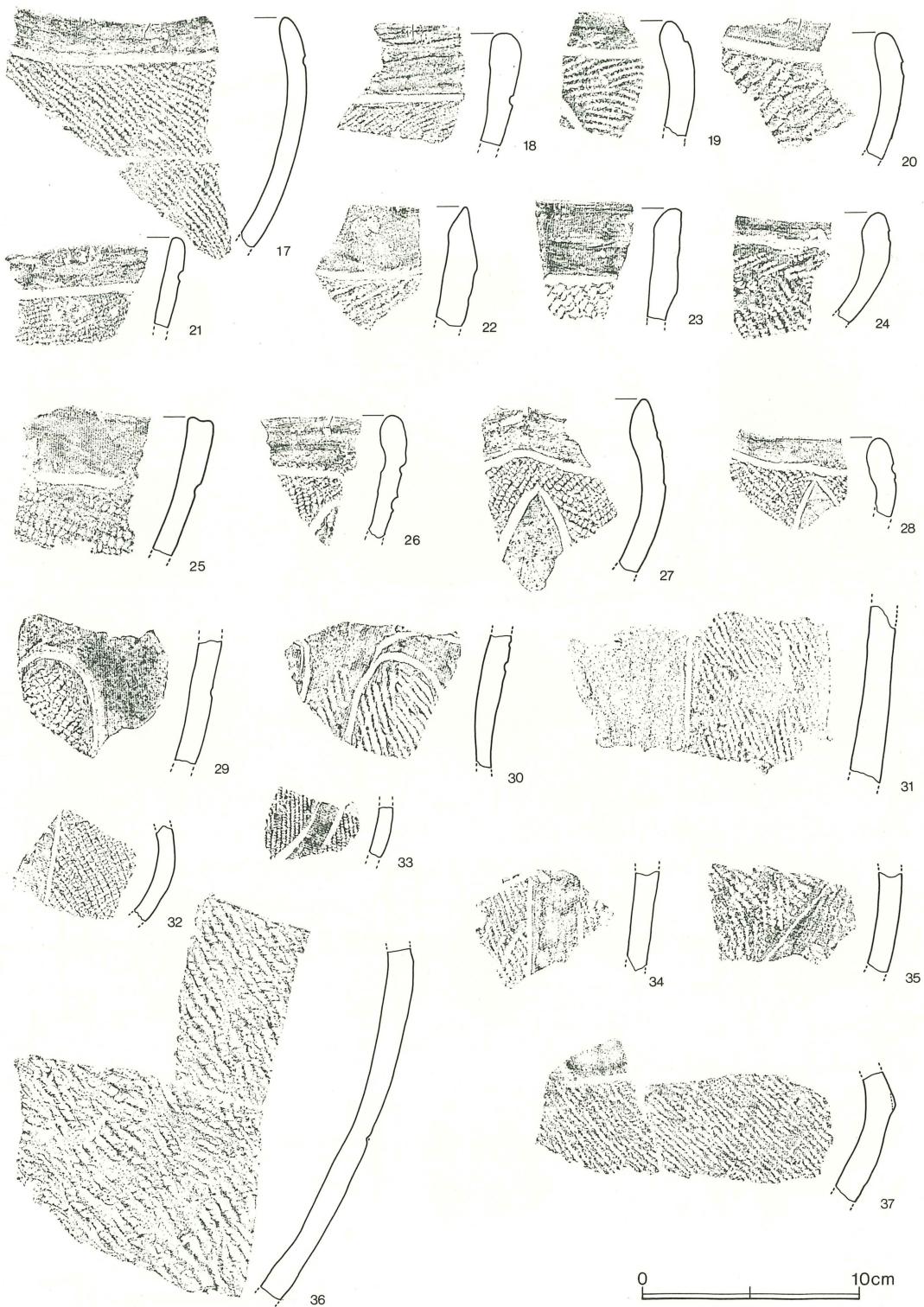
1. 深鉢形土器の大形破片である。口縁下に微隆起線文を施しL < <sup>R</sup> 縄文を胴部全面に施文する。2・8・11~15は微隆起線文による懸垂文を持つものであり、「U」、逆「U」字状の懸垂文が見られる。縄文が器面全体に施こされるものも多い。文様構成は比較的単純である。11や14のように微隆起線が曲線を描くものもある。微隆起線の両側は良く研磨されている。縄文は〇段多条のR < <sup>L</sup> 縄文(3・12)、L < <sup>R</sup> (6)、無節L < <sup>r</sup> (15)の他はL < <sup>R</sup> 縄文が多い。胎土には小礫を若干含み、焼成は良好のものが多い。色調は褐色~暗褐色を呈する。

#### 第2類土器（第104図17~36）

第1類同様全て破片であり、器形、文様とも全体を知り得るほどの大形土器片の出土はなく、一部が知り得るのみである。口縁部は無文化し、その下を沈線を1本巡らして文様を作る。文様帯は極めて単純である。口縁のつくりは口唇部を丸くするもの、尖らすもの、平らにするものがあるが一般的に内傾するようである。文様は口縁下に沈線を横走させ、胴部には「V」「U」、逆「V」、逆「U」字状の組み合せによる懸垂文を持つものである。「V」字状文を有するもの(19・26~28・34)、「U」字状文を有するもの(29・30・33)がある。30のように縄文を磨消しきずして残存しているものもある。縄文は器面全体に施こすものは縦位回転のものが多く、胴部を沈線で文様構成す



第103図 第6群土器(1)



第104図 第6群土器(2)

るものは充鎮縄文が多い。縄文は30が $L < r$ 以外全て $L < \frac{R}{r}$ である。26・32はO段が多条おそらく3条であろう。また節が極めて細かくなり、後期的様相を呈してくる。

### 第7群土器（第105～107図）

後期初頭称名寺式に編年される土器群である。2本の沈線により文様を描き出している。沈線内には縄文、または刺突による列点文が充鎮されるものである。縄文が施こされる第1類と列点文が施こされる第2類、縄文のみの第3類、その他の第4類に分類する。

#### 第1類（第105図、第106図24～29・34・35）

1～9は口縁部の破片である。口縁部の内側には稜を有するものが多くこの期の特徴の一つをしている。2本の沈線により様々な文様を描き出すのであるが破片であり、詳細は不明である。平口縁のものが多いが8のように明らかに波状を呈するものもある。15・28～30のように隆帶による貼付文もあり、隆帶がY字状やその他の文様を描いている。隆帶上には刺突や刻み、縄文が認められる。沈線は直線的に垂下するものもあるがほとんどは曲線を描き、20～22のようにスペード形類似の文様を描いているものも見られる。沈線は比較的しっかりと力強く施文されている。沈線内の縄文は $L < \frac{R}{r}$ の充鎮が多く、5・13・16・21は縄文が沈線外にも飛び出しており充鎮縄文であることがわかる。1や14は $L < r$ の無節縄文であり、極めて細い縄文によって施文されている。26は「U」字状の曲線を描いている。34・35は沈線を描いたのち $L < \frac{R}{r}$ 縄文を施文しているが縄文はほとんどの全てに施文され研磨された無文部はなくなる。当時期の特殊な土器であろう。当型式は文様が入り組んでおり、文様全体が明らかでなければ理解しがたいところがあり、当遺跡のような出土状況では知り得ることも少ないといえる。これらの土器の色調は暗褐色を呈しているものは胎土緻密で焼成が良好であるが、黄褐色のものは胎土に小礫を含み、焼成は良くないといえよう。特に28～30の隆帶を持った土器は焼成がよく堅緻であった。

#### 第2類土器（第106図36～45）

2本の沈線により文様を構成し、内部に刺突による列点文を持つものである。J字文、スペード文などが見られる。器形は口縁部内に稜を持つもの（36・37）、内傾するもの（38）のようなものも見られる。列点文も横に規則的に施こされるものや密に施文されるものなどがある。37・40・41はスペード文として捉えられよう。43は尖った三角形の先端のような文様を描いている。他は曲線的に描いているが全体像は不明である。

#### 第3類土器（第106図31～33）

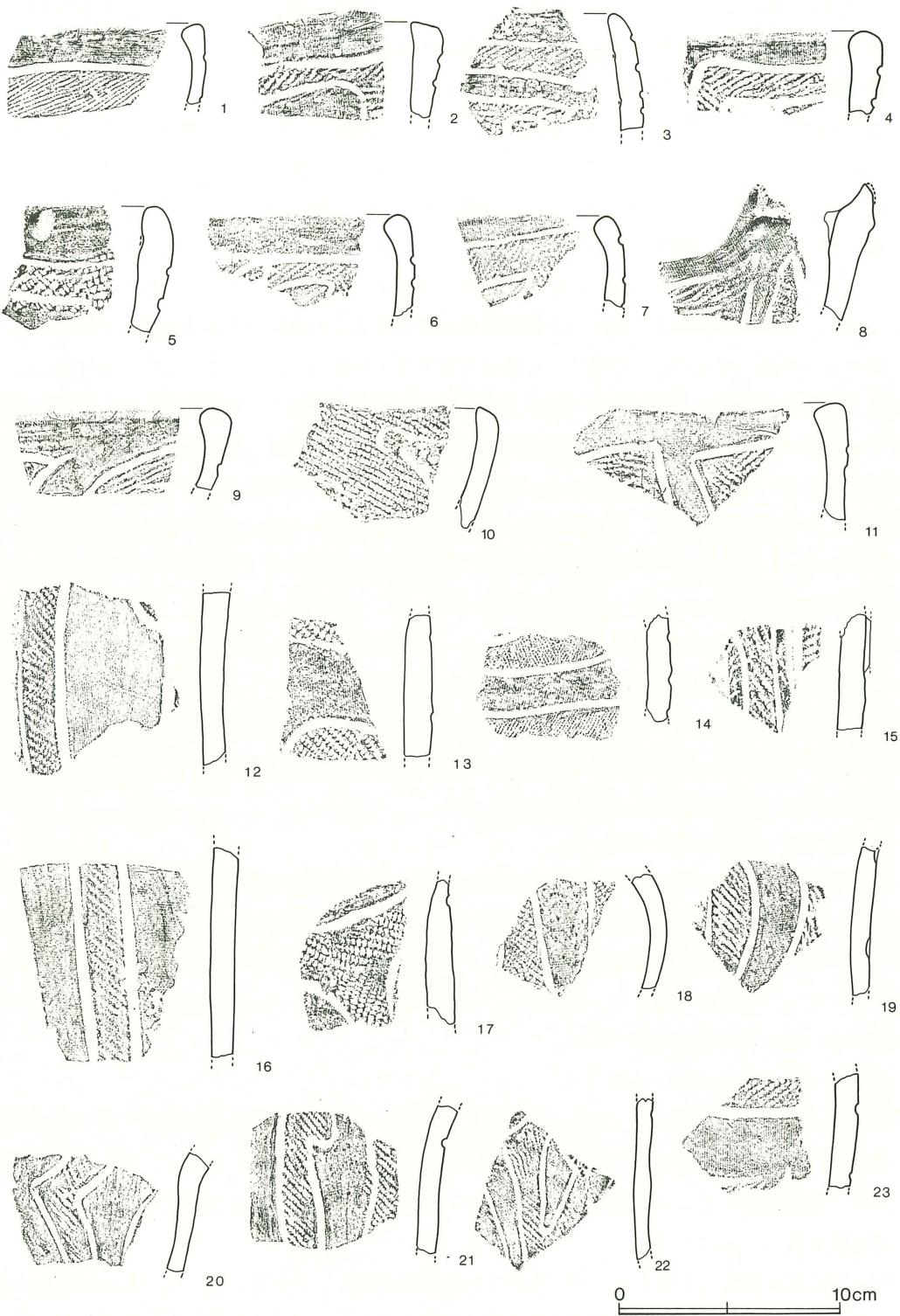
第6群土器に多く見られる口縁部を無文にし、沈線を横走させ斜行縄文を施す1群である。これらの土器は内部に稜を持ち、32は $L < \frac{R}{r}$ 縄文を横回転してから縦回転している。これらの土器はいわゆる“粗製土器”として中期末～後期前葉まで若干の器形を変化させながら変遷してゆく。

#### 第4類土器（107図46～51）

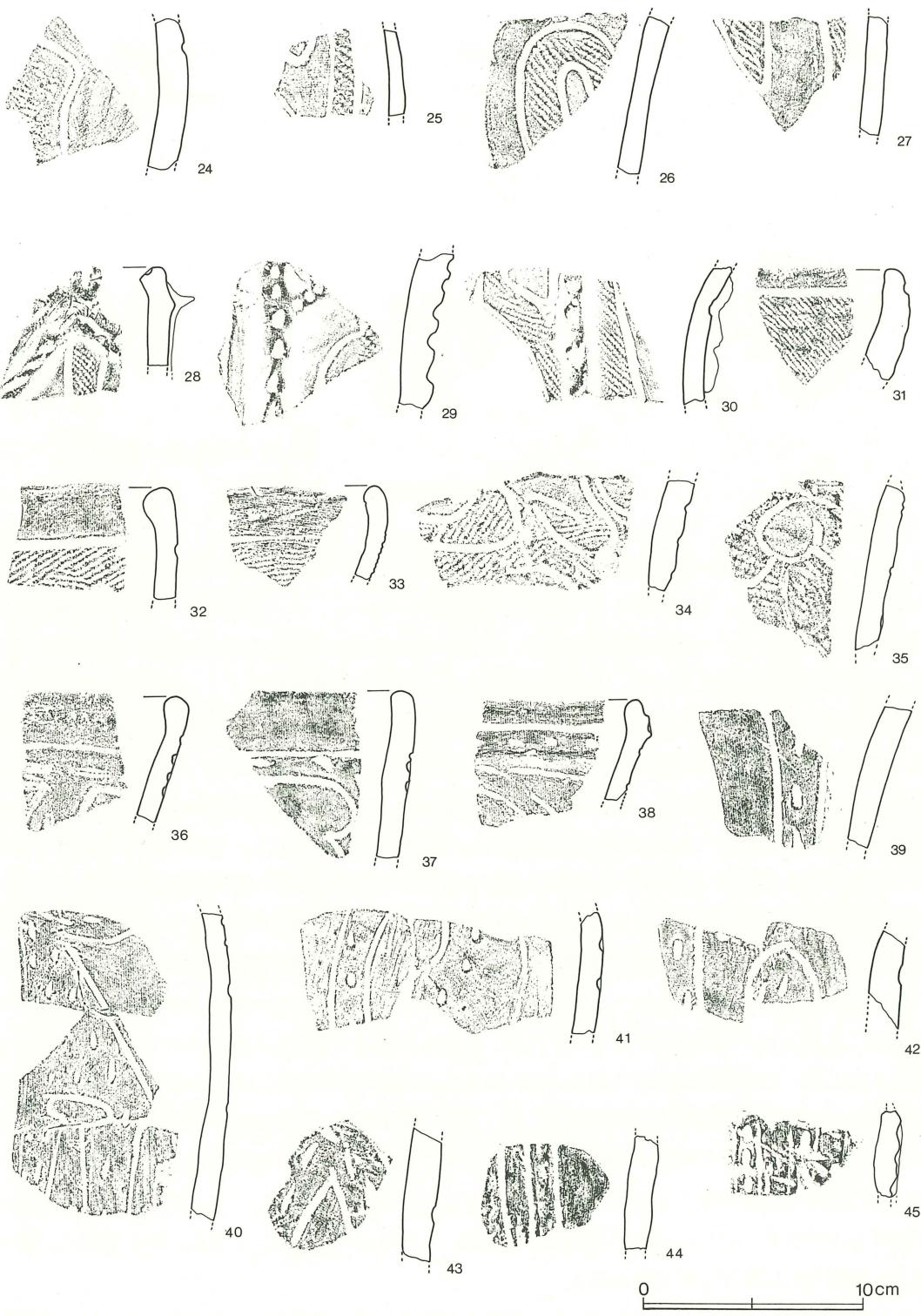
46. 口縁部に刺突文を有する。47. 菱形文内に刺突を施している。48. C字状の貼付文を有している。49・50. 平行沈線が施こされ他の部分は無文である。51. 円形刺突文が2列配される。

### 第8群土器（第108図）

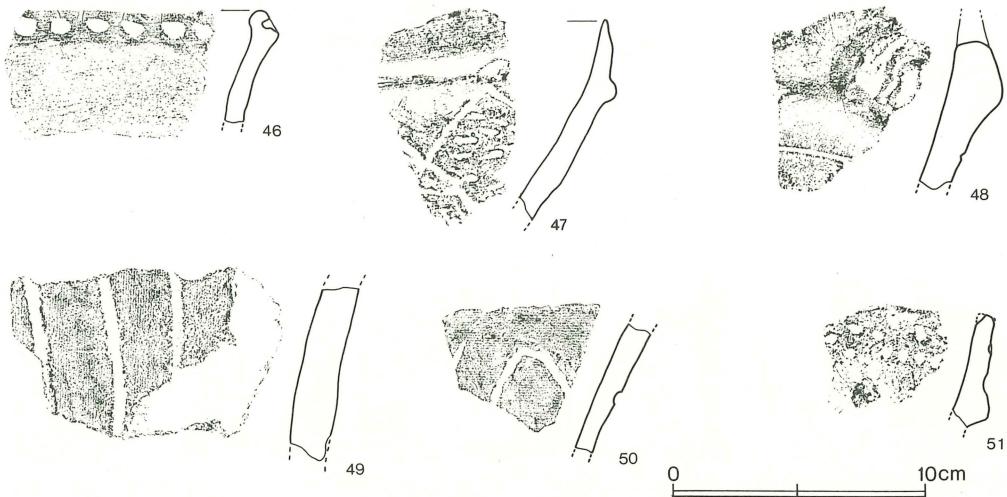
後期前葉～晩期に編年される土器群を本群とした。



第105図 第7群土器(1)



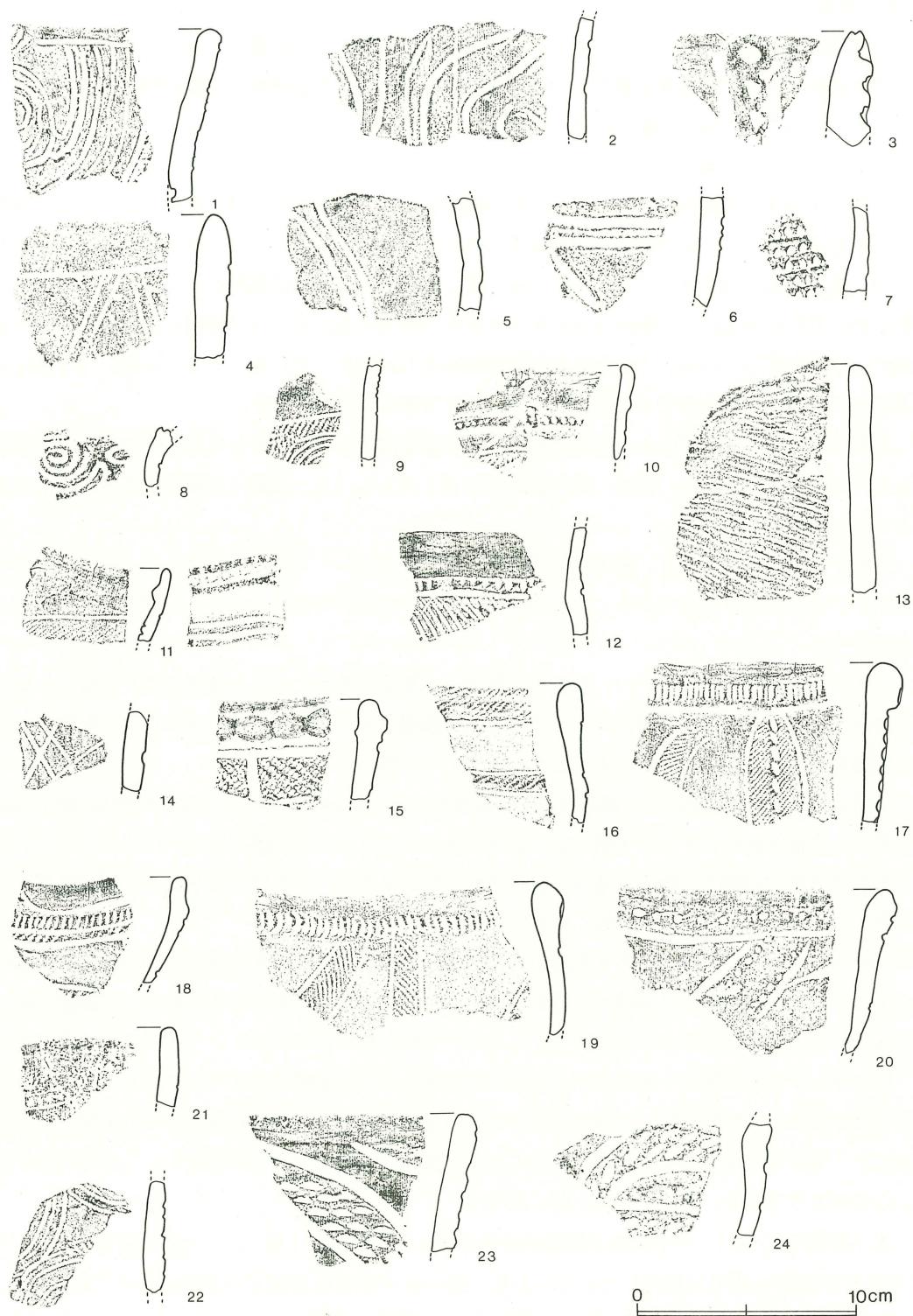
第106図 第7群土器(2)



第107図 第7群土器(3)

1・2・4・6は沈線により文様が描かれるものである。1. 中心部分では同心円状に外側は孤状に描く口縁部である。2. 沈線により縦位に曲線を描いている。3. 口唇部より垂下する隆帶上に円形の刺突文を施す。4は沈線を横走させ、2本の沈線を斜行に施し、三角形の文様を描く。5. 2本の沈線が縦位に施される。6. 2本沈線により三角形を構成する。7. 円形の小さな刺突文が横位に密に施されるものである。8. 注口土器の破片であろう。同心円状の沈線が施文される。9. 沈線内に  $L < R$  縄文が施文され、下には同心円状の波線が描かれる。10. 口唇下に隆帶を横走させ、隆帶上には刺突を加え、8字状の貼付文が見られる。胴部には平行沈線を描き、内部に  $L < R$  縄文を充鎮する。11. 表面には平行沈線内に  $L < R$  縄文が充鎮される。沈線外はよく研磨されており光沢がある。裏面には口唇下にも1本の沈線を付したのち、胴部に2条の沈線を施している。12. 口縁の沈線内に刺突を施し、胴部には斜行沈線を施す。地文には縄文が施文されている。13. 反の縄文であろうか。縄文が密に器面全体に施文される。14. 沈線で格子目状の沈線が描かれる。15. 口唇下の隆帶上に指頭圧痕を施し、胴部には平行沈線内に  $R < L$  縄文が施文される。沈線は縦にも施されている。16. 隆帶を二段につくり出し、上に  $L < R$  縄文を施し、隆帶の上下には沈線が施されている。17. 口唇部には隆帶を付し、刻みを入れる胴部には縦に木の葉状の沈線を描き  $R < L$  縄文を施している。縦位に列点が描かれる。18. 波状口縁を呈する。沈線を3本描き縦の刺突を二段にわたり施す。胴部にも同様の文様が描かれるものと思われる。19. 隆帶上に爪形文を描き胴部には、平行沈線で文様を描くものである。内部には  $L < R$  縄文を充鎮している。20~24は沈線に列点を施すものである。21・22は細い沈線に沿って描いている。23・24は太い沈線で木の葉状の文様を描き、沈線内には刺突文が充鎮される。

1~6. 堀之内1式、7. 三十稻場、8~10堀之内2式、13. 堀之内2式の胴部。11~15. 加曾利B式、16・17・19. 安行1式、20~24. 安行3C式の各型式に該当するであろう。



第108図 第8群土器

### b. 石器

遺構外出土の石器はそれほど多くない。その中から、ここでは石鏃 7、スクレイパー 1、リタッチのある剝片 1、使用痕ある剝片 1、剝片 1、石核 4 について説明する（第109図）。これらは 8B 区から 63B 区まで非常に広範囲に渡って出土したものであり、所属時期については不明確である。

1) 石鏃 7 点の石鏃は、形態上 VI 類に分かつことができる。

I 類は身に対して脚が長い。側縁は凸形に彎曲し、脚部は U 字形を呈する。ブロック 2 の III 類と同型と考えられる。1 は側縁が強い鋸歯状に作り出されている。中央部にわずかに一次剝離面を残すが、概して加工は丁寧である。一方の脚を欠失する。折損面は基部側から力が加わっている。黒曜石製。27C 区出土。2 の側縁は 1 と異なりスムーズである。加工は全体的に丁寧である。やはり脚の一方を欠失しており、その折れ面は基部側から力が加わっている。チャート製。15C 区出土。本類の石鏃は、形態から考えて縄文時代早期位まで遡る可能性がある。

II 類は 3 である。小型であるが周縁部の加工が比較的急傾斜であるために、やや厚手の印象を与える。調整は丁寧である。先端・脚の端部ともよく尖っている。側縁は直線的で基部の抉りは深い。チャート製。29C 区出土。

III 類としたのは 4 である。側縁は直線的で上端近くではむしろ反り気味になり、鋭い尖端を作り出している。加工は丁寧である。基部の抉りは II 類と平基の中間型を為す。良質のチャート製。8B 区出土。

IV 類は大型の石鏃である（5）。側縁は直線的で二等辺三角形に近く、基部の抉りは浅い。加工はかなり丁寧であるが、一面は大きく一次剝離面を利用している。脚の一方を欠くが、折れ面は素材主剝離面側から力が加わっている。安山岩製。1 号小堅穴出土。

V 類は二等辺三角形に近く、基部はわずかに抉れる（6）。石質があまりよくないためか、加工は概して荒い。先端も鈍い。チャート製。61C 区の出土で、ブロック 2 に隣接する。

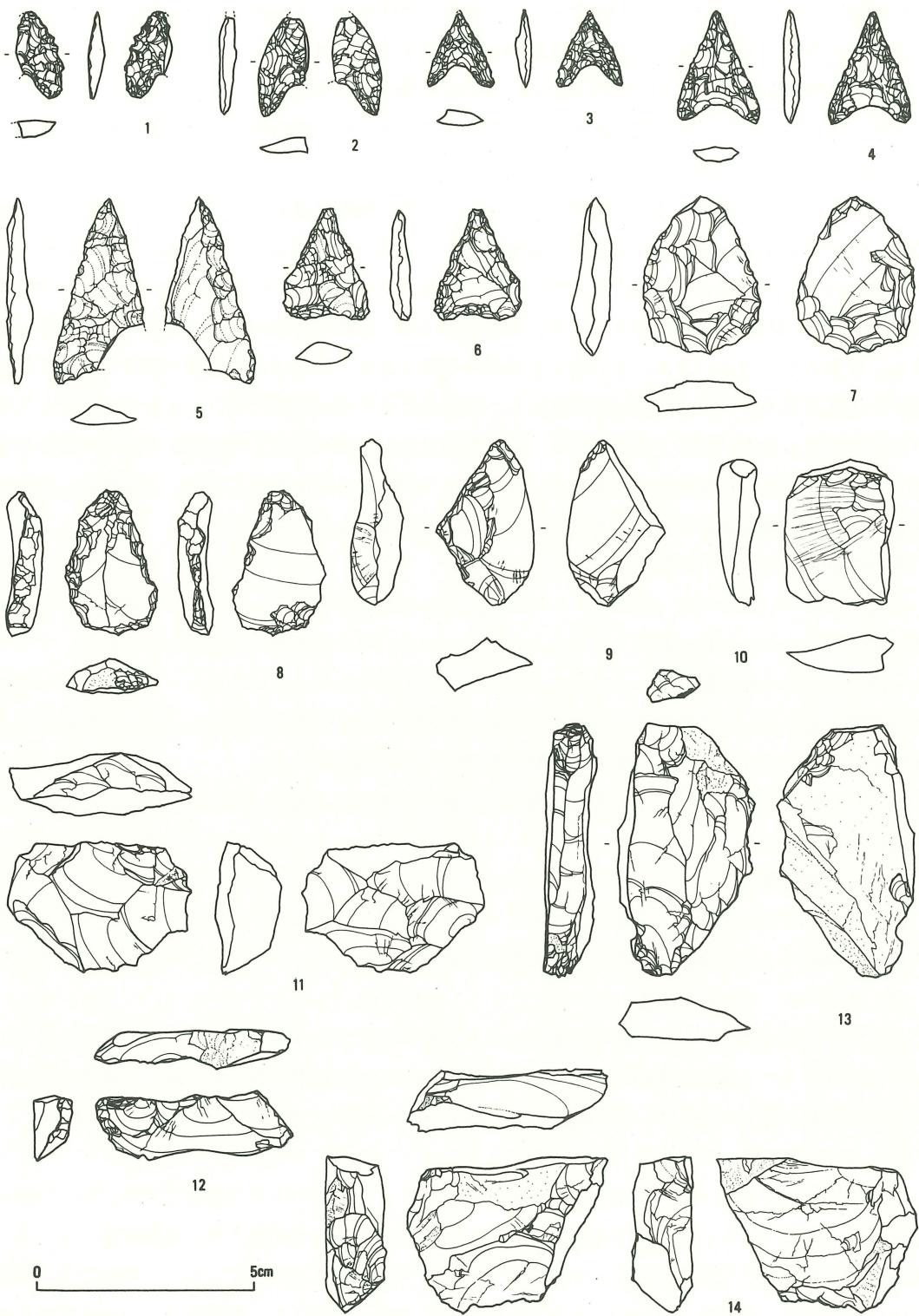
VI 類は大型の石鏃で、側縁・基部とともに凸形に彎曲する（7）。素材の面を大きく残しており加工は荒い。先端は純い。チャート製。62C 区出土。

2) スクレイパー 縦長の剝片を利用し、両側縁と下縁右半分に刃部を持つ（109図 8）。調整加工は荒く、統一性に欠ける。刃部の凹凸が著しい。石鏃の未成品とも考えられるが、石鏃を意図しての加工とするにはあまりに一貫性を欠く。チャート製。61C 区で、ブロック 2 に隣接して出土。

3) リタッチのある剝片 本資料は、剝片剝取の後かなりの調整が加えられており、原形を推定することが難しい（第109図 9）。特に背面右の剝離は大きく、あたかも石核のようである。上端部右側には、表裏から細かな調整が加えられている。裏面下半部の大きな剝離痕も、二次的に加えられたものようである。チャート製。62C 区出土。

4) 使用痕ある剝片 すでに先土器時代の所で触れた（第IV章 2 項）ように、本資料はブロック 1 の剝片と約 260m 離れて接合したものである。微小剝落痕は左側縁から下縁にかけての表面と、下縁の裏面に現われている（第33図 2）。個々の微小剝離は形態的に統一性がなく、使用痕として容認し易い様相を示している。黒曜石製。63B 区出土。

5) 剝片 ことさら説明する程のものではないようであるが、本資料は前述の使用痕ある剝片とと



第109図 遺構外出土の石器

もに63B区から出土している(109図10)。しかも、形態的にはともかく、黒曜石の石質はブロック1に見られる一群と酷似している。また63Bからは4点の石器(剝片)が出土しており、それらがいずれも黒曜石製であるという点も、ブロック1と通ずるものがある。

6)石核 4点ともチャート製であるが、形態上は全く統一性は認められない(第109図11~14)。11~13の3点は、62C区からブロック2に隣接して発見されている。11は亀甲状を呈する。素材は厚手の剝片と思われるが、その主剝離面側で主として剝片剝離を進行させており、背面にも打面調整と剝片剝離を兼ねたような剝離痕が数枚残されている。剝離痕は1~1.5cm四方で小さい。一部に素材の主剝離面を残す。12の素材の性状は明らかでない。剝片剝離面と思しき所には、幅3.5、長さ1.5cm位の最終剝離面を留めている。石核左端では、最終剝片を剝離した後、さらに表裏に細部加工を施している。13は、他と著しく異なる形態を示す。素材は、節理面で破碎した板状の角礫片と考えられるが、その長軸の木口面から、幅はおそらく1cmに満たない、長さ4~5cmもあるかと思われる細長い剝片を取っている。剝片剝離は上・下から行なっている。14は63C区から出土している。2枚の比較的大きな剝片が、対向する2側縁から剝がされている。上縁裏面には、打面調整の様な剝離が並ぶが、ここを打面とした剝片剝離は行なわれていない。

#### 大形石器(第110図~114図)

当遺跡は縄文早期の炉穴(野島式)のほか、縄文中期の加曽利E I~E II式期、後期の称名寺式期の住居跡および、加曽利E III・E IV式の小竪穴、あるいは多くの土坑が検出されており、グリッド・溝出土の多くの石器類は、これらの遺構に伴なうと考えられる。特にグリッド出土の多くは10区~18区に見られ、この地域には土坑・住居跡・埋甕の分布するところである。また8号溝からも多く出土するが、この地域も同様に縄文時代の遺構が多い地域だった。

出土した石器は打製石斧(I)、磨製石斧(II)、敲石・すり石・凹石(III)、石皿(IV)、その他(V)が出土した。

#### I類 打製石斧

図示したのは23点である。形態の上から1-頭部と刃部がほぼ平行で短冊形、2-頭部より刃部に最大幅を持つ、3-胴中位が括れる分銅形の3類に分けた。

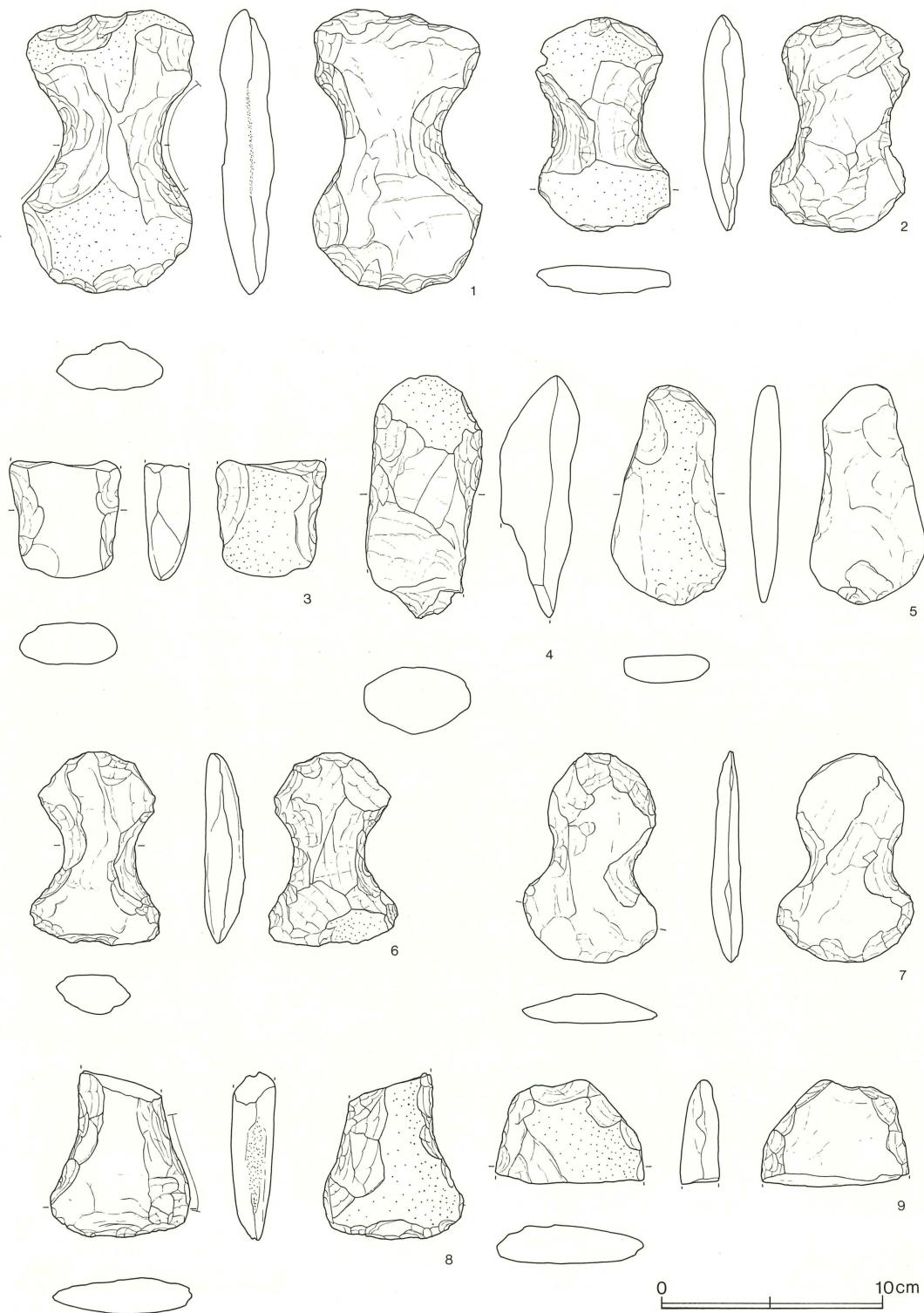
##### I-1類 (3・4・16・26)

26はやや刃部が開くが、この類に入れた。これは結晶片岩であり薄くつくられ、頭部が欠損している。刃部にあたる部分は摩耗して刃がない。刃部の付近だけ調整痕が入る。他の3点はいずれも片面に自然面を残すとともに、欠損している。4は3.3cmと厚く、側縁には敲打した跡がある。

##### I-2類 (5・8・13・14・17・19・21)

7点図示したが、14・19・21は片岩系で薄く剝離され、この類の中でも細分できる。特に21は剝離状況も不明瞭であり、石斧か不明確である。16は刃部が片方から剝離され、階段状になる。5・8・13・17は片面に自然面を残し、8と17は頭部を、13は刃部を欠損している。5は数少ない剝離によって形造り、調整痕は少ない。8と17は形が似ており、調整痕も全体に多く、刃部の曲線が緩やかである。8は側部が摩滅している。

##### I-3類 (1・2・6・7・9・10・15・18・20・22・24)



第110図 グリッド出土石器(2)



第111図 グリッド出土器(3)

当遺跡ではこの形態の石斧が多いようである。

7・20・22を除いて他は、片面に自然面を残す。特に1・2は括れ部を挟んで両側に見られ、自然面を有効に利用している。大形品は1・5・18であるが、特に1は長さ12.5cm、重さ273.7gを計り、石斧の内で最大である。使用のための破損であろうか、刃部の一端が扁平となるのは1・2・6・10・11である。1は表裏からの大きな打撃痕により括れ部をつくり、そこに細かい調整痕を加えている。使用のためか括れ部に摩滅痕がみられる。刃部は表裏両面からの、丁寧な調整痕が加えられている。2は括れ部が1と同様なつくりであるが、刃部の調整痕が自然面側からだけなされている。6は石塊からの剥ぎ取り方に影響されて、やや彎曲する。調整は1に類似する。10は剥ぎ取った後、簡単な剝離を行なう。側部が非常に摩滅している。11は両端部とも欠損する。括れ部は中央の狭い範囲であるが、摩滅が著しい。22は半欠したのち、表裏および破損面を磨いている。

## II類 (23・25・27・28)

23・25は定角形の丁寧に磨かれた石斧であるが、基部を欠損している。23は僅かに剝離面が認められる。25は刃こぼれがみられ、磨き直しのためか刃が偏る。28は細形磨製石斧の基部と考えられ、破損部は鋭角に折れる。これも丁寧な磨きにより、面をつくる。27は細い石を利用して、側部に少し磨きを入れた石斧である。両端部は剝離が施される。

## III類 敲石・すり石・凹石

図示したのは13点であるが敲石を1、すり石を2、凹石を3とした。3の中でも橢円形の定形化した凹石をa類、石皿などを転用した凹石をb類とした。

### III-1類 (12・30)

2点であるが12は欠損した後も使用しており、破損面も摩耗している。特に表裏面は磨いたように滑らかである。端部は敲打痕が残る。30はやや凹んだ側部が、敲打によって摩滅している。

### III-2類 (29)

はたしてすり石と呼んでよいのか疑問であるが、端面が使用された可能性がある。

### III-3 a類 (32・33・34・35)

4点のうち34は半欠である。また35は一端が破損するが、継続する利用により破損面が摩滅している。4点ともいずれも表裏中央に敲打による1つの凹穴がある。35は2つ見られ、凹穴形成後、摩耗により滑らかとなる。側面はいずれも幅広い磨面を有する。

### III-3 b類 (31・37・38・39・41・42)

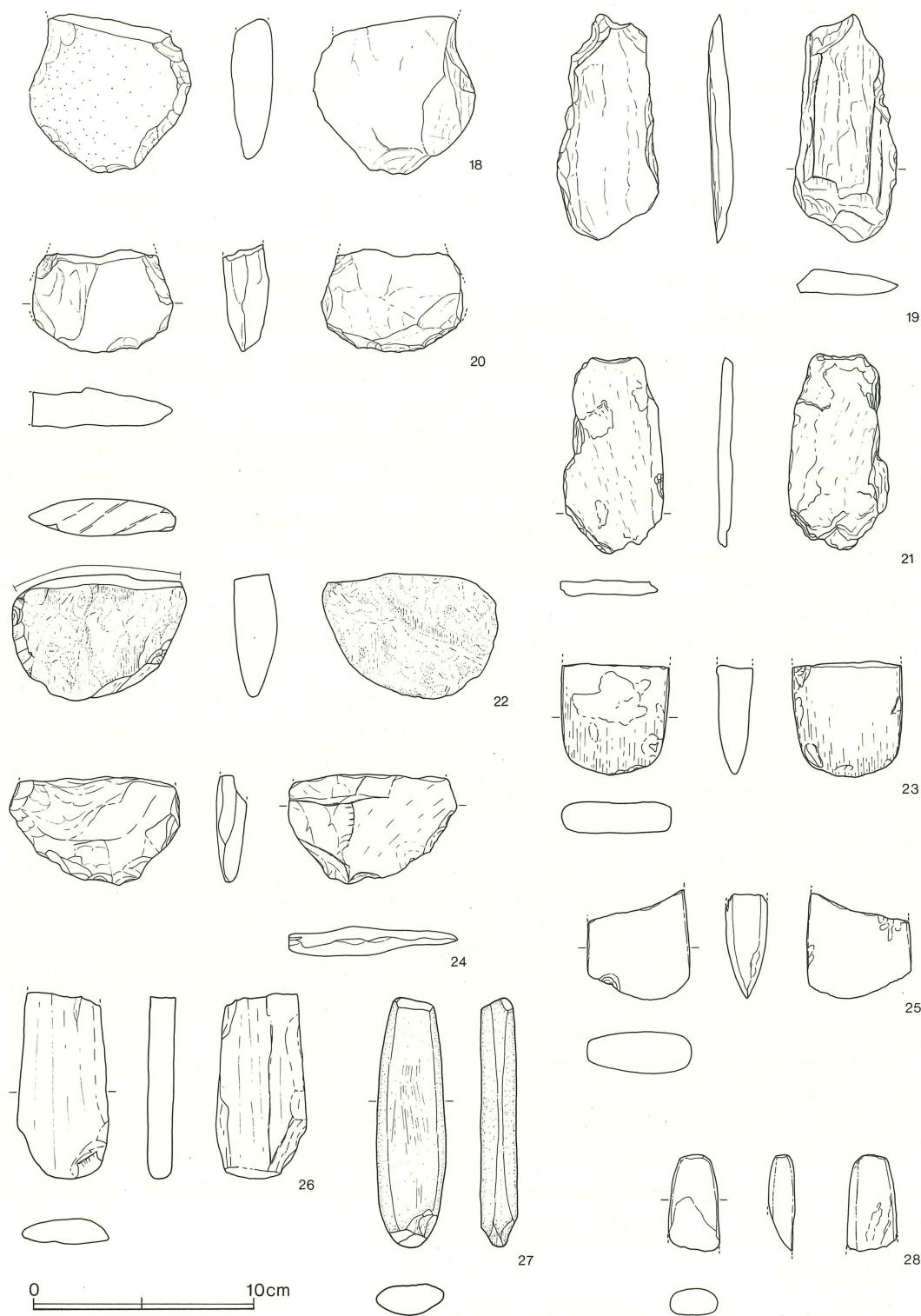
31・37を除いたいはずもが石皿の転用である。31は石皿の側縁部の可能性もあるが、断定できない。また31は1ヶ所小さく深い凹穴があるほか、刻線状の傷も何ヶ所かにある。37は加工痕のない結晶片岩の一面に1ヶ所、凹穴がある。39は石皿中央付近の破片で、表には3ヶ所、裏には9ヶ所の凹穴が開けられる。41・42は石皿の側縁部を利用している。

## IV類 (40・43)

2点であるが、いずれも石皿側縁部の小破片である。

## V類 (36)

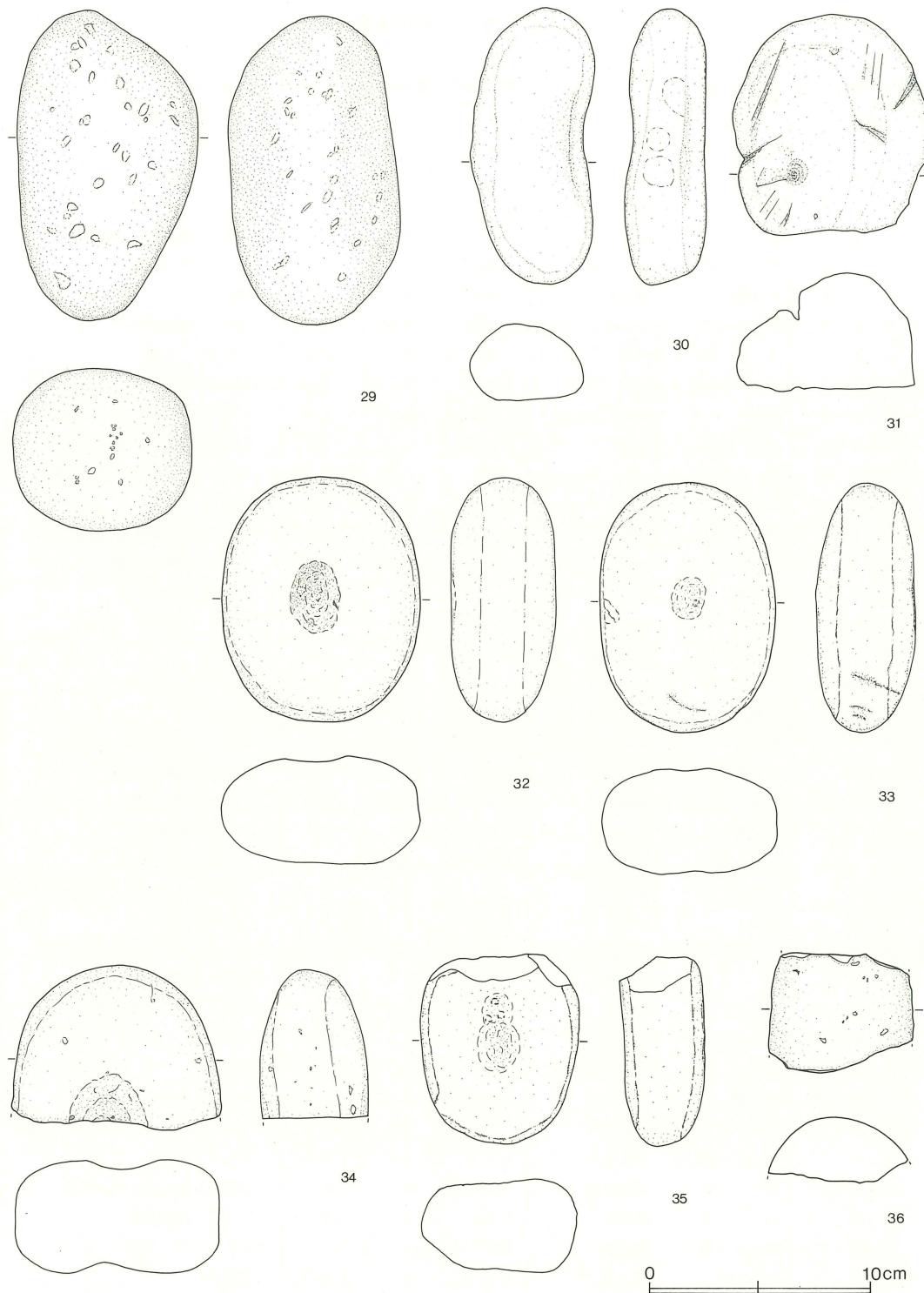
やや太い石棒の破片と思われるが、曲面は丁寧に磨ってある。



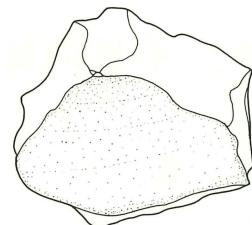
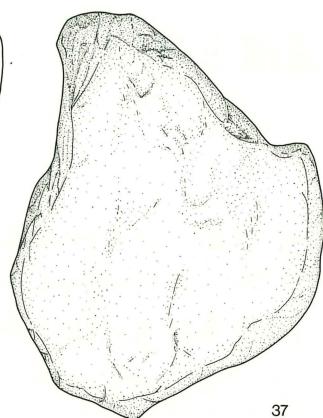
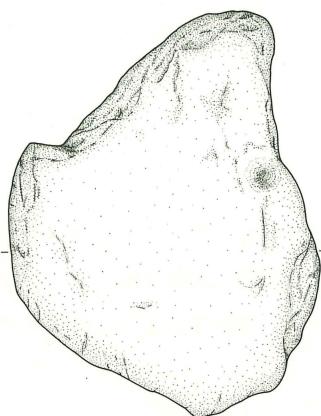
第112図 グリッド出土石器(4)

グリッド出土石器鑑察表

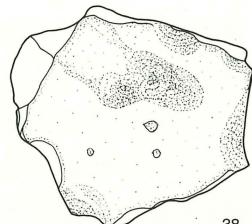
図番号	類別	出土地点	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
(2)-1	I-3	12-C-22	ホルンフェルス	12.5	7.5	2.3	273.7	側部摩耗
" 2	I-3	15-B-9	粘板岩	9.8	6.0	1.8	129.4	
" 3	I-1	8号溝	ホルンフェルス	( 5.2)	5.0	2.0	80.8	頭部欠損
" 4	I-1	63-B	砂岩	(10.8)	4.4	3.3	220.3	刃部欠損
" 5	I-2	2区-1	ホルンフェルス	10.0	5.0	1.4	86.4	側部に一部摩耗
" 6	I-3	18-C-21	ホルンフェルス	8.7	5.9	1.8	12.1	彎曲を持つ
" 7	I-3	8号溝	ホルンフェルス	9.5	5.9	1.3	88.4	
" 8	I-2	59-B-3	ホルンフェルス	( 7.5)	6.4	2.0	111.7	頭部折れ
" 9	I-3	29-B-11-1	砂岩	( 4.8)	6.6	1.8	97.0	$\frac{1}{2}$ 欠損
(3)-10	I-3	10-B-19-1	砂岩	( 9.5)	7.2	2.1	168.9	側部摩耗、頭部一部欠
" 11	I-3	表採	ホルンフェルス	( 9.3)	( 6.0)	2.0	178.0	側部摩耗、刃部頭部欠
" 12	III-1	表採	砂岩	( 9.8)	7.4	3.3	299.8	敲打部と磨面がある
" 13	I-2	26-C-13-1	ホルンフェルス	8.0	5.8	2.0	92.7	刃部欠損、側部摩耗
" 14	I-2	8号溝	ホルンフェルス	7.2	6.2	1.5	97.0	
" 15	I-3	12-C-10-3	砂岩	( 6.0)	8.5	2.1	138.5	$\frac{1}{2}$ 欠損、側部摩耗
" 16	I-1	18-C	ホルンフェルス	( 6.8)	5.7	1.8	109.2	刃部 $\frac{1}{2}$ 欠損
" 17	I-2	15号溝	ホルンフェルス	( 7.6)	6.3	1.7	92.4	頭部欠損
(4)-18	I-3	20-B-21	ホルンフェルス	( 7.2)	7.4	1.9	127.9	$\frac{1}{2}$ 欠損
" 19	I-2	6号住居跡	緑泥片岩	10.4	4.4	1.0	70.8	
" 20	I-3	18-C-13	ホルンフェルス	( 5.2)	6.4	2.0	76.9	$\frac{2}{3}$ 欠損
" 21	I-2	1号土坑	石墨片岩	8.7	4.6	0.7	40.8	
" 22	I-3	8号溝	ホルンフェルス	( 5.7)	8.0	2.0	143.5	折れたのち全面磨く
" 23	II	8号溝	蛇紋岩	( 5.1)	5.0	1.6	76.8	頭部 $\frac{1}{2}$ 欠損
" 24	I-3	表採	安山岩	( 5.0)	7.8	1.4	52.5	頭部欠損
" 25	II	8号溝	砂岩	( 5.0)	4.7	1.9	61.4	頭部欠損
" 26	I-1	1号小豎穴	結晶片岩	( 8.5)	4.2	1.2	67.9	頭部欠損
" 27	II	1号溝	緑色片岩	11.4	3.2	1.7	105.2	刃部を加工、胴部磨きあり
" 28	II	表採	砂岩	( 4.2)	2.3	1.2	19.8	刃部欠損
(5)-29	III-2	10-B-16-1	安山岩	14.1	8.2	7.3	1,009.3	
" 30	III-1	8-C-5-1	安山岩	12.5	5.3	3.7	384.4	側部に敲打面あり
" 31	III-3 b	14-C	安山岩	9.8	8.9	5.2	475.2	細い刻線が走る
" 32	III-3 a	30-C	安山岩	11.2	9.0	4.9	830.8	
" 33	III-3 a	表採	安山岩	11.4	8.0	4.5	690.0	
" 34	III-3 a	8号溝	安山岩	( 7.4)	9.5	5.1	446.2	$\frac{1}{2}$ 欠損
" 35	III-3 a	15-C-4	閃綠岩	8.6	7.2	4.2	405.3	端部が一部欠損するが再び摩耗
" 36	V	10-C-20-1	安山岩	( 5.4)	( 6.5)	( 2.9)	111.8	石棒か
" 37	III-3 b	15-C-4	結晶片岩	15.8	12.2	2.7	494.3	他に加工痕はなし
" 38	III-3 b	17-A-20	安山岩	( 8.7)	( 8.0)	4.7	404.2	石皿利用
" 39	III-3 b	18-B-25	安山岩	(15.1)	(11.6)	-	1,122.1	石皿利用
" 40	IV	3号土坑	安山岩	( 7.0)	( 5.8)	( 4.4)	228.0	
" 41	III-3 b	10-C-15-1	安山岩	( 8.8)	( 7.5)	3.8	246.4	石皿利用
" 42	III-3 b	1号地下式坑	安山岩	( 9.5)	( 5.7)	5.3	272.9	石皿利用
" 43	IV	表採	安山岩	( 6.6)	( 6.1)	4.4	184.2	



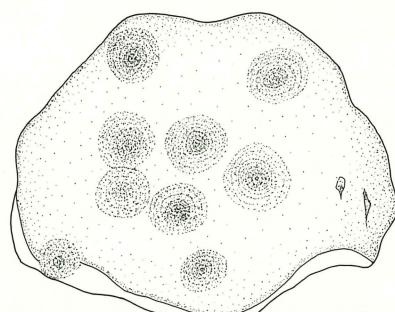
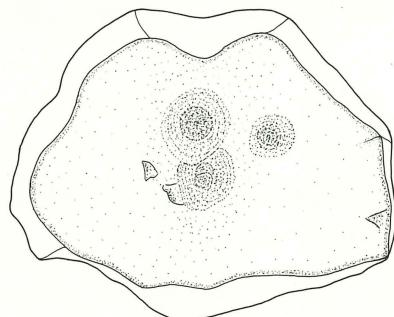
第113図 グリッド出土石器(5)



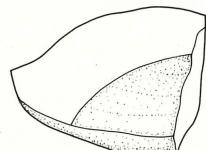
37



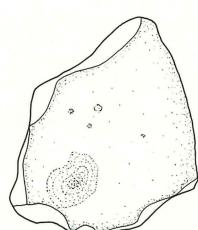
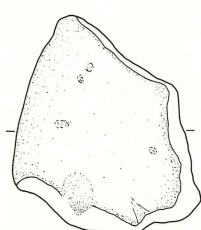
38



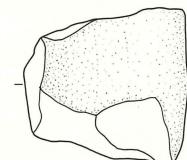
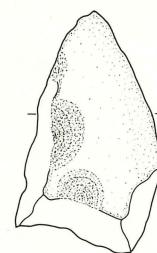
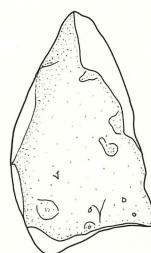
39



40



41



42

0 10cm



43

第114図 グリッド出土石器(6)

## IV. 中世以降の遺構と遺物

### 1. 溝

溝の多くは北西から南東、あるいは直行するように南西から北東に走る溝が多く、現在の道路の方向に関連する溝もあれば、8～10号、14・15号溝のように、明治の地籍図の道路に関連する溝もあった。この他、2～5号溝のように方向が違い時期不詳の溝、1・20・21号溝のように中世と考えられる溝が検出された。

#### 遺構（第113図～119図）

##### 第1号溝（第113図）

9-A区から10-D区にかけて検出され、南東部において屈曲している。長さは現長23.4m、幅1.48～2.2mを測る。深さは0.58～0.8mを測り、断面箱築研に近い。概して中央と東端部が深いが、土層を見るに、水の流れた痕跡は確認できなかった。溝底から南壁にかけて一部焼土が検出されたが、性格不明である。遺物は常滑系の甕と渥美産の高台付鉢（第118図）である。出土層位は覆土上層であるが、中世の溝の可能性は大きい。

##### 第2号溝（第113図）

11-A区から10-D区にかけて検出され、N-77°-Wに走る。現長は22.6m、幅は2.4～3.4mを測る。深さは0.3～0.5mで、断面浅い皿形を呈する。溝底は東端部が浅い。覆土中層付近が踏み固められたように堅い。出土遺物はほとんどなく、時期不詳である。

##### 第3号溝（第113図）

11-A区から11-C区にかけて検出され、やや蛇行するが2号溝に並行している。東端部が第4号溝と切り合うが、前後関係は不明である。現長は13m、幅は0.48～1.2mを測る。深さは0.4mで、断面U字形を呈する。出土遺物はなく、時期不詳である。

##### 第4号溝（第113図）

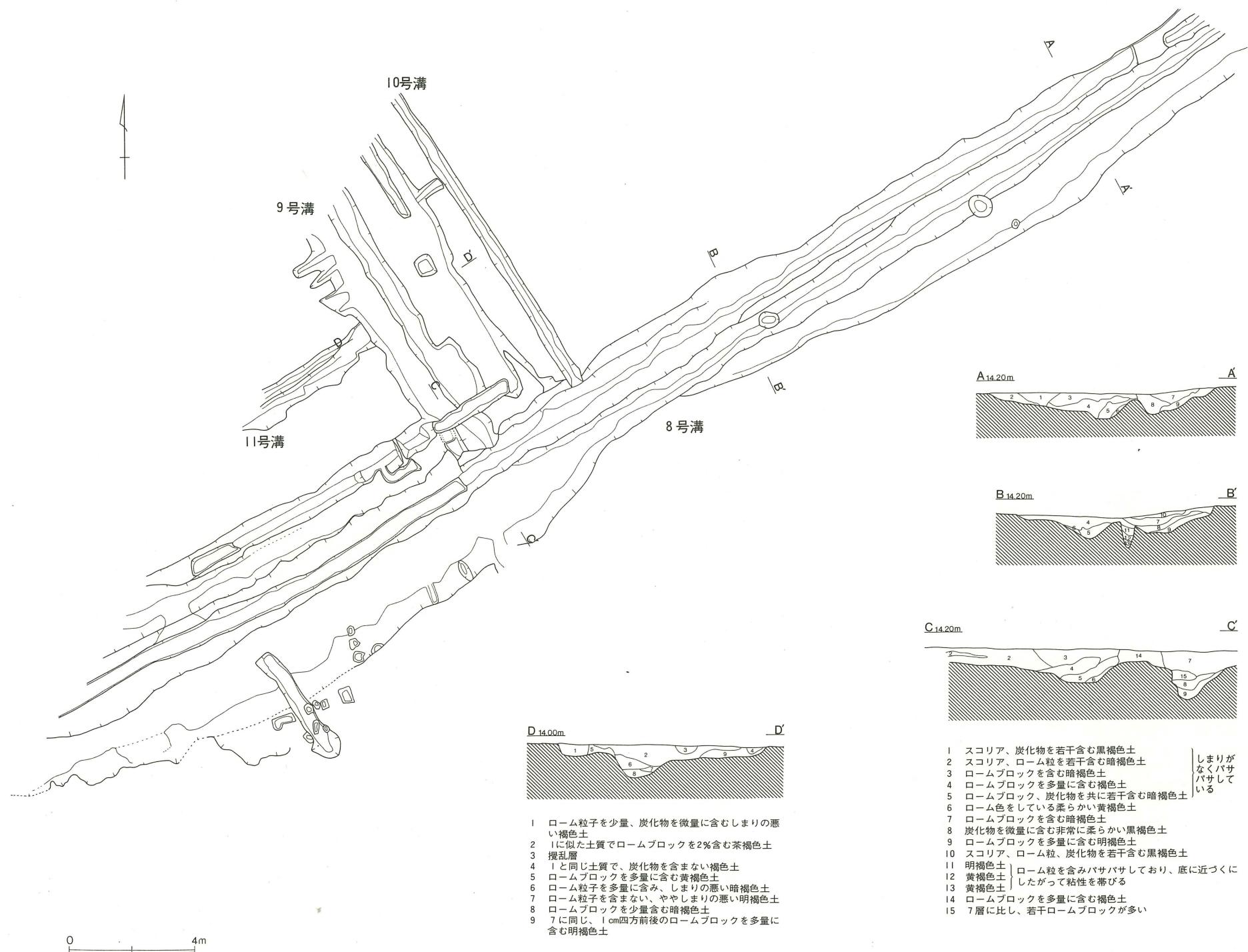
11-C区から10-D区へ西から東方向に走る溝と、そこから直行して南へT字形に走る溝から成っている。東西方向の現長は12.8m、幅は0.9～1.5m、深さは0.4mを測る。断面はU字形を呈する。覆土は暗褐色土で、遺物はなく、時期については不詳である。

##### 第5号溝（第113図）

12-B区に検出されたが、3号溝と関連するのか直行するように、南北に走る。現長は7.68m、幅は0.84～1.84mを、深さは0.37mを測る。断面形態はU字形で、やや蛇行するなど3号溝と共通している。また覆土も暗褐色土で類似している。出土遺物はなく時期不詳である。

##### 第6号溝（第114図）

27-B区から28-D区にかけて検出され、N-26°-Wの方向に走る。北西端部を8号溝に切断されており、現長15.26mを測る。幅は中央部が太く、0.64～1.08mを、深さは0.3mを測る。断面形態はU字形から一部V字形となる。溝は南東部で蛇行するが、ほぼ7号溝に並行しており関連が考え



第115図 溝跡(1)  
断面はA-A'が $1:160$ , 他は $1:80$

られる。覆土は黒色から暗褐色土を呈する。遺物が出土していないため、時期不詳である。

#### 第7号溝（第116図）

28-B区から29-D区にかけて検出され、6号溝とほぼ並行している。溝は2本重複が確認でき、北側の溝は現長12.55m、幅は0.55~1.18mを測る。深さは0.07~0.22mと浅く、断面皿形を呈する。南側の溝は北側の溝の中程から重なり、現長8.55mを測る。幅は0.36~0.7mと狭く、深さは0.35mで、断面は逆台形を呈する。覆土は両溝とも黒褐色であるが、土層から南溝が北溝を切っているようである。遺物は砥石・瓦・ほうろく・陶磁器などが出土しており、時期は幕末以降と考えられる。

#### 第8号溝（第117図）

28-A区から25-D区にかけて検出され、N-61°-Eに走る太い溝である。合計5本の溝により構成されるが、北東半では3本、南西半では2本が重複している。現長は45.7mを測り、幅は北東半では3.4mを、南西半では5.38mを測る。深さは北東で0.3~0.4mであるが、南西側では深くなり0.5~0.8mを測る。溝の断面形態は浅い皿状あるいはU字状である。覆土はロームブロックを含む褐色土系が多く、東側から流れ込んだようでもある。各重複する溝の前後関係は決め難いが、土層を見るに東側の溝の方がより新しいようである。

遺物は多量の陶磁器類が出土したが幕末以降、明治の製品が多い。

#### 第9号溝（第117図）

27-A区から27-B区に検出され、一端は8号溝に接している。8号溝と直行していることから、時期的にも関連した溝と考えられる。長さは現長10.38m、幅は3.5mを測る。断面形は0.18mと浅い皿状の溝で、中央がさらに一段U字形に0.3m低くなる溝である。

遺物は少量の陶磁器が出土しており、幕末以降と考えられる。

#### 第10号溝（第117図）

26-A区から27-B区へ走り、N-32°-Wを指す細い溝である。一端は8号溝に接しており、また9号溝に平行していることから、時期が同じであろう。現長10.8m、幅0.44m、深さ0.4mを測る。断面は矩形を呈する。出土遺物は僅かに瓦などが出土している。

#### 第11号溝（第117図）

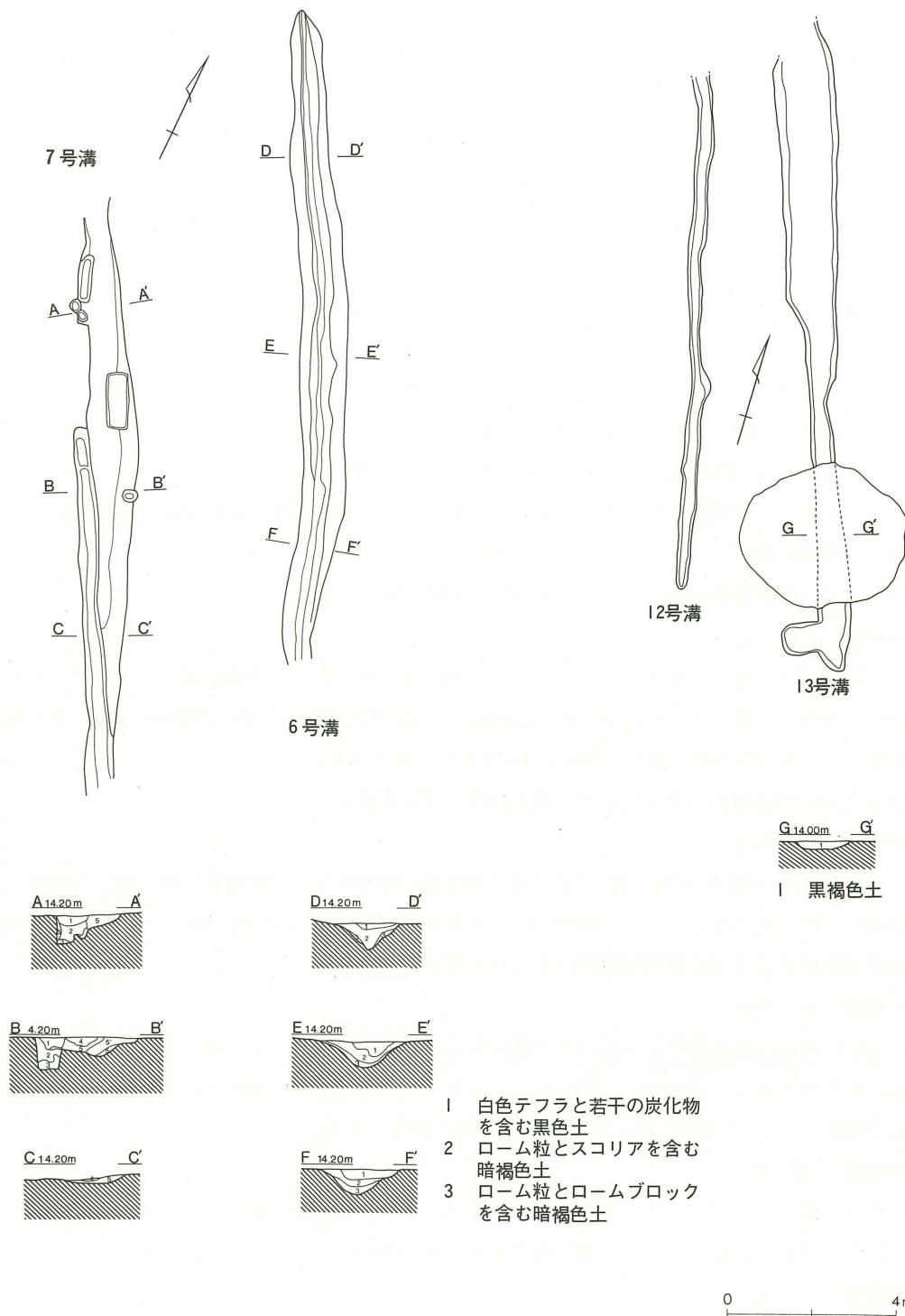
27-B区に検出された溝で、一端は9号溝に直行して接しており、8号溝とも平行することから、同時期の所産であろう。現長5m、幅0.92mを測るが、2本の溝から構成されている。北溝の幅は0.4m、南溝は0.52mを測る。出土遺物は少量の陶磁器片である。

#### 第12号溝（第116図）

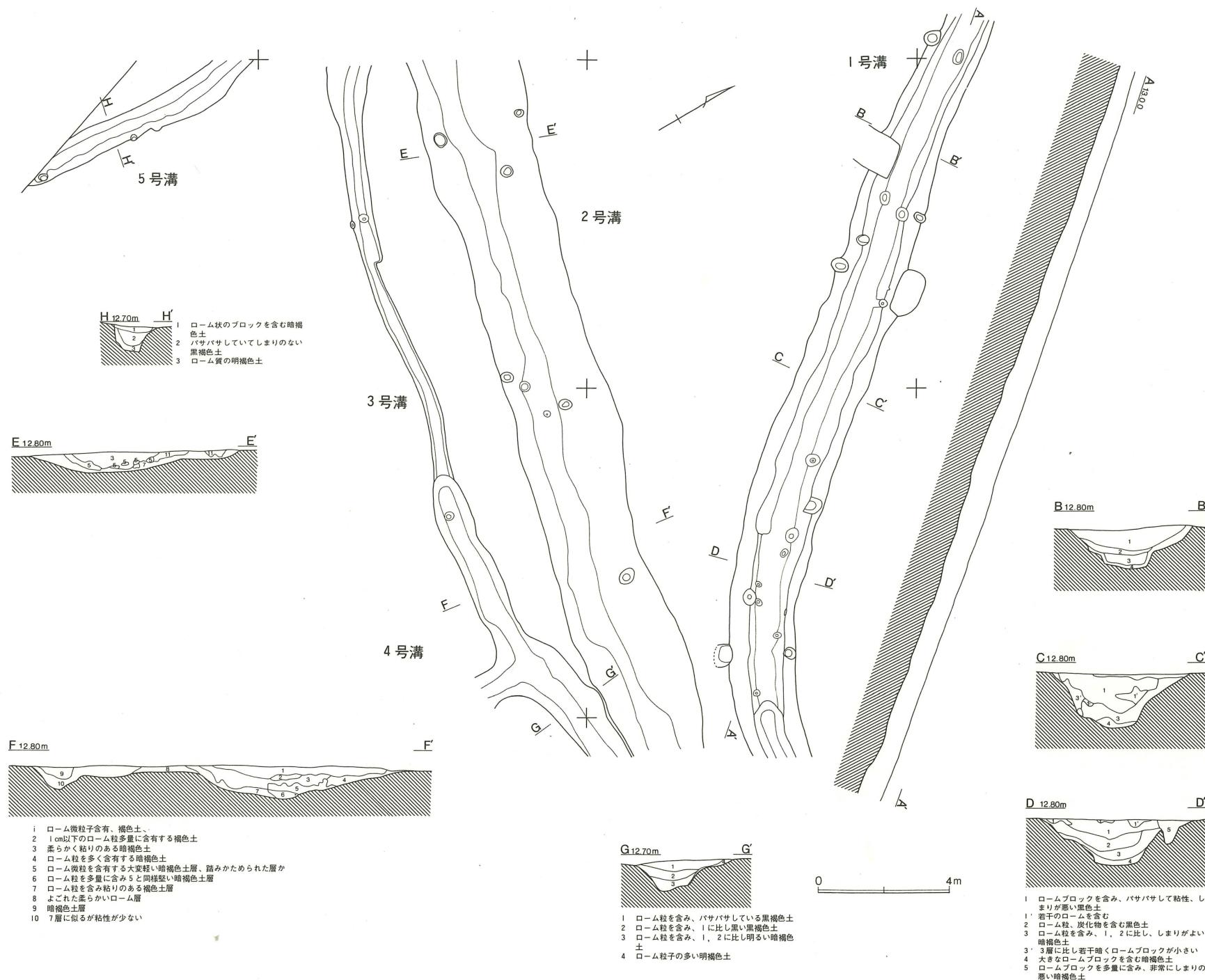
25-A区から26-B区にかけて検出された、N-5°-Wに走る細い溝である。現長は12m、幅は0.24~0.42mを測る。断面U字形の浅い溝であり、出土遺物もなく、時期不詳である。

#### 第13号溝（第116図）

25-A区から25-C区へ延びる、やや細い溝であるが、12号溝とほぼ平行する。規模は現長15.2m、幅は北側が太く1.42m、南が0.54mを測る。溝は南側で1号小竪穴の中央を切っており、そこでは深さ0.08mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、覆土は黒褐色土1層だけである。覆土からみる



第116図 溝跡(2) 断面は $\frac{1}{80}$



第117図 溝跡(3)  
断面は $1/50$

に時期的には古いと考えるが、遺物はなく時期不詳である。

#### 第14号溝（第118図）

25-C区から23-C区に走り、N-54°-Eを指す細い溝である。現長16.4mを、幅はやや南西部が太く0.56m、北東部が0.28mを測る。北東端では15号溝と切り合い、ほぼ直行することから同時期の所産と考えられる。断面はU字形を呈し、溝底は凸凹して一定しない。出土遺物はないが、15号溝と直行すること、10号溝のあり方に似ていることから、幕末以降と考えられる。

#### 第15号溝（第118図）

23-A区から23-D区に検出された、幅の広い溝である。N-33°-Wを指す、西溝と東溝の2本から構成されている。現長24.74mを測るが、両端とも発掘区外である。西溝は幅3.4mで中央にはさらに幅0.88m、深さ約0.5mの断面U字形の溝がある。東溝は幅1.68mで、中央には幅0.3m、深さ0.15~0.3mの断面VからU字形の溝がある。出土遺物は、陶磁器が多量に出土したが、時期は明治以降であろう。明治の地籍図にはこのあたりが志久と小室の地境となる。

#### 第16号溝（第118図）

22-B区から23-C区に検出されたが、15号溝に平行することから同時期と考えられる。現長15.68m、幅1.28mを測る、深さ0.44mで断面擂鉢形の溝である。北西端の溝底に方形のプランが確認できたが、これは15年前コレラが流行った時、ブタを埋めた穴だという。

#### 第17号溝（第119図）

20-A区から21-D区へ走る、N-26°30'-Wの3本から4本重複した太い溝である。現長27.5mで、幅は5.5m前後であるが、重複する小さい溝は幅0.5~1.3mを測る。深さは最深部で0.75mを測る。溝には多量の遺物が混入しており、近代の陶磁器・瓦の他、馬であろうか歯が出土した。また北端部からは多量の蠅が出土した。時期は建物跡が明治12~13年なので、それ以前である。

#### 第18号溝（第119図）

20-B区から18-C区へ走る、N-31°-Wの細い溝である。19号溝と平行しており、4号住居跡と切り合っている。現長22.2m、幅0.28~0.41mを測る断面U字形の溝である。覆土は黒褐色土であり、遺物はないため時期不詳である。あるいは17号溝と直行に近いことから、性格的には10・14号溝に類するかもしれない。

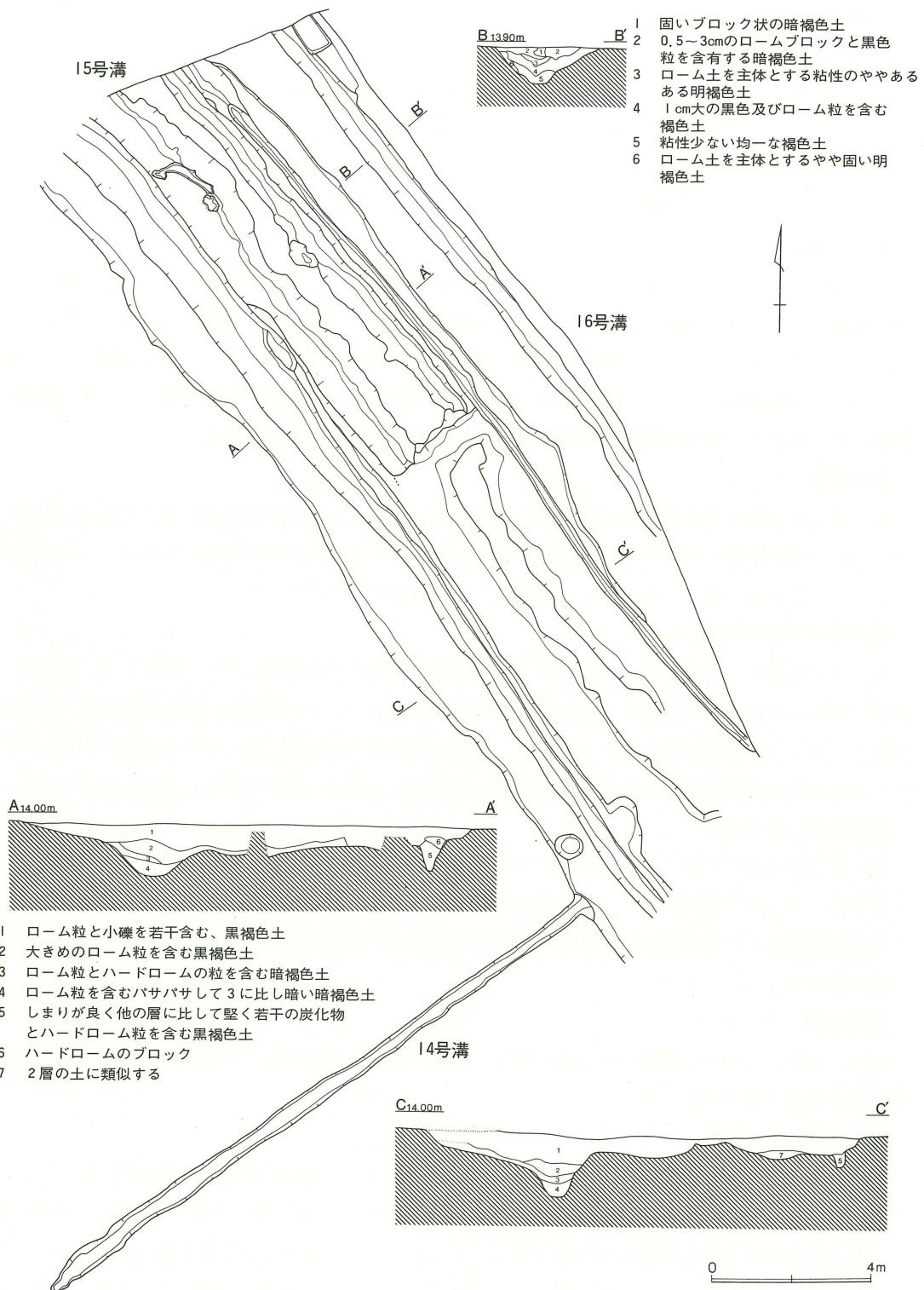
#### 第19号溝（第119図）

18号と平行し、長さも現長23m、幅0.28~0.74m、断面U字形で覆土も類似することから、18号溝と同時期の所産と考えられる。

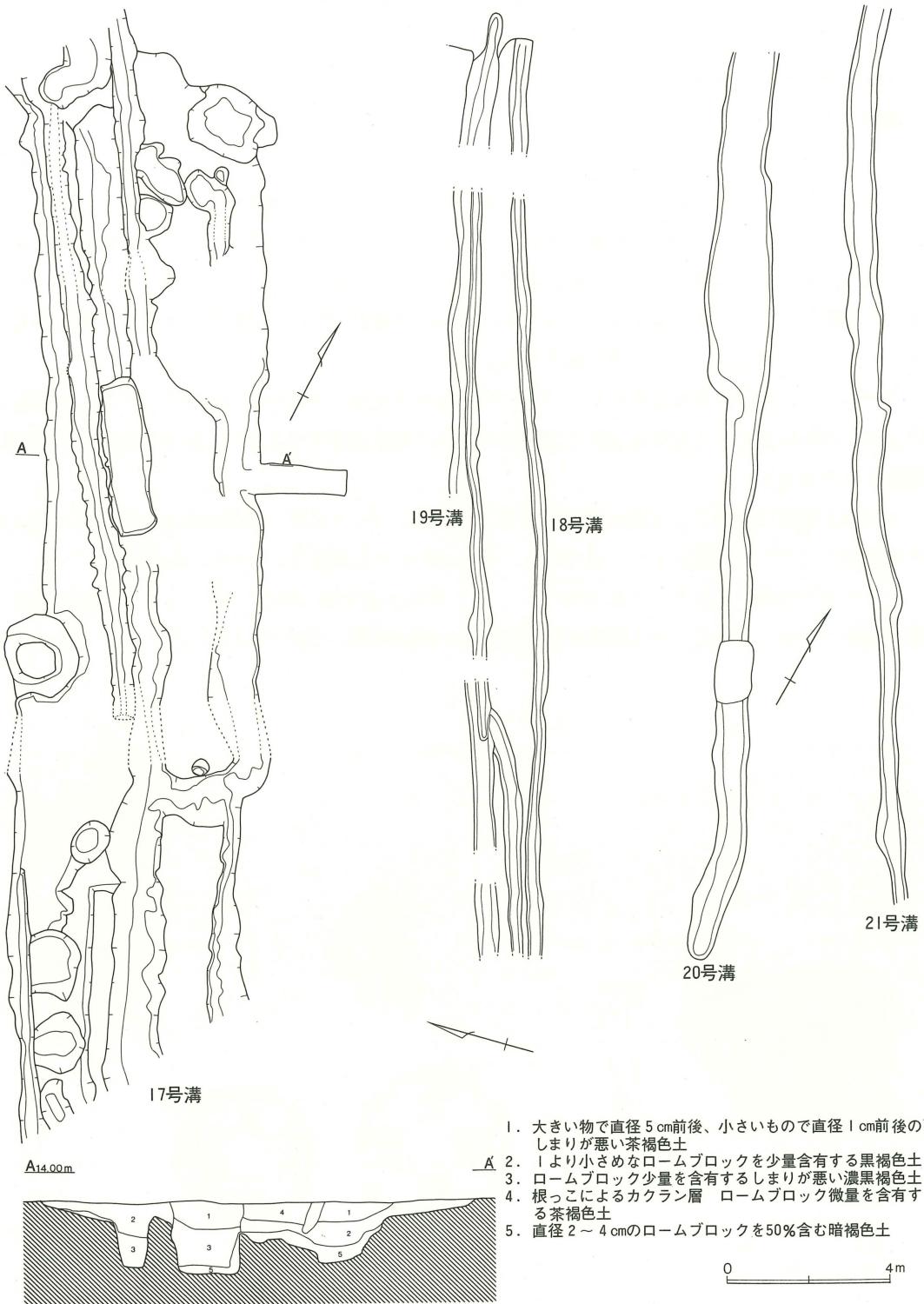
#### 第20号溝（第119図）

15-A区から16-C区にかけて検出された細い溝であるが、南端部が僅かに西に振れる。N-27°30'-Wを指し、現長22mを測る。幅は南で0.54m、北では1.70mと太くなる。深さは0.2mで、覆土は上層が黒色土を含む褐色土で下層は薄く、ロームブロックを30%含有する褐色土であった。溝の覆土下層からは至道元寶と天聖元寶が出土した。この点から20号溝は中世と考えられる。また16-B-2区の溝底からは溝に上部を切られた5号埋甕が検出された。

#### 第21号溝（第119図）



第118図 溝跡(4) 断面はX<sub>80</sub>



第119図(5) 断面は%

15-B区から16-D区へ走るが、僅かに蛇行する。現長は21.8m、幅は0.42~0.7m、深さは0.05mを測る。覆土はロームブロックを含む褐色土で、20号溝に類似しており、20号溝と平行することからも中世の所産と推考される。

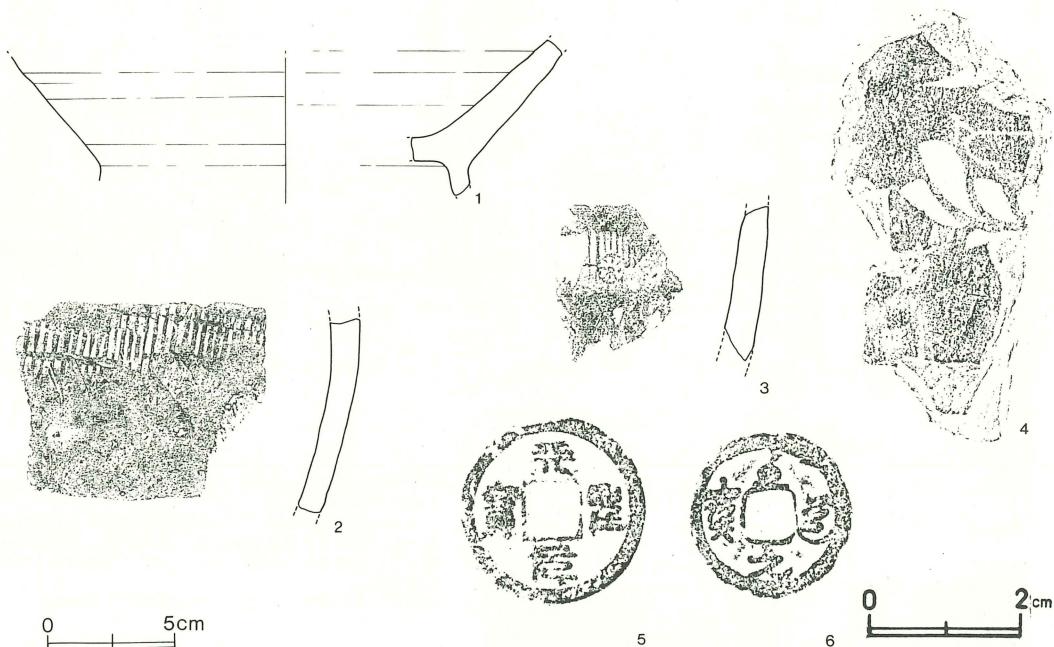
#### 遺物（第120図）

1・2は1号溝から出土している。1は渥美産の高台付片口鉢であるが、灰色で多量の砂粒を含む。高台は高いあまり開かない。体部は直線的に開く。これらの特徴から13世紀前半代の製品と考えられる。2も多くの砂粒が含まれる、青灰色の甕の胴部であり、甕には約3cm幅の粘土紐痕がみられる。胴部から肩部にかけて、縦長の長方形格子叩きが施される。長方形格子は常滑では平安末から室町にかけて、また渥美にも見られる。そのため時期については断定できない。胎土から在地産の可能性も捨て切れず、今後の類例を待ちたい。

3は10-C-22区から出土したが、長方形格子と菊花文組み合せの叩きである。これも灰褐色で胎土は1に類似する。この叩き文様も常滑にあるが、時期は限定できない。出土地点から1号溝に関連するであろう。

4は焼土遺構付近のP1（第123図）から出土したが、ピットの深さは38cmある。その掘り込み部から検出されたため関連するか不明である。板碑は剝れたため厚さ1.7cmで、表が焼けている。

5・6は20号溝から出土した北宋銭で、6が草書の至道元寶（初鑄923年）と5が篆書の天聖元寶（初鑄1023年）である。出土状況は溝底に13cmの間隔を置いて出土した。



第120図 溝・グリッド出土中世遺物

## 2. 墓壙

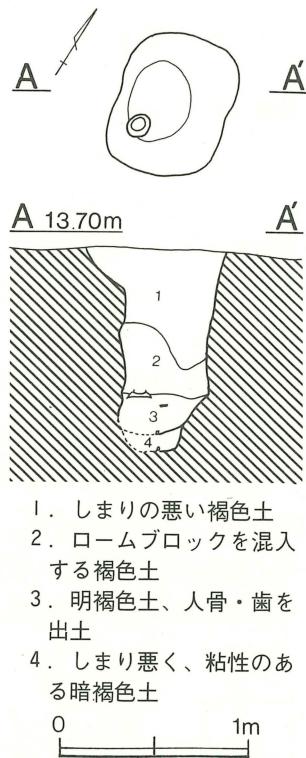
### 遺構（第121図）

遺跡南端部の62-B区から検出されたが、現在使われている道の脇である。ローム面から深さ1.06mを測るが、掘り込み面からはもう少し深いようである。径は約0.4mを測る細い墓壙であるが、最下層から歯と骨片、あるいは絵の描かれた板片が出土した。3層からは寛永通寶が重なって4枚、2層と3層の境からは灰釉の皿が伏せられて出土した。土壌の細さ、骨の出土状況から火葬墓の可能性が考えられる。年代は銭貨・陶器から17世紀後半代が予測できる。

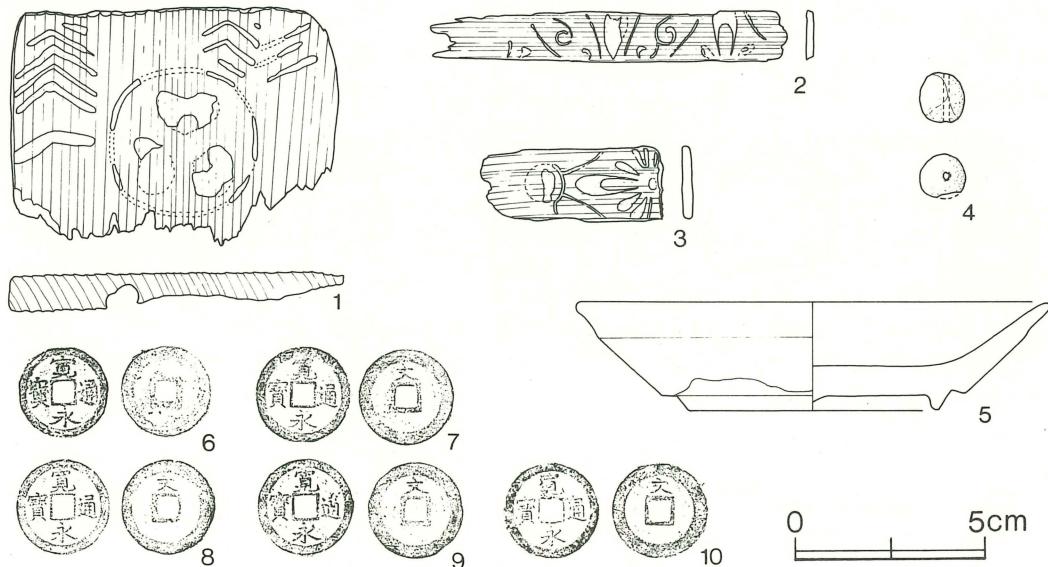
### 遺物（第122図）

1は幅8.7cm、長さは折れているため現長で6.3cm、厚さは1cmを測る。やや厚目の白い絵具で連続山形文と、中央に「丸に片喰」と考えられる家紋が描かれている。2・3は2mmと3mmの薄い板の表裏面に、1と違い薄い銀化した絵具で描かれている。花菱を中心にして描かれるが、同一文様であろう。4は径1.3×1.2cmの土玉であるが、やや偏って1mm強の不整な穴が開く。表裏面は2・3同様、銀化した絵具が塗られる。6～9は寛永通寶である。6は明暦2（1656）年鋳造の駿河沓谷錢で、他は寛文8（1668）年の江戸亀戸錢である。

5は灰釉が高台を除いて掛けられる皿である。17世紀後半代の瀬戸産であろう。



第121図 墓壙



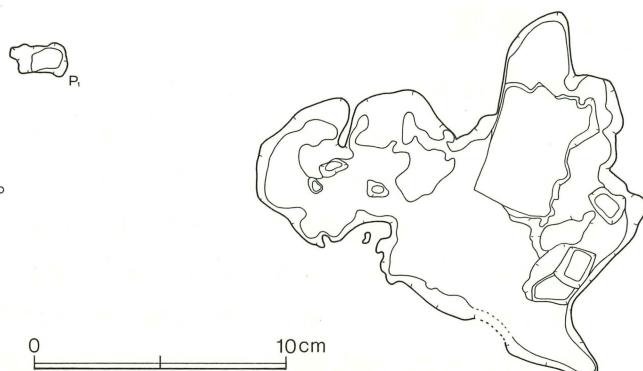
第122図 墓壙出土遺物

### 3. 焼土遺構

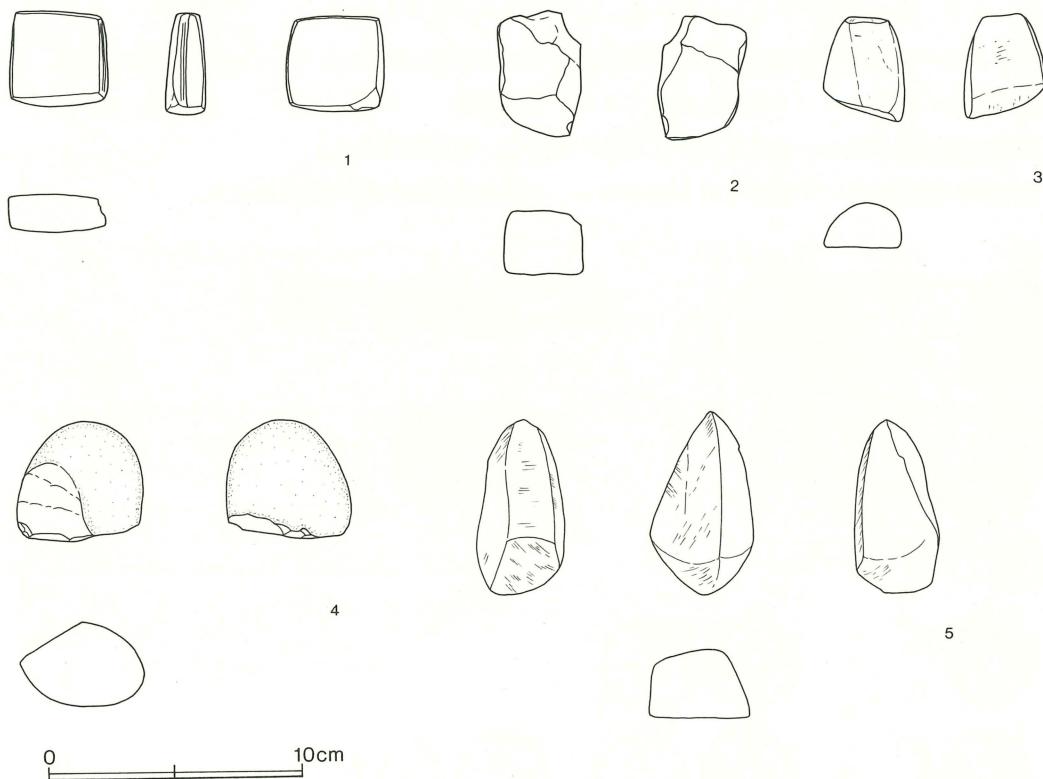
#### 遺構（第123図）

30-C区で検出された。長軸3.12m、短軸2.9mを測る。深さは0.1~0.27mと浅い。遺構は鉄分を含み褐鉄鉱のように堅い凹凸した面と、その面から掘り込まれた約0.9×0.6mの長方形の遺構から成り立っている。いずれも焼けているとともに、長方形遺構は壁が板を当てたように垂直につくられ、あたかも囲炉裏のような形状を呈していた。

出土遺物は多くの砥石と内耳土器、きせるなどがあった。当遺構の北東5mに、粘土を固めた土台や瓦を多量に出土した地域があり、かつて存在したという稻荷の位置と考えられる。焼土遺構も



第123図 焼土遺構



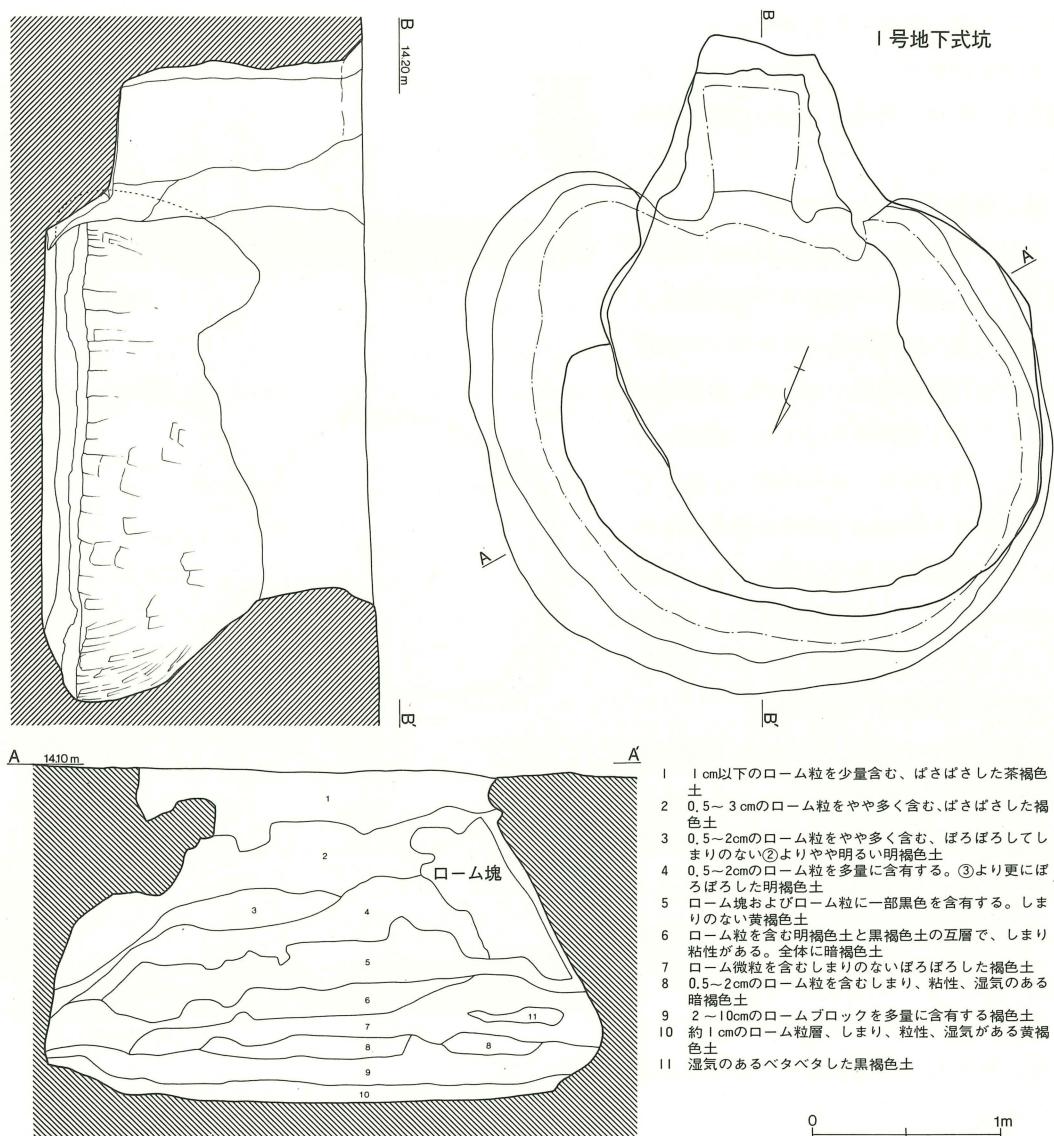
第124図 焼土遺構出土砥石

この稻荷となんらかの関連が予想できる。

### 遺物（第124図）

出土遺物は煙管・内耳の焙烙・磁器片の他、砥石が5点出土した。

砥石のみ図示したが1.は凝灰質砂岩で、一側面に製作時の切断痕があり、全面を使用している。41.5 gを計る。2は、軽石のようで、一面が彎曲するように擦ってある。重さは30.5 g。3は凝灰質砂岩で断面蒲鉾形を呈する。全面使用しており、重量は33.8 gを計る。4は硬質砂岩で、100 gを計るが砥石か不明。5は全面使用する砂岩質で不整形の砥石であり、99 gを計る。



第125図 地下式坑(1)

## 4. 地下式坑

### 遺構（第125図～128図）

地下式坑は遺物から近代の所産と考えられ、この地域では「穴倉」と呼ばれている。形態には2種類あり、A類は方形の立坑と、団扇状の収蔵部からなる、1・2・3・4・6・8号地下式坑と、B類は長方形、断面台形を呈する5・7・8号地下式坑がある。B類は地元の人が知らないため、A類より古い可能性がある。

#### 第1号地下式坑（第125図）

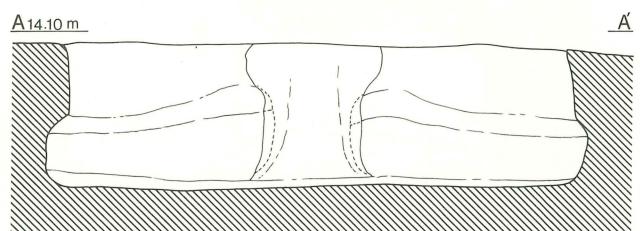
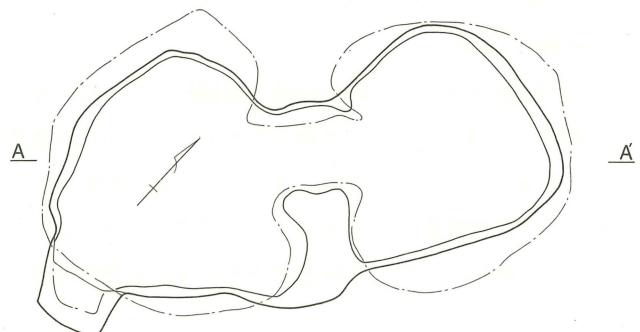
方形の入口部は下端で $0.54 \times 0.49\text{ m}$ を測り、入口部から一段落ちて横穴部へ入る。横穴部の横断面は天井がすでに崩落しているため不明確であるが、残存部から推測するに蒲鉾状を呈する。底面から周縁が一段上がり、さらに壁へと続くが、壁には幅8～13cmの工具痕が縦に見られた。横穴部は最大部で長径 $2.95\text{ m}$ 、短径 $2.47\text{ m}$ を測る。土層は崩落による多量のロームブロックを混入する。29-C区。

#### 第2号地下式坑（第126図）

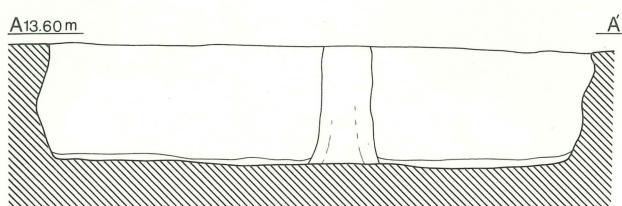
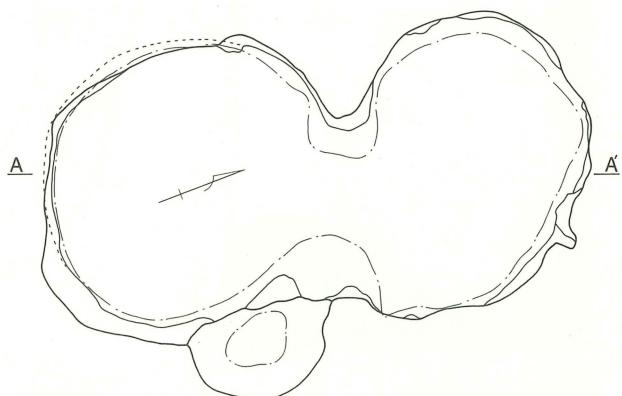
A類の地下式坑で、入口部から横穴部が東と西の2方向に分かれていた。入口部の幅は下端部で $0.49\text{ m}$ を測り、横穴部は東で $1.5\text{ m}$ 、西で $1.75\text{ m}$ の不整円形である。1号地下式坑に比べて約 $\frac{1}{2}$ の規模であり、深さも1号地下式坑が $1.74\text{ m}$ であるのに対して $1.1\text{ m}$ と浅い。おそらく上部が削られているためだと考えられる。23-B区。

#### 第3号地下式坑（第126図）

A類の地下式坑で、2号と同様2方向の横穴部を持つ。入口部の幅は下端部で



2号地下式坑



3号地下式坑



第126図 地下式坑(2)

0.65m、横穴部は北側が長径2.1m、短径1.62m、南側が長径2.35m、短径2mを測る。深さは0.95mと浅い。2号・3号とも入口部と横穴部の比高差はない。南側は28号土坑を、北側は29号土坑を切っていた。出土遺物は多量の陶器類、ガラスの瓶などが出土した。18・19-B区。

#### 第4号地下式坑（第127図）

入口部の幅は0.88mで方形である。入口部から横穴部へは段差なく続く。横穴部は最大幅3.45m、短径は1.8mを測る。平面葺形となる。横穴部の長径部には0.15mの段差が扇状にみられる。深さは1.5mであるが、壁の彎曲から天井の高さを推測するに1.15～1.2mを測るであろう。これも僅かであるが、壁に工具痕が残っていた。18-B区。

#### 第5号地下式坑（第127図）

B類の地下式坑であり、平面は長方形である。長軸は下端で4.36m、短軸は下端で1mである。長軸方向はN-8°-Wを指す。深さは1.08mを測り、横断面は台形である。天井は崩落しており形状は不明である。壁は部分的に新しい掘り込みにより破壊を受けている。18-C区。

#### 第6号地下式坑（第128図）

A類であるが、入口部の前に一段窪んだ落ち込みが確認された。またこの落ち込みに接するように7号地下式坑が検出されており、なんらかの関連が予測できる。入口部は幅0.85mと幅広く、横穴部は長径2.0m、短径1.45mと小形で2号と類似する。深さは1.55mを測り、天井部は推定で1.15mであろう。18-C区。

#### 第7号地下式坑（第128図）

B類であるが、長軸4.45m、短軸1.08mを測り、5号に類似する。長軸方向はN-58°-Eを指す。深さは0.98mを測り、横断面は台形である。入口側と思われる一端には、足掛け用であろうか、掘り残しがある。18-C・D区。

#### 第8号地下式坑（第128図）

A類であるが、入口部において9号と接する。平面形態は他と違って横穴部が扁円形となり、長径2.18m、短径1.87mを測る。深さは1.2mと浅い。天井部は復元で0.9～1mである。17-C区。

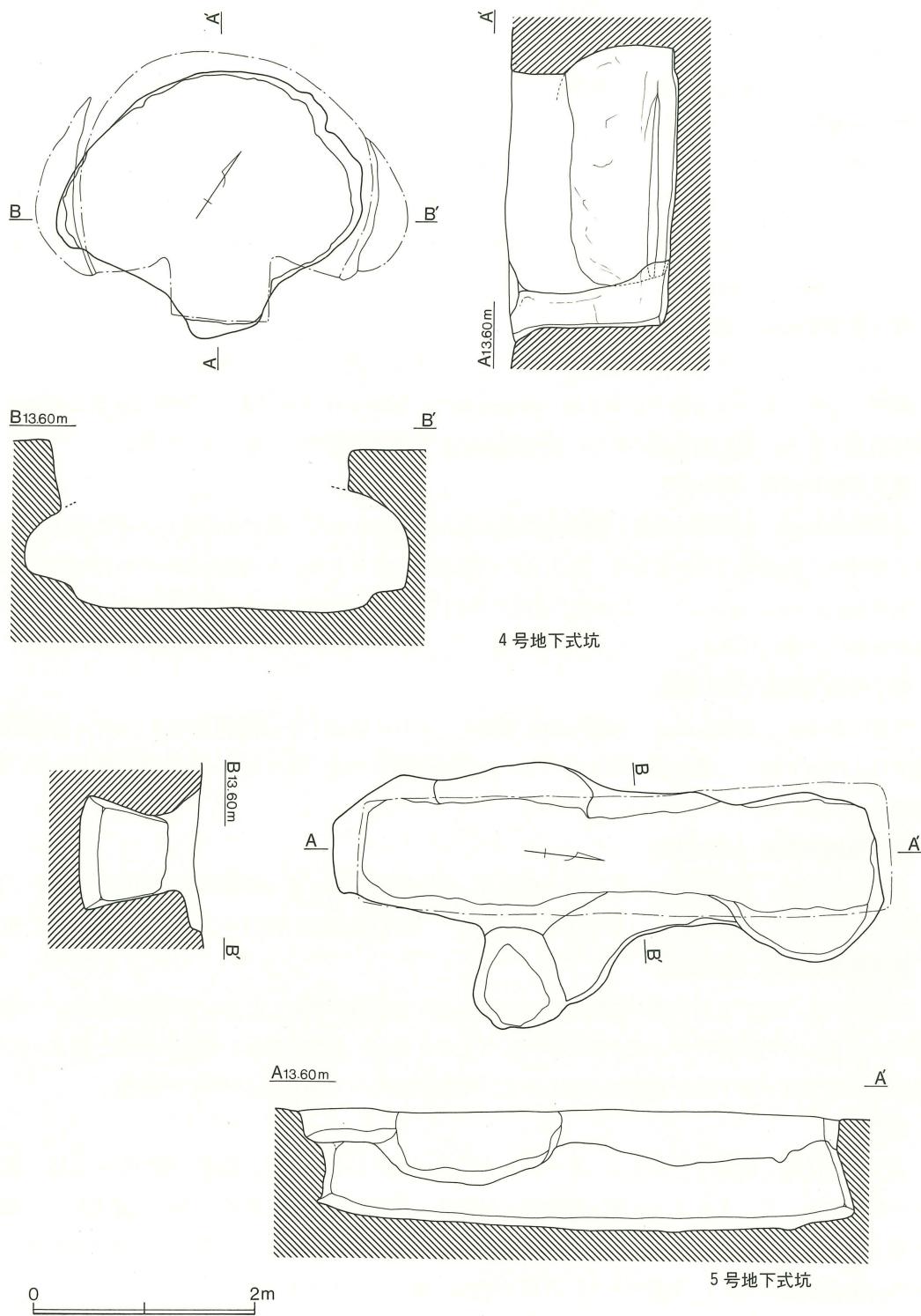
#### 第9号地下式坑（第128図）

B類の中に入れてよいか壁が彎曲していることからも疑問である。しかし平面形態から、一応B類に入れた。8号に直行するようなL字形につくられるが、長軸2.57m、短軸0.96m、深さ1.2mを測る。床の高さは8号と変わることから、時期差はないであろう。16・17-C区。

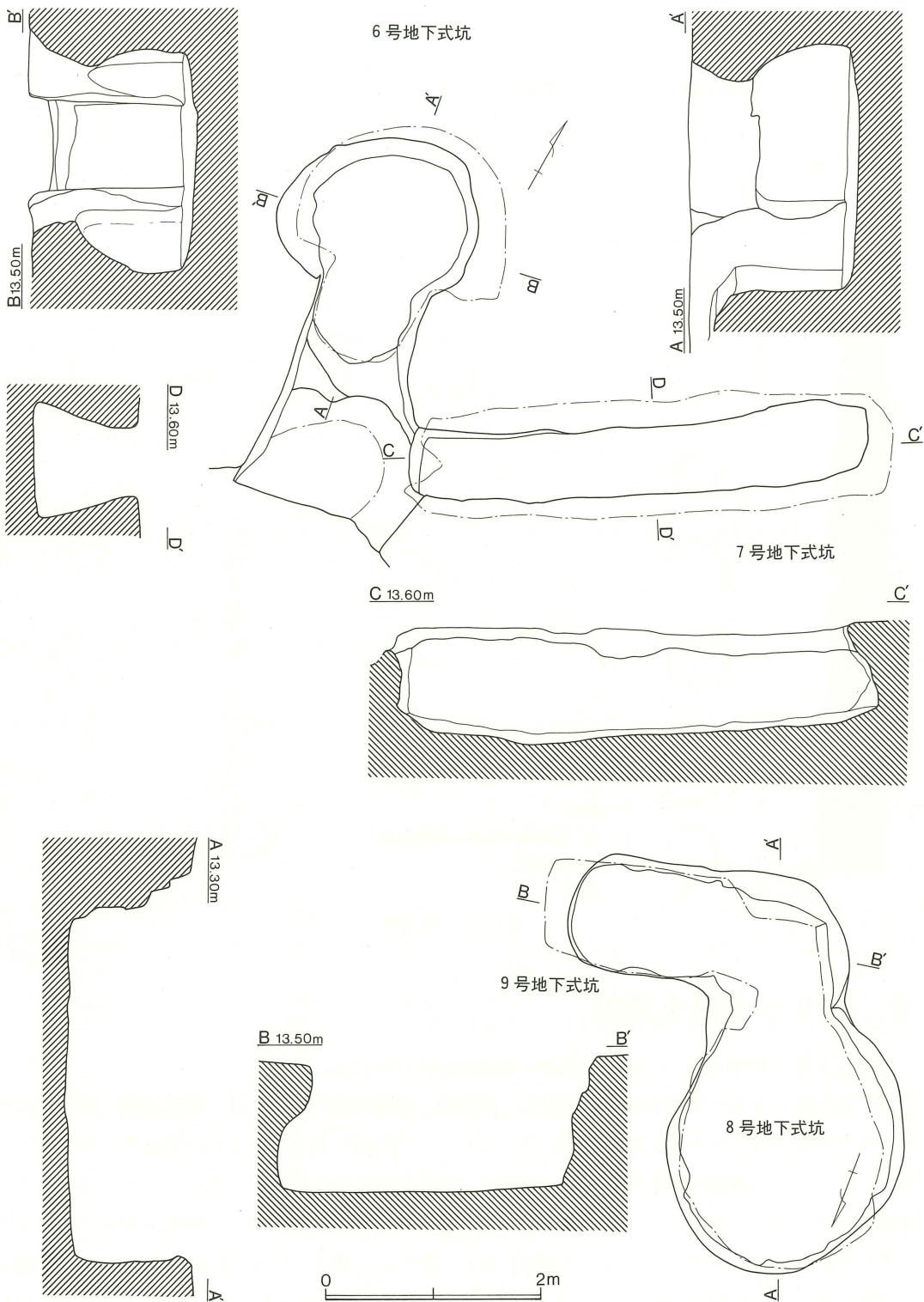
#### 遺物

多量の陶磁器・瓶類などが出土した。特に3号地下式坑からは有田・益子・瀬戸などの皿・茶碗・土瓶が出土した。またガラス瓶・乾電池・豆電球・水滴などもあったが、中に「蓮田町・正木屋本店」と染付した茶碗があり、昭和10年頃製作したということであった。近くの住民によれば、この坑は祖父が掘ったという話があり、昭和前半代の地下式坑と考えられる。

また2号地下式坑は川田氏宅に入る道の下に位置していたが、道を作ったのが昭和4年であるので、それ以前に掘られた地下式坑と考えられる。出土遺物も、大正から昭和前半代の製品が多く、この地域で当時地下式坑を穴倉として利用していたことが窺える。



第127図 地下式坑(3)

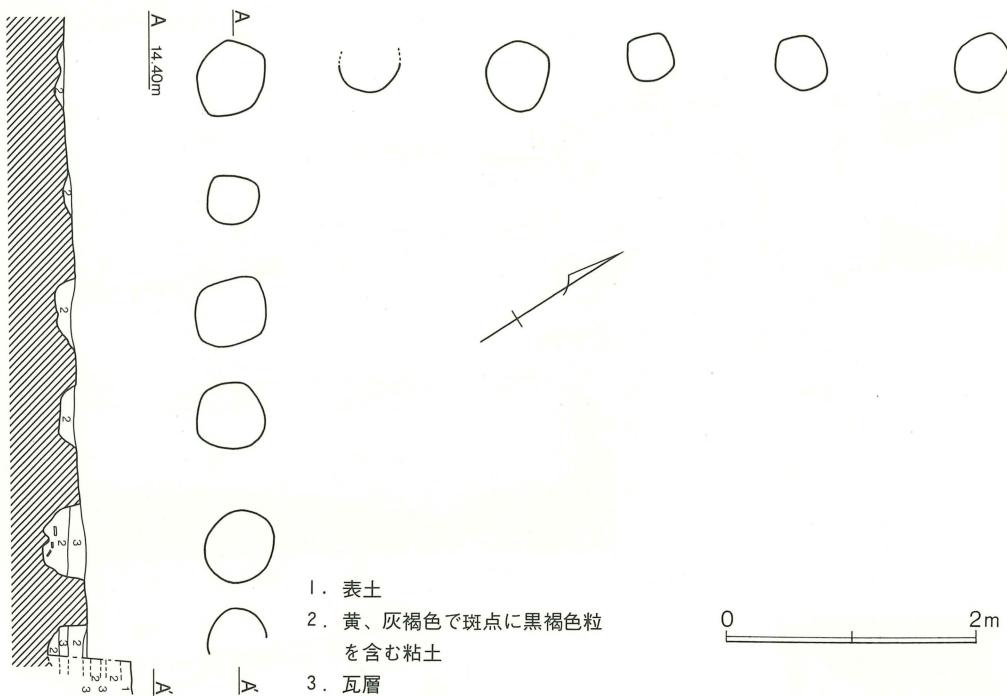


第128図 地下式坑(4)

## 5. 建物跡

20・21-C・D区に検出され、17号溝の埋没後に建てられている。発掘区で確認されたのは2辺であり、北西側・南西側とも5間確認できたが、長さは北西側6.48m、南西側5.0mを測り、南西側の方が間隔が狭い。柱根は土坑を掘り粘土と瓦の互層で突き固めてある。遺構は長島氏の宅地内にあるが、明治12~13年頃建てられたという(第129図)。

遺物は突き固めるのに使った瓦だけである。



第129図 建物跡

## 6. グリッド出土遺物

グリッド出土遺物として、砥石・鉄滓・陶磁器があげられる。

砥石は図示しうるものが20点ある(第130・131図)。所属時期については、焼土遺構・溝から出土する例と類似することから、幕末以降と考えられる。石質は砂岩あるいは凝灰質砂岩がほとんどであるが、1と6が硬質の砂岩であった。形態の上から端部も丸く使用したものと、広い平面をとる2種に分けられる。前者は2・8・9・11・13・16・18・19があげられ、いずれも厚みのない小さい例が多い。この中で最大の例は2の長さ8.9cm、幅3.7cm、厚さ1.8cm、重さ100gであった。最小例は18の長さ3.2cm、幅2.2cm、厚さ2cm、重さ16gと非常に小形品である。次に後者はやや大形品が多く、使用してない面もある。3・4・7・10は未使用の面に、幅1~1.2cmの鑿の跡が見られる。これは砥石製作時の痕跡である。最大の砥石は6の長さ12.3cm、幅5cm、厚さ2cm、重さ233gである。



第130図 砥石(1)



第131図 砥石(2)

砥石の中で刻線状の刃物痕を持つ側が10・14・16・68であるが、刃拵えの跡であろうか。

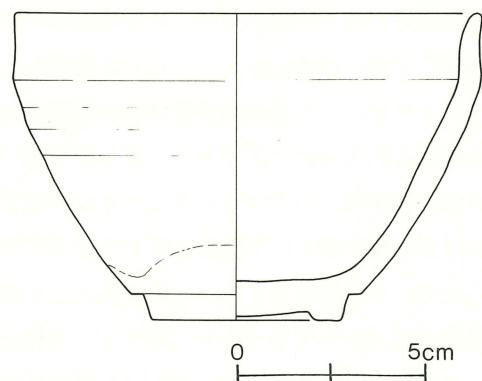
出土地点は30-C区が5点出土して多い方であるが、これは同区に位置する、砥石を出土した焼土遺構との関連が予測できる。

グリッド出土の鉄滓は、図版に乗せた26点（図版50）のほか数点ある。多くは8号溝からと、29-C区付近が多い。鉄滓以外にも製鉄に関する遺物として18の羽口がある。15号溝から出土しており、羽口の先端部である。口には鉄分が多く付着している。炉壁は5・23・26で、5は炉壁内部で苟が多量に入る。23は9-C-8区出土で、表面が黒色に熔ける。26は12-B-13区出土で23と同じである。

鉄滓のうち19は黒褐色を呈し、飴状の肌をもつ流出滓である。破面はやや気孔があり、下面は砂が付着している。重量は89gと重い製鍊滓である。8号溝から出土している。14は16号溝から出土しており、赤褐色の凹凸の多い鉄滓である。部分的に錫が浮いている。重量はあり、100gを計る。20は茶褐色を呈し多孔質で、気孔がはじけ粗雑な肌をもつ。一部飴状の肌を持ち、製鍊滓であろう。重量は99gを計る。15は熔けてガラス質となる部分がほとんどで、木片などを挟み多孔質となる。これは鉄滓で砥石に転用された唯一の例で、ほぼ全面が使用されていた。15のように木片を挟む鉄滓が多く、炉内の残滓の可能性もある。

鉄滓の伴なう時期は不明確である。中世の1号溝付近から、磁石によって砂鉄が採集できたが、この付近出土の鉄滓は少ない。最も出土する地区には近世の遺構が多く、近世に属する可能性が高く、炉壁・羽口の出土から小形の製鍊炉の存在したことが予測できる。

グリッド出土の陶磁器は、溝・地下式坑出土例に比べて少ない。やや古い陶器として1点だけ、天目茶碗（第132図）が出土するので報告する。口径12.4cm、器高8.1cmを測り、腰部から口縁下にかけて直線的に開き、口縁は外反する。高台は糸切り離しのち、削り出している。釉薬は黒褐色の鉄釉が内側と外側の腰部やや上まで施されている。器肉は淡黃白色を呈し、焼き締る。形態から17世紀後半代と考えられる。37-B-5区から検出されたが、36区を中心につけて家があったようで瓦が多量に出土している。この天目茶碗もこの家で所蔵されていた可能性がある。



第132図 グリッド出土遺物

## VII 結語

### 1. 縄文時代の遺構・遺物

久保山遺跡の発掘調査で検出された遺構・遺物は前述したとおりである。遺構としては住居跡6軒、小竪穴2基、土坑33基が確認されている。遺物は住居跡等遺構の覆土中、住居跡と集落内の単独埋甕、包含層中出土土器の3通りの出土状態を示している。これらの土器で遺構に伴うものは各々の遺構単位で報告し、グリッド出土土器は群・類に分類して報告した。当遺跡からは縄文早朝～晩期にわたる土器が出土しているが、遺構が確認されたのは縄文早期条痕文期（野島式）の炉穴、加曽利E式期および称名寺式期の住居跡及び土坑であり、他時期の遺構は確認されていない。

遺構の存在した時期を中心とし簡単に発掘区域内の集落の変遷の概略と土器群の検討を行なってみた。

#### a. 集落の変遷

まず台地中央部に先土器時代の遺物集中が見られる。縄文時代になると台地南端グリッドより、炉穴が検出される。炉穴は8基確認され、6基より土器の出土があった。全て野島式期に構築されたものと思われる。住居跡は確認されなかったが発掘区域内で検出されなかっただけであり、区域外に検出される可能性は大きい。炉穴の配置をみると斜面より約50mの幅で当時期の遺構は存在するものと思われる。遺構の分布は密ではない。前期には花積下層式土器が1個体出土した。台地の南端部分より検出されたものである。また同様に前期中葉に位置する諸磯b式の古い部分に相当する土器片が数十片検出された。中期前葉の阿玉台式および並行型式が若干みとめられる。これらの時期は土器片のみが出土しただけで遺構の存在は確認しえなかった。ただし諸磯b式期は遺物の出土のありかたから発掘調査区域外に遺構の存在する可能性は大きい。加曽利E式期になると、集落の構成も拡大されてきており、<sup>(1)</sup>IX b期になると1号住居跡、4号住居跡が構築される。台地の中央部分に集落が占有するようになるが住居跡にかたよっており、土坑等の検出は少ない。集落内における立地の差として認識されるのであろうか、住居跡以外からの遺物の出土は少なく、発掘区域内においては住居跡と2、3の土坑により集落は構成されている。つぎにX期になると台地全体に集落が拡大されてきており、35グリッド付近（中央の広場）以外ではほとんど遺物の散布が認められるようになる。住居跡は南端に5号住居跡、6号住居跡が存在し10～20グリッド付近には若干の土坑が築造されはじめられる。また20～30グリッド付近には単独埋甕が検出された。XI期には南端に小竪穴、北端には土坑が若干検出される。立地の密度は低いが台地全面を集落として使用しており、集落内における土地利用の分割化として理解できるであろう。XII期になると台地北端部に遺構が築かれ、土坑が多数検出されるようになる。3号住居跡が土坑と同一の区域内につくられていた。検出された土坑のほとんどが当時期につくられたものと推定される。形態、深さも多種類にわたっている。後期前葉～晩期の土器は多時期にわたって台地全体よりまばらに出土したが、北辺よりの出土の割合が多い傾向にあるといえよう。当遺跡での各時期の台地上での変遷の概要を述べたが遺構の存在する時期をもう一度整理してみると、早期（野島式期）は台地南端に炉穴が営なまれ、中

期加曽利E式期まで遺構の築造は中休みの状態になる。IX b期になると住居跡が2軒台地の中央部に築かれた。XII期になると南端に住居跡を築き、北辺に土坑が築き始められる。XIII、XIV、後期初頭の時期には台地北辺を占有し住居跡、土坑が検出され、中央部には小竪穴がつくられる。これ以降の時期には何らの遺構も検出されていない。

#### b. 土器

遺構にともない出土した土器を中心とし若干のまとめをおこないたいと思う。早期の土器は田戸下層式一片を除いては条痕文の施された土器であり炉穴内およびグリッドから出土したものである。破片のみであり器形や全体の文様が明らかなものは出土しなかった。当型式の土器の研究は近年子母D式土器の型式学的内容を検討することにより論考が行なわれている。<sup>(2)</sup>またいくつかの野島式土器の研究もみられる。<sup>(3)</sup>又当期に属する大遺跡の発掘調査報告の未刊行も当型式の進展を阻害している一要因としてあげることができる。<sup>(4)</sup>

中期に属するものはIX b期に属するものが1号住居跡、4号住居跡で検出された。1号住居跡では図化された2個体と1個の大型破片が出土している。口縁部は○字状の文様を有し、地文に撚糸文を施こし頸部は無文化する。真直に垂下する懸垂文と蛇行する懸垂文の施された胴部の土器クランク状の降帶を口縁部の文様とし頸部は無文化する土器が出土している。4号住居跡は口縁部の地文に縦に刻んだ沈線をもち隆帶を貼付する2個体の小形深鉢形土器と浅鉢形土器が出土している。4号住居跡はIX b期の典型的な土器群である。1号住居跡は文様帶のあり方よりX期まで下がる可能性も多いにありうる土器群である。XII期の土器は5号住居跡、6号住居跡の炉甕および2・3号埋甕があげられる。これらの土器のうち6号住居跡の炉甕、2・3号埋甕の文様は当XII期の土器の内部にあっては傍流として認識できる土器群である。6号住居跡の土器は口縁部文様帶が加曽利E式の伝統を色濃くうけついだ文様構成を示している。胴部の文様は渦巻文を有する土器であり、隆帶によりはっきりと施文されている。2号埋甕も同様に胴部に渦巻き文を施文している。口縁部は欠損しているため不明である。3号埋甕は口縁部文様帶に「J」字状の文様を有し、胴部には懸垂文を施すものである。これらの土器は加曽利E式土器の本系統にあるのではなく、栃木・福島地方を中心に展開する大木式系統の土器として指摘することができよう。なおこれらの土器の文様が埋甕、炉甕として採用されることが多い事実は指摘されている。しかし本時期の住居跡は掘り込みが浅い場合が多く、覆土中・床面に土器の検出されることも少ないため埋甕のみが検出されることも少なくない。遺構出土土器の再検討により、この問題も解決できるものと思われる。XII期には2号小竪穴出土土器、1号埋甕がある。小竪穴出土土器は断面カマボコ状の隆帶による貼付文が見られる。<sup>(5)</sup>これらの土器は加曽利E式の祖形をなす土器として指摘されており、この土器の出自をあぐっては不明の点も多く、今後の検討課題の1つになろう。1号埋甕は両耳壺であり、口縁部文様帶を区画文により構成するものである。胴部は櫛歯条線が施文されるものである。繩文と櫛歯条線の組み合わさった土器も類例が豊富になりつつある。なおこの両耳壺は通常のものより胴部が長く、あたかも深鉢形土器に耳をつけたようにもおもえる。XIV期には1号小竪穴、33号土坑出土土器に代表される。1号小竪穴出土土器は沈線により文様が構成され、渦巻き文や「J」字状の文様を有している。33号土坑出土土器は微隆起線文を主たる文様とし、胴部文様として沈線文を採用

するものもある。同一遺跡内における異なった系統の土器の出土状況を示すものとして大変興味深い。後期初頭の土器は11号土坑出土土器、5号埋甕に代表される。11号土坑の土器は「J」字状の文様が2段にわたる文様構成をとっている。縄文の充鎮される部分が通常の土器と異なっており、普通文様が施文される幅の広い部分に縄文を施文するものである。また5号埋甕は口縁部文様は欠損しており不明であるが2段構成を有する土器であることは明らかである。1段目には沈線区画外に文様を施文し、2段目には区画内に縄文を充鎮する施文方法を採用している。その他の土器は破片であり全体像は不明である。大型2個体の土器はともに称名寺I b式に含まれるものであろう。グリッド出土土器の中には称名寺II式、堀之内1式や綱取式との関係を有する土器もあり今後検討しなければならない。住居跡等での出土は少なく土坑内出土土器等今後の検討しなければならない課題であろう。堀之内1式以後の土器は包含層の上部や近世、近代の溝中から出土したものであり、また大型破片の出土もない。

(大塚孝司)

### 註

- (1) 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要(1982)「縄文中期土器群の再編」による。  
IX期～XIV期までが加曾利E式に含まれており IX a、X、XI XII a XIII b、XIII、XIV期の7期に細分している。  
小川和博 1981 「子母口式土器についての覚書(1)」なわ第19号。
- (2) 安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討」東京考古1  
瀬川裕市郎 1982 「子母口式土器再考」沼津市歴史民俗資料館紀要6等の論考がある。
- (3) 瀬川裕市郎 1982 「条痕文式土器」縄文文化の研究3 縄文土器I  
瀬川裕市郎 1983 「野島式土器に関する2.3の覚え書き」沼津市歴史民俗資料館紀要7  
金子直行 1982 「野島式土器について—金平遺跡出土土器を中心として—」土曜考古第6号  
例えば
- (4) 千葉市島鳴東遺跡や船橋市の飛ノ台貝塚は発掘調査が行なわれたが概報や市史で報告されているので詳細については不明である。  
小西ゆみ 1982 「船橋市後貝塚発見の土器」史館13  
江森正義 1971 「成田市中岡護台遺跡出土の中期縄文式土器」下総考古学1

## 2. 陶磁器について

久保山遺跡出土の陶磁器は多いが、中世と近世の陶磁器について触れてみる。

まず中世陶器は1号溝出土の渥美産高台付片口鉢と甕胴部破片、および10-C-22区出土の常滑系の甕である。10-C-22区出土側はグリッドが1号溝と重なることから、他の中世陶器と同様1号溝に伴うと考えられる。

まず1号溝出土の高台付片口鉢であるが、形態から見るに渥美・常滑いずれにも類似する例はあるが、胎土から見るに渥美産である。<sup>(1)</sup>常滑焼の編年を緩用するならば杉崎章氏の第二型式前期に、<sup>(2)</sup>また赤羽一郎氏の編年では第II型式に該当し、13世紀前半の年代が推測される。<sup>(3)</sup>

すでに埼玉県下の古瀬戸・常滑などの蔵骨器について、浅野晴樹氏によってまとめられている。<sup>(4)</sup>これらの製品は性格上壺・甕・瓶子など、器種が限定されている。

このような限定された製品とともに、日常生活用品が少なからず入って来ていると考えられる。当報告の久保山遺跡をはじめ、近年の調査により常滑・渥美産の高台付片口鉢が検出されており、どのような階層が取り入れたものか注目される。また生産地で片口鉢とともにつくられた山茶碗が全く入っていない点も考慮する必要があろう。

高台付片口鉢は15・16世紀に至り、県下では在地産の軟質擂鉢あるいは美濃産の鬼板釉の掛かる硬質擂鉢にとって変わられるようである。

次に1号溝出土の縦長の長方形格子叩きの施こされた甕(第120図2)を見てみよう。この甕は胎土の粗い点、青灰色であることなど在地産の可能性も考えたが、叩き・胎土の類例が渥美にもあることから、高台付片口鉢同様渥美産と考えられる。<sup>(5)</sup>

久保山遺跡には遺構に伴うものではないが、近世前期と考えられる天目茶碗がある。この天目茶碗は腰部から口縁下にかけて直線的に開き、口縁において外反する。黒褐色の鉄釉は高台にはかからず、器肉は淡黄白色を呈しており、美濃産と考えられる。類例は田ノ尻窯など多くの窯に見い出すことができる。樺崎彰一氏は報告の中で窯の年代を17世紀第II四半期から中葉代にかけて操業されたと考えられている。<sup>(6)</sup>

最近の調査においても溝跡などから多くの天目茶碗・香炉・皿などが出土するが、15世紀から16世紀および江戸前期の瀬戸・美濃産が主体である。このような消費地における皿および天目茶碗・香炉などの出土のあり方は、生産地でのあり方に符合している。

瀬戸では鎌倉から南北朝までは、四耳壺・瓶子・花瓶・香炉など、藏骨器や社寺を対象とした祭祀用具が顕著であるというが、室町時代には天目茶碗・茶入・灰釉平碗・小皿類など、消費都市を対象として日常用具類が焼かれたという。また茶の湯の流行により、茶陶類が多く作られたという。<sup>(7)</sup> たしかに埼玉など消費地における天目茶碗の出土量は多く、生産地との符合を示しているが、この現象がはたして消費地による茶の湯の流行が原因なのか、今後検討が必要であろう。この検討方法としては、天目茶碗の出土遺構から、使用した階層を推定すること、共伴した遺物から天目茶碗を喫茶に使用したか推考することが必要であろう。

(酒井清治)

## 註

- (1) 産地については樺崎彰一氏に鑑定していただいた。
- (2) 杉崎 章「高坂古窯跡群」『常滑市文化財報告』第10集 常滑市教育委員会 1981
- (3) 赤羽一郎ほか「常滑・渥美」『日本陶磁全集』8 中央公論社 1976
- (4) 浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(1)——藏骨器を中心にして」『研究紀要』第3号 埼玉県立歴史資料館1981
- (5) 註(3)の図版76
- (6) 樺崎彰一『田ノ尻窯』 端浪市教育委員会 1981
- (7) 樺崎彰一「瀬戸・美濃」『日本陶磁全集』9 中央公論社 1977

## VIII. 付 編

### 黒曜石の分析

**1. 資料** 本調査区内ブロック 1 から 3 点、ブロック 2 から 3 点の計 6 点を分析資料として抽出した(第1図、第1表)。ブロック 1 はナイフ形石器を指標とする先土器時代に、ブロック 2 は野島式土器を含んでおり縄文時代早期後半に属すると考えられる。黒曜石は、いづれも夾雜物が少なく透明度も高いため、母岩別に分けることはできなかった。従って分析資料の抽出に当たっては、異なる母岩からということよりも、分析に適する平坦な剝離面を持つ形態という点に意を払った。

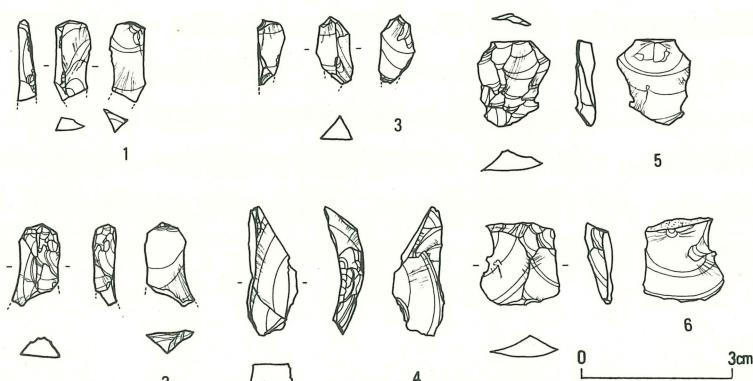
分析は、国立科学博物館人類研究部 松浦秀治氏に依頼した。

**2. 原産地** 6 点とも信州系であったが、ブロック 1 の 3 点は和田峠グループに、ブロック 2 の 3 点は霧ヶ峰グループに属するという分析結果であった(第1表)。

Suzuki (1974)で約 2 万年以降の南関東地域への黒曜石の流入を見てみると、信州系と箱根系が相半ばし、これにわずかの神津島系が混じる。これに対し北関東では、相対的に資料数は少ないながらも、100%信州系が占めており箱根系・神津島系は皆無である。しかしながら、これらの資料からは、比企丘陵から大宮台地に至る埼玉県央部、換言するならば関東地方の中央部とでも呼べる地域の遺跡がほぼ完全に抜

け落ちている。このために「北関東」と「南関東」を対比的に取り扱うことで、より鮮明に黒曜石の供給源の差が現われたものと思われる。

ところが、Suzuki の前述の所論以来すでに 10 年に亘るとするが、考古学的には問題はあまり深化したとは言えない。その原因の一つは、Suzuki の結論をもってほぼ黒曜石流通の概要を把握できたと考えてか、黒曜石の分析事例そのものがあまり



第1図 黒曜石分析資料

第1表 黒曜石分析結果

遺物番号	推定原产地	水和層年代 (kyr)	図番号
ブロック 1	110	和田峠グループ	16.3
	92	和田峠グループ	13.8
	232	和田峠グループ	16.2*
ブロック 2	61C-15	霧ヶ峰グループ	13.9
	61C-44	霧ヶ峰グループ	6.8
	61C-335	霧ヶ峰グループ	6.6

\* 約 9 万年前の面も観察された。

増加していないことがあるのではあるまい。事実、先の関東地方中央部でも遺跡の発掘調査例は増加して来ているが、黒曜石の分析例は知らない。前述の様な背景を持った「北関東」と「南関東」の移行帶に位置するからこそ、この地域の分析データがより一層重要となるのである。

たとえば、前記論文で利用されている先土器時代末の大宮台地の二遺跡は、いずれも信州系の黒曜石のみとなっている。これに対し、荒川を越えた狭山遺跡では神津島系が、鈴木遺跡では箱根系が(鈴木1980a.b.)、それぞれ信州系とともに知られている。現段階では、分析例が少な過ぎるためにこの結果を評価することは難しいが、例数が増加することで荒川が持つ流通の障害としての意味の大きさも判断することができよう。このことは、さらに石器群の組成や形態を加味する時、台地単位で集中する遺跡群、すなわち地域集団間相互の関係の評価にまで発展する可能性を秘めているのである。

**3. 水和層年代** 年代測定の結果は第1表の通りである。ブロック1の《16.2、16.3》、ブロック2の《6.6、6.8》は各ブロックの理科学的年代を示すものとして、考古学的な所見と大きく矛盾するものではない。ところが両ブロックとも、一例ずつ異質な年代を示す資料を含んでいる。ブロック1では《13.8》、ブロック2では《13.9》の年代を示す資料である。ブロック1では他より2千年新しい。ブロック2では同じく7千年も古い値を示している。

測定年代に差が生じる原因としては、水和層厚の読み違いによる誤差を考えねばならない。しかし、和田峠・霧ヶ峰グループの黒曜石は水和速度が早く、読み違いによる測定年代の誤差は、1.5万年前の資料でも300~350年止まりである(松浦1982参照)。従って、ここから判断する限り今回の分析結果に対しては別の解釈が妥当のようである。

まずブロック2については、先土器時代の遺物の混入と再利用が考えられる。そこで《13.9》の年代を出した61C-15の出土地点を調べると、ブロックの北縁に近く、レベル的にはやや浅い所に分布する。これを、ブロック及びその周辺の遺物分布の中で考える時、周辺に先土器時代の遺物分布域が確認されていない以上、それらが混入した可能性は薄いように思われる。一方、先土器時代の石器の再利用については、これも積極的に支持する材料には欠けるが、逆に否定的な材料も欠いている。従って二者択一的に言うならば、再利用の可能性の方が高いようである。

ブロック1はどうであろうか。こちらは、ブロックの年代の方が《13.8》より古いのであるから、ブロックの主体を形成した人々による《13.8》の資料の再利用の可能性は消える。それでは、ブロック1は約1.6万年前と1.4万年前位の二度に渡って残されたものの集積と考えるべきなのであろうか。しかし、《13.8》の出土地点はブロック東縁近く、垂直分布でも中葉に位置しており、異なる二時期の遺物が混じっているとは考え難い状況にある。遺物分布の集中度もブロック2に劣らず求心性が高く、本ブロックの単位性を補強しているかに見える。これらから判断すると、たとえ考古学的に検証する手段を持たずまた代わるべき可能性の提示ができないとは言え、理科学的方法による成果にすぐさま迎合することは慎しみたいと考える。

ブロック1・2について示した問題点の解決法として、一つには両ブロックからさらに多量の分析資料を抽出し、今回の分析結果がブロック内でどの程度の普遍性を持つか再検討することが望まれる。限られた考古資料の中での困難な課題ではあるが、可能な限り数多くの資料を分析することが、

こうした問題点の解決策と考える。

(山下秀樹)

註

Suzuki, M. (1974), Chronology of prehistoric human activity in Kanto. Japan

Part II Journal of the Faculty of Science, The University of Tokyo. Section V, Vol. IV,

Part 4.

鈴木正男 (1980a) 「鈴木遺跡出土黒曜石の放射化分析」『鈴木遺跡II』所収 鈴木遺跡刊行会

鈴木正男 (1980b) 「黒曜石分析」『鈴木遺跡III』所収 鈴木遺跡調査会

松浦秀治 (1982) 「縄文時代の理科学的年代決定について」『縄文文化の研究 I』所収 雄山閣

## IX 付 表

### 石器一覧表

1. ブロック1 石器一覧表
2. 5号住居跡石器・礫一覧表
3. ブロック2 石器・礫一覧表



## 1. ブロック 1 石器一覧表

遺物番号	グリッド	位置(cm)		標 高	類 別	石 質	接 合 資料番号	挿図番号	備 考
		N	E						
1	26C-10	88	178	13.692	U.F.	Obs		第11図1	9・11と接合
2	26C-9	115	54	13.532	Ch	Obs			
3	26C-10	198	88	13.672	F	Obs	No.2	第20図③	
4	欠 番								
5	26C-14	76	130	13.592	U.F.	Obs		第11図6	
6	26C-14	92	117	13.524	F	Obs	No.1	第7図6	
7	26C-14	20	99	13.584	Kn	Obs		第7図3	
8	26C-14	85	99	13.759	Ch	Obs			
9	26C-14	11	59	13.583	F	Obs	No.13	第11図1	1・11と接合
10	26C-14	32	26	13.545	Ch	Obs			F.T.
11	26C-14	75	40	13.997	F	Obs	No.13	第11図1	1・9と接合
12	26C-14	77	30	13.893	Ch	Obs			
13	26C-15	79	188	13.7	Ch	Obs	No.5	第23図①	
14	26C-14	96	38	13.577	U.F.	Obs	No.10		
15	欠 番								
16	26C-15	53	132	13.557	U.F.	Obs	No.10	第11図7	
17	26C-15	102	40	13.64	F	Obs	No.1	第19図①	
18	26C-15	24	56	13.912	Kn	Obs	No.11	第7図4	49と接合
19	26C-15	37	30	13.867	Kn	Obs	No.12	第7図5	55と接合
20	26C-15	56	80	13.532	Ch	Obs			
21	欠 番								
22	26C-15	83	90	13.884	Ch	Obs			
23	26C-15	80	75	13.578	Ch	Obs			
24	26C-15	95	120	13.657	U.F.	Obs	No.4	第9図11	
25	欠 番								
26	26C-14	144	114	13.537	F	Obs	No.1	第8図4	
27	26C-14	195	121	13.782	Ch	Obs			
28	欠 番								
29	26C-14	105	30	13.59	Ch	Obs			
30	26C-14	112	40	13.642	Ch	Obs			
31	26C-14	116	8	13.612	F	Obs		第10図5	
32	26C-14	124	13	13.655	Ch	Obs			
33	26C-14	155	22	13.705	F	Obs	No.1	第19図⑯	
34	26C-14	158	12	13.674	Ch	Obs			
35	26C-14	149	82	13.597	F	Obs			
36	26C-14	170	70	13.9	Ch	Obs			
37	26C-14	179	55	13.655	Ch	Obs			
38	欠 番								
39	欠 番								
40	26C-14	189	4	13.597	F	Obs			
41	26C-15	107	199	13.517	Ch	Obs			
42	26C-15	108	183	13.637	F	Obs	No.1	第7図7	